

Aqours☆HEROES

ルイボス茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時代の、あり得た世界の一つの話。

9人の少女たちの、それぞれの願いをかけた闘い。

目次

運命のカード	1
その少女・・・	4
戦いの決断	6
どうしてあなたが敵なのか	9
届かない星だとしても	14
SKY JOURNEY	17
変わる運命	20
鉄仮面伝説	24
黒いとびらの向こう	28
空も心も晴れるから	33
スリリング・ワンウェイ	40
ライダー集結	44
ハミングフレンド	48
夢と現実の狭間	53
そして繋がる みんな繋がる	58
嘆きのナイト	64
知らない情熱	69
ゆれるこころの迷いを	73
失敗もあるけど	78
夢で夜空を照らしたい	84
Strawberry Trapper	91
王蛇の秘密	97
元気全開DAY!DAY!DAY!	101
友情ヨーソロー	109

友情ヨーソロー2	115
トリコリコPLEASE!!	121
英雄は戦う	127
復活の日	133
Daydream Warrior	140
友情ヨーソロー3	147
未熟DREAMER (いつもそばにいても)	153
未熟DREAMER (言葉だけじゃ足りない)	159
未熟DREAMER (わかって欲しいと)	165
未熟DREAMER (夢の海を)	171
未熟DREAMER (嵐が来たら)	177
未熟DREAMER (その時見える光)	183
少女と王蛇	190
想いのかけら	196
ジングルベルがとまらない	202
キミのことが	207
叶えたい願い	214
13号ライダー	221
ふたりのキモチ	226
シャイニーを探して	232
最後の日	237
おやすみなさん!	242
ガラスの幸福	246
友情ヨーソロー4	251
Aqours☆HEROES	256



運命のカード

静岡県沼津市、富士山を望む、潮風が心地よい海辺の町。太陽はその日の頂点に達していた。

その、鏡の中。ミラーワールドと呼ばれる世界。

「これで・・・最後!!」

白銀の戦士はそう叫びながら、自身が持つ斧型の機械にカードを差し込んだ。

無機質な声が鳴り響く。

『ファイナルベント』

「やっとおわったよう！お腹すいた・・・。」

千歌はそう言いながら、ベルトのカードデッキを抜き取る。同時に、千歌をまとっていた白銀の鎧が消えていく。

「千歌ちゃん、お疲れ様。」

鏡の中から出てきた千歌の元へ曜が駆け寄る。手に持つペットボトルを渡しながら会話が続く。

「ヒーローも大変だね、いつもお疲れ様であります！」

「ありがとう曜ちゃん。でも、この力はね、私がずっと望んでいたものなんだと思う。何かしなきゃって、このまま普通でいいのかって悩んでいた私が手に入れた、私にしか出来ないこと。」

千歌がこの不思議な力を手にしたのは、高校1年の3学期が終わろうとしていた時だった。

甲高い音が聞こえたと思うと、鏡の向こうに誰かがいた。性別も、年齢も思い出せない。

ただ一言「闘え。」そう言いながらカードデッキを差し出されたことだけが、千歌の記憶に残っている。

「千歌ちゃんは偉いよ、そうやって手に入れた奇跡を人のために使うんだから。尊敬するであります！」

曇りの無い笑顔を千歌に向ける。千歌も笑ってそれに答えた。

「それよりお腹すいた〜。ねえ曜ちゃん、どこか寄っていきようよ！」
「よしきた！実は前から気になってたお店があつてね・・・」
声を弾ませながら、二人は市街へと歩いて行った。

同時刻・東京

少女は鏡の中の自分を見つめていた。

「ついに・・・始まるのね。」

不安が入り混じながらも、その意志は固い。

その胸に想いを仕舞い込んで。

言い聞かせるように、見つめなおして。

一つ、大きな深呼吸をして、少女―梨子―は沼津へと発った。

掌にあるのは、紅色のカードデッキ。

【side千歌】

私はこのまま、普通のまま日々を過ごすんだって。そう思っていた。

朝起きて、ご飯を食べて、学校にいて、友達とお話をして、一日が終わって。

それは、とても幸せなことなのかもしれない。普通の日常を当たり前で過ごすことができる、贅沢なことですらあるだろう。

けれど、違う。いつも考えていた。何かしなきゃ、と。このまま普通で終わっていいのかと、自分に問いかけ続けていた。

奇跡は突然やってきた。普通の日が始まる、その朝のことだった。

鏡の中の人物は私にカードデッキを渡した。「闘え。」それだけ言いながら。

それからの毎日はこれまでとは大きく違った。

人を襲う怪物、腰に巻かれたベルト、私を覆う白銀の鎧、鏡の中の世界「ミラーワールド」。

少しずつ、私は理解した。同時に、少しの高揚感を覚えた。普通の日常に突然訪れた「それ」は、私を大きく変えた。私はヒーローだ。この町の平和を守る、ヒーローなんだ。これだ。私が普通の自分に求めていたものは。私は輝いているだろうか、特別になれただろうか。この力が、私にそれを教えてくれると、そう信じて。

ヒーロー、高海千歌。輝き目指して今日も頑張ります！

その少女・・・

4月、新年度を迎えた千歌と曜の通う学校―浦の星女学院―に転校生がやってきた。

始業式を終え、早めの帰宅となった千歌と曜はその帰り道、転校生の話で盛り上がっていた。

美人で、髪が綺麗で、大人っぽくて、まさに都会の女性。

どうしてこんな田舎に越してきたのだろう。住んでいたという東京ではどんな友達がいたのだろう。

本人しかわかるはずのない疑問を抱きながら歩みを進めた。

キイイイイイイイイイイイイイ

突然、千歌が歩みを止めた。

それは、いつも突然聞こえてくる。

あいつらがいることを示す、甲高い音。

千歌は近くの鏡を探し始める。

曜も千歌の反応から状況を察し、一つの物置小屋を指示する。建物のガラス窓が反射し、鏡面が浮かび上がっていた。

「千歌ちゃん！あそこなら人目につかない！」

その言葉に力強く頷くと、千歌はすぐに物置へと駆け寄る。

スクールバッグからカードデッキを取り出し、鏡面へとかざした。腰にベルトが現れる。

「変身！」

叫びながらバックルへカードデッキを差し込み、千歌は白銀の戦士へと姿を変える。

「しゃっ！」と意気込み、千歌は鏡の中へと消えていった。

鏡の中で戦う千歌を見守りながら、曜は千歌の話を思い出していた。

怪物が現れるとき、決まって甲高い音が聞こえる。

怪物が成長すると、鏡の中からこちらの世界へ出現し、人を襲うよ

うになる。

それを防ぐため、千歌は変身して戦っている、らしい。

何度も現場に遭遇するうちに、これが現実だと受け止めることができるようにはなったが、今でも夢なのではないかと疑ってしまう。

今も目の前で戦っているのだからと、自分に言い聞かせ千歌を再び視界に入れる。

その異変に、曜はすぐ気付いた。

「紅色の・・・鎧？」

千歌は困惑していた。

自分以外の人物がここにいることに。敵か味方か判断できないことに。

そも、本当に人なのかさえ。

鎧の戦士は千歌の視線に気付きながら、しかし目の前の敵への攻撃はやめなかった。

『ファイナルベント』

無機質な機械音が、その空間に響き渡った。

「あなたは誰?！」

我ながら、なんと頭の悪い質問だろう。

千歌は自分の語彙を恨む。しかし、それ以外に言葉は見つからない。

紅の鎧の戦士は、それに答えるように変身を解いた。

仮面の下の素顔があらわになる。

その顔を見た千歌には、その人物に心当たりが確かにあった。

「あなたは・・・転校生の・・・」

事の成り行きを見守っていた曜も、自身の鼓動が早くなっていることを感じていた。

「桜内・・・梨子さん・・・?！」

長い髪が風に揺れる。

その少女は、静かに微笑んだ。

戦いの決断

「ごめんなさい、まだここに越してきたばかりで名前を憶えられていないの。私は桜内梨子、あなたたちの名前を教えてください？」

梨子の提案により、鏡の外にいた曜含む三人は近くの喫茶店へ場所を移していた。

千歌は自分と曜の名前を梨子に伝える。梨子はその名前を小さく復唱してから、話を始めた。

「こんなにはやく見つかるとは思わなかった。あなたがタイガなのね。」

千歌は聞きなれない単語に首をかしげる。たいが？歴史のドラマ？

その疑問はいつの間にか声になっていた。

「たいがは見たことないなあ・・・難しいからなあ・・・歴史・・・」
千歌の不思議そうな顔を見て察したのか、梨子が今度は質問する。

「もしかしてあなた、それが何かわからないの？」

ヒーローになれる不思議な力、そう千歌が答えると梨子は驚きとも呆れともとれる表情を見せた。

「まさか、知らずに変身していたなんて・・・。いいわ、その力が何なのか教えてあげる。」

梨子は千歌と曜に一つの単語を伝えた。

「その力はね、仮面ライダーと呼ばれる力よ。」

仮面ライダー。

カードデッキを与えられ、鎧の戦士に変身する者たちはそう呼ばれている。

デッキにはそれぞれモンスターの力が宿っており、それにちなんだ名前でライダーも呼ばれる。

千歌はタイガ、梨子の変身した紅色の戦士はライアと呼ばれている。

ライダーたちは自身の持つカードを駆使しながら最後の一人にな

るまで戦う。

そして最後の一人となった者は、自身の持つ願いを叶えることができる。

そのため、デツキは強い願いを持つものにしか与えられない。

なお、今回の戦いの舞台が沼津のミラーワールドであり、すでにこの戦いの参加者はすべてこの地にいるという。

情報が多すぎて何を言っているのか千歌には未だピンと来ていなかった。

隣で曜が梨子に尋ねる。

『仮面ライダー』っていうけど、千歌ちゃんも梨子ちゃんもライダーって呼べるような乗り物乗ってなかったよね?」

梨子はそうね、と同意しながらそのことについて説明した。

どうやら、この戦いは今回だけでなく過去にもあり、その時の呼び名が定着して今に至るらしい。

と、千歌が話の流れを遮って質問する。

「人同士で争いあうってこと?なんで?そんなのダメだよ。」

梨子の表情が険しくなるのを曜は感じた。

「誰かと争ってでも、叶えたい願いが、望みが、夢があるの。この戦いに選ばれる人たちは皆そうよ。」

あなたもね、千歌さん。曜さんにだってあるはずよ。」

そういつて曜のほうに視線を向けると、曜は困ったようにして、わたしはどうか、と口にした。

「でも、そのために誰かを傷つけるなんてまちがってるよ。」と千歌が言う。

梨子はため息を一つこぼす。

なんて立派な子なのだろう。それでも、この子の根底にあるものはきつと……。

飲みかけのアイスティーに自分の顔が映っている。それでも私は、勝たなければいけない。

そう自分に言い聞かせると、梨子は席を立った。

「今日はありがとう、二人とも。また学校で会いましょう。そのときは二人みたいに、ちゃん、で呼ぼうかしら。」

「どんどん呼んでよ!!千歌ちゃんって!梨子ちゃん!」

千歌はさつきまでの雰囲気になかったかのようににはしゃぐ。

その横で曜が最後に、と質問した。

「どうして、さつき千歌ちゃんを攻撃しなかったの?」

「わたしだって、初対面の人をいきなり殴る趣味なんてないわ。でも、そうね。これから戦いは加速する。」

たぶんそうやって言えるのも今日が最後かな。だから、次ミラーワールドで会ったら、その時は、ね?」

梨子の少し寂しそうな表情に千歌は、そんな・・・と漏らす。

それと、と梨子が付け加える。

「これは私の予想なんだけど、おそらく他のライダーも私たちのすぐ近くにいるわ。」

あなたたちもよく知っている人かもしれない。それじゃ、また。」

そう言い残して、梨子は店を後にした。

同時刻・黒澤邸

黒髪の少女は鏡の前にいた。

「止まりませんのね、もう。」

そう言いながら、カードデッキを鏡にかざし呟いた。

「変身。」

少女たちの戦いが、始まる。

どうしてあなたが敵なのか

自室で一人、千歌は考えていた。

誰かを助けるためにあると思っていたこの力が、元をたどれば自分の願いをかなえるための私欲の力だったなんて。

いや、それよりも。

私の叶えたい願い、この力はそれに導かれた・・・？

私の願い？わからない、どうして私なの。

いや、もしかしたら。

その先は考えたくなかった。

答えを出すことを、自身が拒絶した。

キイイイイイイイイイイイイ

悩む千歌をあざ笑うかのように、音が鳴り響く。

今は目の前の敵を、そう自分に言い聞かせてカードデッキを鏡にかざした。

「最後・・・！」

斧型の武器―デストバイザー―がカード名『ストライクベント』を告げる。

昨日、梨子がこの武器は召喚機と呼ばれていると教えてくれたことを思い出しながら、出現した鉤爪で

敵にとどめを刺す。

しかし、千歌は違和感を覚えた。

敵は確かに撃破した。目の前の残骸も消え去ろうとしている。

しかし、手ごたえがなかった。

悪い予感が、千歌の脳裏をよぎる。

振り払いながら、視線を横に移す。

予感は的中した。

「昨日ぶりね、高海さん。」

心臓は、今にもはちきれそうだった。

『次に会ったとき』、こんなに早いなんて。でも、覚悟してね。」

『アドベント』

梨子は契約するエイ型のモンスター——エビルダイバー——を召喚し、攻撃の令を下した。

エビルダイバーの攻撃を鉤爪で受けながら、千歌が問う。

「どうして……。なんで戦わなきゃいけないの……。」

「私にも、願いがあるからよ。どうしても叶えたい願いが。」

そう言うと、小さく梨子が呟いた。

『次』がここでなければ、もしかしたら……。」

千歌はその言葉の意味を考える間もなく、エビルダイバーに押されていた。

このままでは話すこともできない。

猛攻に耐えながら、デッキからカードを取り出した。

『アドベント』

千歌の契約モンスター、デストワイルダーが現れる。

白虎のようなそれが、エビルダイバーを抑え込む。

千歌が叫ぶ。

「やっぱりライダー同士が戦うなんておかしいよ！」

梨子が問う。

「じゃあ、あなたはその力をどうしたいの？」

一瞬ためらいながらも、千歌が答える。

町の人を救う力であってほしい、私利私欲のためでなく、みんなが平和に生きていけるために、と。

梨子はその言葉を聞き、思った。そしてそれを口にする。

「高海さん、あなたのそれは、エゴでしかないわ。」

ミラーワールドで起こったことは、私たち以外には認知されない。もちろん、ミラーモンスターが、例えばクラスメイトを

襲ったとしても、他の人はそれに気付かないのよ。その人は最初からいなかった、と思われるの。」

千歌が動揺する、でも、それでも……。

「それでも、と思うでしょう？」

高海さん、あなた、なにか特別になりたいと思っていたんじゃないかしら。

仮面ライダーになったとき、こう思ったでしょう？『ヒーローになった、と。』」

梨子が続ける。

「でもね、周りから見たらあなたは今までと同じなの。戦ってることも知らない。救われてることも知らない。」

あなたは、言うならば孤独のヒーローなのよ。それでもあなたは戦わないというの？それが願いなのに。」

千歌に言葉はなかった。

最後に、梨子はこう告げる。

「それにね、ヒーローはなろうと思ってるものじゃないでしょう？ヒーローになろうとした」

その時に、失格なの。だから、あなたもいきなり、ね。」

千歌はなにも考えられなくなった。

考えたくなかった。

考えようとしなかった、考えることを拒んだ、この言葉のすべてを、梨子に言われたから。

「ああああああああああ!!!」

千歌が言葉にならない声で叫ぶ。1枚カードをデッキから取り出しデストバイザーの挿入した。

『フリーズベント』

発生した冷気でエビルダイバーが凍り付く。

千歌はそれを確認し、攻撃を繰り返そうとした。
しかし。

『コピーベント』

「そのカード、私も使わせてもらおうわ。」

千歌のデストワイルダーも同じように凍り付く。

思考が追いつかない千歌は状況の整理がつかずただただ立ち尽くす。

「終わりね。」

『ファイナルベント』

動揺で攻撃が甘かったのだろう。エビルダイバーの氷が砕ける。

そうして、千歌に攻撃を繰り返した。

無防備に攻撃を受けた千歌の身体が舞う。

タイガの変身が解ける。

千歌はもう一度変身しようと、身体から離れたバツクルに手を伸ばす。

しかし……。

「嘘……。」

バツクルは、梨子の攻撃により破壊されていた。

梨子が歩み寄る。

「じゃあね、高海さん。」

梨子がとどめを刺そうとする。

その時、別の声が聞こえた。

「あら、もう攻撃する必要はないのでは？」

それ以上攻撃するというのであれば、容赦しませんわよ。」

声の主を見た梨子はその姿を見て眩いた。

「龍騎・・・。」

千歌の意識は、そこで途絶えた。

届かない星だとしても

目を開く。

身体が布団の中にあることに気付く。
視界に広がるのが天井だと理解するのに時間はかからなかった。
ただ、それが自分の知らない天井であることを除けば。
窓から日が差している。

朝日だということは、視界に入る時計が教えてくれた。
寝ている身体を起こそうとした。

「あぁっ……！」

身体中を痛みが埋め尽くす。

どこに力を入れれば動くのかさえ分からなくなる。
何とか起き上がろうとするが、今度は痛みで気を失いそうだ。

「どうしよう……。」

眩きながら、また天井を見つめた。

静かに、部屋の障子が開いた。

「目が覚めましたか、高海さん。」

優しく、それでいて芯の通った声が聞こえる。

この声、どこかで……。

寝たままで、何とか顔だけでも声のする方へと向ける。

凜とした、長い黒髪の少女がそこにいた。

消えそうなの、かすれた声でそれを確かめる。

「生徒……会……長？」

「ええ。浦の星女学院三年、生徒会長の黒澤ダイヤです。ダイヤで構いませんわ、高海千歌さん。」

「どうして、私の名前を？」

千歌が疑問を抱いたのと同時にダイヤもそれについて話し始めた。
「元々生徒の数も多くないですし、仮にも生徒会長ですので全校生徒の顔と名前ぐらいは憶えていますのよ。」

言いながら、千歌の元へ寄り腰を下ろす。

「そうでなくても、あなたがライダーである限り、私はあなたを認知で

きます。」

その言葉を聞いて、千歌は思い出した。

仮面ライダー、タイガの力を……。

「事情はすべて把握しています。あなたが桜内梨子さんと戦闘を行ったことも、負けたことも。」

それによつてタイガのカードデッキが破壊されたことも。」

そうだ、梨子ちゃん。あの子を……。

「あ……ぐっ……。」

しかし、身体は反して動かず声が漏れる。

「気持ちはわかります。それでもまずは落ち着きなさい。その身体ではどうにもならないでしょう？それに、頼っていた力だつて失つていきますのに。」

「でも……。」

「落ち着きなさいと言っているでしょう？まずは整理なさい。それから、考えなさい。梨子さんにも言われたでしょう。それはきつと誰よりも、自分自身がわかつていたことであり、感じていたことであり、逃げていたことでしょう。それからまだ逃げているうちは、何も解決しませんわ。」

千歌は何も言えなかった。

「それに、どうせその身体では動くこともできないでしょう。しばらくここに泊まっていきなさい。あなたの家には、適当な理由をつけて話しておきますから。」

申し訳ないと感じたが、この状態を家族にどう話せばいいのか見当もつかないので、好意に甘えることにした。

「何かありましたら呼んでもらつて構いません。しっかり、自分自身と向き合いなさい。鏡の世界の力を使うということは、そういうことです。」

「あ……。」

ひとつ、抱いた疑問をダイヤに投げかけた。

「どうして、ここまで私にしてくれるんですか？」

ひとつ、間をおいてからダイヤが答えた。

「生徒会長、ですから。」

そう言うのとダイヤは部屋から出ていった。

ダイヤが部屋から出ると、一人、隠れて何やらしているようだった。

「ルビィ、そんなところで何をしていますの?」

ルビィと呼ばれた少女は驚きを前面に出した表情をダイヤに向けた。

ああ、話を盗み聞きしていましたのね。我が妹ながらしょうがないことを……。

思いながらため息をこぼすと、ルビィが口を開いた。

「高海さん……大丈夫?」

根は優しいのに臆病だから、いや、臆病だからこそ優しいのか。

一人勝手に納得しながら、ダイヤが答えた。

「ええ、しかしもう少しここにいてももらうことにしました。でも、あなたが心配することはもうありません。」

そっか、と頷いてルビィは小走りでその場から離れていった。

その小さな背中を見送る。

さして、と小さく呟いて、外を見通した。

「私も、決断しなくてはなりませんわね。」

一人、千歌はまた静かに天井を見つめていた。

SKY JOURNEY

千歌が黒澤邸で目を覚ましたのと同じ頃、梨子は淡島にいた。棧橋から、富士を望む。

昨晚の戦いを思い返していた。

タイガのベルトを破壊した。

一つ、私の願いに近づいた。

けれど、胸に残るのは理想に近づいた達成感ではない。

次は自分なのでは、という恐怖でもない。

あの子を戦いから切り離すことができた、その安堵だ。

あの子は、高海さんは、優しすぎる。

このまま戦えば、あの子はさらに辛い思いをすることになるだろう。

だから、これで良かった。

痛い思いをさせた。ひどい言葉も投げかけた。

でも、きつとあの子のさらに奥に秘める正義は、それにも勝るだろう。

ひとつ、心残りがあるとすれば、それは……。

「千歌ちゃん、か。」

だめだ。私はもう人を傷つけた。

切り替えなければ。もう、戻れないのだから。

一つ、深く深呼吸をし、帰ろうと振り返った。

梨子の視線の先に、金髪の少女が一人、こちらを見ていた。

いつ現れたのかわからず、梨子は後ずさる。

金髪の少女が笑顔を見せながら先に口を開いた。

「Hi！驚かせちゃってごめんなさい〜！」

明るく陽気な声に、張り詰めていた梨子の調子が狂う。

「あ、あなたは……？」

気持ちを持ち直し、質問する。

「あら、相手がだれか尋ねるときはまずは自分から、つていろんなジャパニーズコミックで読んだことあるけれど？」

ひとつ、間をおいて続く。

「ねえ、ライア？」

梨子の思考が一瞬止まった。

この人も、仮面ライダー。

金髪の少女は梨子の表情を見て、話を続けた。

「私は小原鞠莉。あなたが通う浦の星の理事長をしているわ。と言っても、歳はあなたの一つ上。三年生よ。普通ならこれが一番驚くことなのだろうけれど、あなたの関心は他にあるのよね。イエス。私もマスコドライダーよ。願いをかけた戦いに参加する、ね。」

梨子は忍ばせたカードデッキに手を伸ばす。

それを見た鞠莉はふふつと笑った。

「今は戦わないわ。あなた、昨日の戦いの疲れが残っているでしょう。そんな人と戦うなんて悪趣味なこと、マリーは好きじゃないわ。ブシドー？が日本にはあるでしょう？」

「じゃあ、なぜ私の前に・・・？」

「そうね。顔合わせなのもあるけれど。言われたのよ。高海さんは引き受けるから、桜内さんの様子を、つて。」

「言われた？だれに・・・あつ。」

鞠莉がにやりと笑う。

「そう、あなたが高海千歌ちゃん、ちかっちと戦った後現れたライダー、龍騎よ。私がライダーになったときいろいろ教えてくれたのがあの人だったから、今回はそのお返しとして動いているのよ。だから私も、次からは自分の思うように動くわ。」

「どうして、龍騎がそんなことを？」

鞠莉の表情が変わった。

真剣な顔で、それを告げる。

「龍騎の変身者はね……。」

梨子は浦の星を始めて訪れた時、案内をしてくれた少女を思い出していた。

長く伸ばした黒髪が綺麗なその人は、自分はこの学校の生徒会長だ、と言った。

なりゆきでなったとはいえ、なったからには生徒皆さんが、楽しく過ごせるようにしたい、そう話していた。

その声は、凜としていて、それでいて優しくかった。

龍騎が発したあの声。そうだ、思い出した。

龍騎の変身者は……。

「龍騎の変身者はね、生徒会長、黒澤ダイヤよ。」

梨子の浮かべた人に関違いはなかった。

「その顔は、納得という表情ね。」

鞠莉が続ける。

「でも、ダイヤもこれからどうするか決めたい。だからあなたももう一度、考えてみなさい。それじゃ、言いたいことは言ったから帰るわね、チャオ〜!」

言いながら手を振りながら、その場から去ってしまった。

「考えろって、答えなんて、もう……。」

梨子はしばらく、棧橋で立ち尽くしていた。

変わる運命

その日の夜、曜がやってきた。

「千歌ちゃん!!」

障子を勢いよく開け、切らした息を整えるより先に千歌の名を呼ぶ。

連絡を受け、飛び出してきたのだろう。まだ肌寒さが残る春の夜に不釣り合いなほど、服が汗で濡れていた。

千歌は、申し訳なさそうな顔をして

「曜ちゃん……。わざわざ来てくれたの?ありがとう、ごめんね。」

こんな時間に、と言いかけたところでせき込んでしまった。

とはいえ、千歌の身体はほとんど完治に近い状態だった。

外傷は何事もなかったかのように消え、内臓の機能も生活に支障はないレベルにまで回復していた。

ライダーバトルの戦闘で発生した傷害は、多くが2—3日程度ですべて治ってしまうらしい。

日中、ダイヤがそう話していたことを思い出す。

「無理、しなくていいから。」

「ありがとう。でも、大分治ったから。」

こういう時の曜の優しさが、千歌は好きだ。

千歌が身体を起こすと、寄り添うように曜も腰を下ろした。

「話は全部ダイヤさんから聞いている。梨子ちゃん、ほんとに戦い抜く気なんだね。」

「でも、私確かに聞いたんだよ!『もしかしたら……。』って……」

最後まで言わず、千歌は黙り込んだ。

しばらく沈黙が続いた。

先に話し始めたのは曜だった。

「千歌ちゃんは、これからどうしたい?」

言葉が出ない千歌に、曜がもう一度問う。

「どうするっ…やめる?」

こういう時の曜の優しさが、千歌は苦手だ。

「やだよ、止めたいよ、戦いなんておかしいよ、でも、言われちゃったんだよ、エゴだって、なんだって、そんなのわかってたよ、気付いてたよ、でもさ、輝いてるって、自分はヒーローだって、これが私なんだって思っていたかったんだよ、だから、だから…。」

涙がボロボロこぼれる。言葉が詰まる。悔しさと、無力さと、様々な感情が溢れ出す。ついに、千歌はただ泣くことしか出来なくなつた。

情けない、情けない、情けない。

これがヒーローだなんて、かつこ悪い。失格だ。無責任だ。

拳を握り、自らの頭を叩く。馬鹿だ、阿呆だ、間抜けだ、と。

何度も、何度も叩いた。

ふと、千歌は温もりを感じた。

曜が、そっと千歌を抱きしめていた。

やつぱり、こういう時の曜の優しさが、千歌は好きだ。

「悔しくても、辛くても、無力でも、何もなくても、それでも何かしなきゃやって奮い立つことができる、それが千歌ちゃんの思い描いていた、いや、千歌ちゃん自身でしょ?」

答えは、出ていた。

でも今は気が済むまで泣かせてほしい。

言葉に出したわけではないが、曜もずっと千歌を抱きしめていた。

気付けば朝になっていた。

泣きつかれ、そのまま眠りについた千歌をしばらく見守っていた曜も知らずのうちに眠っていたらしい。

先に目を覚ました曜が千歌を起こす。

はつきりしない視界の中から、曜を見つけ出した。

「おはよう、曜ちゃん……。」

寝ぼける千歌の顔を見て、思わず笑ってしまう。

「おはよう千歌ちゃん。あはは、ひどい顔だよ。」

昨晚あれだけ泣いたのだ、瞼が腫れないはずがない。

真っ赤になった目元と寝起きの顔が重なり、千歌の顔は人に見せられるような状態ではなかった。

「曜ちゃん……。笑うなんてひどいよう……。。」

「ごめんごめん、幼馴染の特権みたいなものかな？えへへっ。」

しばらくして、千歌の意識がはつきりしたところで曜がもう一度あの質問をした。

「千歌ちゃん、どうする？やめる？。」

千歌の答えは決まっていた。

「ううん、やめないよ。やっぱり、争い合うのは良くないと思うんだ。いくら夢のためとはいえ、誰かが痛い思いをして叶える願いなんて間違ってると思う。もし、それでも戦い合わなければいけないのなら、私は争いをなくす為に戦うよ。」

矛盾してるけどね、と千歌が苦笑いする。

続けて

「孤独のヒーローでも構わない、誰も私のことを知らなくたっていい。私が守った、誰かの笑顔や笑い声が、きつと私が望む輝きなんだと思う。」

曜は満面の笑みを浮かべた。

「千歌ちゃんらしいね。でも、それでいいと思う。もしかしたら、この先もつといい答えが見つかるかもしれないし、今はそれでいいんだよ、きつと。」

「ヒーロー、高海千歌。輝き目指してまたここから頑張ります！」

「ヨーソロー！私も出来ること、精一杯手伝うからね！」

顔を見合わせ、二人は笑いあった。

「じゃあ、まずは梨子ちゃんを止めなきゃ。どこにいるんだろう。」

「まって、千歌ちゃん。」

動こうとする千歌を曜が制止する。

「ん？動くなら早いほうが・・・。」

曜は首を横に振った。

「そうなんだけど、違うの。千歌ちゃん、変身できるの？」

「あ。」

昨晚とは違う沈黙がしばらく続いた。

鉄仮面伝説

「どうしよう曜ちゃん！私変身できないじゃん！ベルトないじゃん！どうしたらいいのー!!!」

「落ち着いて千歌ちゃん！いや、大問題だけど！なんか、とにかく一回落ち着こう!？」

「そ、そうだよね。すー。。。はー。。。よし！わかった！このままで行くしかない！夢は自力で叶えるもんだ！」

「千歌ちゃん!? 良いことは言ってるけど全然落ち着いてないよ！あと、それなら私のほうが強いと思う！なんていうか、体力的に！」

「それもそうだけど。。。うーうーあーうーどうしよううー!!!」

大事なことが頭から抜け落ちていたことに千歌は焦っていた。

せっかく決心したにもかかわらず、このままでは何もできないままだ。

もちろん、戦わずに梨子を止めることができるならばそれに越したことはない。

しかし、それには自分からも相応の覚悟を見せねばならないと考えていた。

それが、仮面ライダーの力なのだ。

のつぽを差し出す、干物を差し出す、富士の景色を見せて心を空にする。。。

後から思い返せばきつと馬鹿らしい案を、二人は真面目に出し合っていた。

その時、申し訳なさそうに部屋の障子が開いた。

「あ、あのう。。。」

ルビイが、その隙間から恐る恐る声をかけるが、二人はそれに気付かない。

聞こえていないとわかると、今度は勇気を振り絞ってさらに大きな声で呼びかけた。

「あ!!の。。。う。。。」

勢いあまって声が裏返る。さらに恥ずかしさから語尾が弱くなっ

てしまった。

二人は、ひっくり返った声に反応して同時に障子のほうを向いた。

「ピギイ!!!」

「ピギイ・・・?」

目の前の小動物みたいな女の子から奇怪な声が聞こえ、思わず曜は復唱した。

「あ、あの、私、お姉ちゃんの・・・黒澤ダイヤの妹のルビィです・・・千歌さんや、曜さんの一つ下・・・。浦の星の1年生です・・・。」

「へえ、ダイヤさんにこんなかわいい妹さんがいたんだ!」

千歌が笑顔でそう言うと、ルビィが照れながら話を続けた。

「えへへ・・・。ありがとうございます・・・!じゃなかった!お姉ちゃんから、千歌さんに、これを渡すようにって頼まれてて・・・。」

言いながら、千歌に風呂敷に包まれたそれを差し出した。

不思議に思いながら、千歌は掌の上で風呂敷を広げた。

「え・・・?」

思わず、千歌は声を漏らした。

それは、カードデッキだった。

タイガのそれと違い、表面には龍の顔のようなシンボルが確認できる。

「ダイヤさんが、これを?どうして・・・。」

動揺する千歌の目を見ながら、ルビィがゆっくり伝える。

「お姉ちゃんが、『きつと千歌さんなら覚悟を決めるはず。その時にこれが必要になるはずです。今は詳しいことは言いませんが、私はこれを千歌さんに託します。』って言ってました。千歌さんなら、きつと大丈夫だからって。」

「ダイヤさんがそんなことを・・・。」

カードデッキを見つめ、深く息を吸う。そしてゆっくりと吐き出

す。

「曜ちゃん。こんな言葉で表していいのかわからないし、ダイヤさんにどんな考えがあるのかわからないけど、でも、今のこの状況を言うならこれだと思う。奇跡だよ!!!」

ルビイのほうへ向き直り

「ダイヤさんにお礼を言っておいてもらってもいいかな。それと、私、決めました、って。」

というと、デツキを強く握りしめた。

千歌の熱意あふれる顔に、曜も力いっぱい頷いた。

（ダイヤさん、この戦いについて何か知っていることがあるのかな・・・。）

そんな疑問を抱きながら。

その後、身体がほぼ完治したこともあり帰宅することになった。

玄関まではルビイが見送りに来てくれた。

ダイヤは用事があるらしく不在だった。ルビイにデツキの件を任せたのもそのためだ。

ダイヤにも感謝を伝えておいてくれと伝言を残し、千歌と曜は黒澤邸を後にした。

帰り道、二人に会話は無い。

気まずいわけでも、話すことがないわけでもない。

その胸には決心が詰まっており、それがわかるだけで十分だった。

千歌はこの先の困難に立ち向かう覚悟があった。

曜はそんな千歌がとても誇らしかった。

キイイイイイイイイイイイイイイ

あの音だ。

耳をつんざく不快音。

二人は目を合わせると、近くのガラス窓に駆け寄った。

人がいないことを確認して、千歌が叫ぶ。

「変身!!」

赤を基調とし、銀色の鎧を身に纏い、左腕に龍頭のようなガントレットを装備した戦士がそこにいた。

この姿を知っている。朦朧とする意識の中で、梨子が名前を呼んだことも。

千歌が変身した仮面ライダーの名は、

「龍騎。」

黒いとびらの向こう

「どういうつもり？」

「どうもこうも、鞠莉さんの知っている通りですが。」

「知っている通りですが。……って、龍騎のデッキを渡したってどういふことよ！ライダーの力がなければ、果南を止められないじゃない！」

激昂する鞠莉を見据える。

「私は、私のやり方で果南さんを、いいえ、この戦いそのものを終わらせませす。」

「冗談じゃない！私は取り戻したいの！あの日々を……！」

ダイヤは何も言わなかった。迷いのない瞳が鞠莉を映している。

「もういい。私一人でも、果南を止める。」

そう言い捨て、鞠莉は自身の住むホテルへと帰っていった。

「続く戦いの末路にあなたはまだ気付かないのですか、鞠莉さん……。」
遠のく背中に、小さく呟いた。

戦いは一瞬だった。

比喻でも何でもなし。本当に一瞬だったのだ。

使用したのは、タイガのときに使い慣れたカード。

『アドベント』

現れたのは赤い龍だった。

赤い龍は口から炎を吐き、龍尾でなぎ払い、文字通り跡形もなく敵を消し去ってしまった。

千歌はただ茫然と立ち尽くす。

この指示を出したのが自分だということを受け入れるには時間

が必要だった。

考える、とは違う。戦い方を感じたのだ。
身体が初めから知っていて、思い出すような感覚。
千歌は思った。

この違和感はなんだ、と。

変身を解き現実世界へ、曜の元へと戻る。

「一瞬、だったね。」

曜も同じことを思っていた。

今の千歌には、カードの種類も、武器の名前も、まるで昔から知っていたかのように答えられる。

これが龍騎の力、そう納得するしか、他になかった。

その日はそのまま帰宅することになった。

どちらにせよ明日、学校に行けば梨子に会える。その時に話をすればいいと二人は思った。

「じゃあ、曜ちゃんまた明日!」

「うん、千歌ちゃんまたね。」

これまでと変わらない挨拶をして、帰宅した。

家に帰ると、姉が千歌を迎えた。

ただ出迎えてくれたのであれば、感謝の一つもあっただろう。

しかし、目の前にいる実の姉が自分の顔を見て、笑いを必死にこらえているとしたら、それは別だ。

「ぷふっ……。千歌あんた、生徒会にでも入るの? 千歌が……。? ぷふっ……。あははははははは!!」

ついに堪えきれず、口を大きく開けて笑い始めた。

何のことかわからず、千歌は眉をひそめる。

「生徒会……。? なんてそんなこと……。あっ!!!」
一つ、あった。

『あなたの家には、適当な理由をつけて話しておきますから。』

「ダイヤさん……。もう少し他の言い訳もあったでしょ……。」

小さなため息をこぼす。

「つて言うか、もしやるとしたつて笑うことないでしょーーー!!!」

晩の間、姉に笑われ続けた。

もういいでしょ、と思いつながら。

それでも、やっぱりこの笑顔も守らなければ、と思いつながら。

朝。窓の外は暗かった。

その日の予報では、一日雨らしい。

傘を差して、学校へと急いだ。

教室につくと、先に登校していた曜が傍に来た。

「おはよう千歌ちゃん。今日、梨子ちゃんお休みだつて……。」

「そっか……。」

戦つて、倒した相手と再び顔を合わせたくないのだろう。

いや、もしかしたら本当に体調が悪いのかもしれない。

いや、もしかしたら……。

考えれば考えるほど頭が回らなくなる。

落ちて着こうと、自分の机のいすを引いた。

その時、二人はあの音を聞いた。

キイイイイイイイイイイイイイイ

「もう!!こんな朝早くから来なくてもいいのに!!!」

鏡を求め、走りながら千歌が嘆く。

途中、廊下を走るなど言われた気がした。

心の中で必死に謝つて、先を急ぐ。

「授業までまだ時間はあるし、間に合わせたいよね!」

曜は、教室を出た時に時計がちょうど朝の8時を知らせていたことを思い出していた。

「そうだけども!!せめて来るなら学校終わってからにしてよ!!」
勢いよくトイレの扉を開け、千歌が鏡の前に立つ。

「変身!!」

龍騎へと変身した千歌は、ミラーワールドへと姿を消した。

「千歌ちゃん、頑張って……。」

残された曜は、鏡に祈りを捧げた。

鏡の世界に着き、千歌は辺りを確認する。

「おかしいなあ、音は聞こえたのに。」

怪物の姿は千歌には確認できなかった。

しばらく、近くを調べていると、遠くで音が鳴っていることに気付いた。

音の鳴る方へ近づいていく。

その音が戦闘音だと気付いたとき、向こうもこちらに気付いた。

見覚えのある、紅色の戦士。

ライアが、梨子が、そこにいた。

最後の一体を倒したところでこちらを見る。

「龍騎……!!」

そう言うと、龍騎へと近づいてきた。

「生徒会長だったことには驚きましたけど、私だって覚悟を決めたんです。」

友人になれるかもしれないあの子に手をかけた今、もうこの手では戦うことしか出来ない!」

『スイングベント』

尾部を模した鞭を出現させた梨子が、龍騎へ攻撃を仕掛ける。

「くっ……。梨子ちゃん!私はダイヤさんじゃないよ!!!」

「え……。?」

明らかに動揺した梨子の隙を見て安全な間合いを確保する。

そして、千歌は龍騎の変身を解いた。

「私だよ、高海千歌だよ。」

「うそ……。なんで……。なんで高海さんが……。」

作った拳を固く握り締める。

降り続く雨は激しくなっていく。

それでも、決意をもう一度確かめて、いきなりだろうと言おうと思っていたことを思い出して、梨子にぶつけた。

「私は、ヒーロー。だから、あなたのことも助けてみせる！」

空も心も晴れるから

「だから、あなたのことにも助けてみせる！」

梨子の変身を解く。

「どうして……。龍騎に変身していたのは生徒会長でしょ？どうしてあなたが変身しているの……。どうして、あなたがここにいるの……。？」

声は、震えていた。

「ダイヤさんが、与えてくれたんだ。」

その言葉に、梨子の表情は強張る。

「あの人が……。！あの人がまた高海さんを戦いに……。！」

「違う!!望んだのは私だよ！」

思わず目を見開いて千歌の顔を見る。

「やっぱり、私をこの戦いから離そうとしてくれていたんだね。」

「なんで戻ってきたの!どうして望んだの!戻ってこなければこのまま……。。」

「このまま私だけ戦いからサヨナラなんて出来ないよ。だって、梨子ちゃんが戦っているんだもん。」

「どうして!!私は、関係ない!!!」

身体が鎧に覆われ、ライアに変身する。

「梨子ちゃん!!!」

攻撃を防ぐため、千歌もやむなく龍騎へと変身した。

「あなたはまだ関係ないの!私とも関係ないの!もう、やめてよ!!!」

『スイングベント』

召喚された鞭が千歌を襲う。

「関係あるよ!!!」

『ガードベント』

現れた盾ードラグシールドで攻撃を受け止める。

「あなたには関係ない!!あなたは関係ない!!」

「あるよ!」

「ない!!!」

「ある!!!」

「ない!!!」

「あるよ!!だって、梨子ちゃんは私の友達だから。」

「え……。」

梨子の攻撃が止まる。

鞭と盾の攻防により出来ていた水しぶきが消える。

振り続ける雨が、二つを打ちつけていた。

曜は気が気ではなかった。

聞こえるのは戦闘音のみ。

二人の会話までは聞こえない。

ただ、鏡の前で待つことしか出来ないことが歯がゆかった。

「昨日の今日でこうなるとは、あの方の行動力は見習うところがある
かもしれませんね。」

突然の声に驚きながらもその声の主を見る。

そこには、ダイヤが立っていた。

「どうして、私たちにここまでしてくれるんですか？」

少し考えた後、曜の目を見て答える。

「これは想いの戦い。誰かを想う気持ちは言葉だけじゃ足りない、故
に起きたすれ違いの戦い。」

だから、私自身のためなのです。今は、そう答えておきます。」

そう言って、ダイヤは去ってしまった。

「想いの戦い……。誰かのための戦いってこと？」

ならば私は……。

想いを胸に、今は戦う二人を見守ることにした。

「友達、私とあなたが？」

「もちろん。初めて会った時からずっと。」

「どうして？わたしなんか……。」

「理由なんて、いらないんじゃないかな。私が友達と思えばあなたは
友達なんだよ。それとも……嫌だった？」

「そ、そんなこと……。」

思いがけない言葉に思考が追いつかない。

ふとよぎったのはベルトを破壊した時の記憶。

そうだ、私は……。

「私は、あなたを傷つけた。痛い思いもさせた。今更私にそんな資格ないの!!!」

『アドベント』

その叫びと同時に召喚されたエビルダイバーが辺りを無作為に攻撃する。

攻撃をかわしながら、右手に拳を作る。

「それでも!!!」

固く握った拳を、視界が捉えたライアの左頬に振りぬく。

咄嗟に、エビルダイバーを呼び戻す。

しかし、龍騎の拳が速かった。

ライアの全身に衝撃が走った。

言葉にならない声を漏らし、倒れこむ。

このままでは、と立ち上がろうとした。

直後、ライアの身体が温もりで包まれた。

「それでも、私はあなたの友達だから。それは変わらない。」

変身を解いた千歌が、力強く、優しく、抱きしめていた。

「どうしても叶えたいことがあるなら、私が助けになるよ。」

変身が解ける。

暖かかった。

降り続く雨に凍えていたわけじゃない。

その言葉が、想いが、痛みが、暖かかった。

頬を伝うのも、雨でなく自分の涙だとわかった。

気付くのが遅すぎたと思う。

ああ、私の願い事なんてもう、叶っていたんだ。

雲の切れ間から光が差す。

この雨が上がるより先に、これだけは言おう。
震える声で、それでも確かに伝わるように伝えた。

「ありがとう。」

「千歌ちゃん！梨子ちゃん！」

二人の元へ曜が駆け寄る。

「ただいま、曜ちゃん。なんか全然違う場所に出ちゃったけどね、あはは。」

ミラーワールドから戻った場所は、学校の下にあるカーブミラー付近だった。

千歌の言葉に、曜が笑顔で答える。

梨子の方を見れば、その右頬は大きく腫れていた。

「うわあ……。これまた派手に……。」

「申し訳ない!!私も高まつちやって……。痛いよね、ごめんね梨子ちゃん。」

何度も頭を下げる姿を見て、梨子が申し訳なさそうに返す。

「私の方こそごめんなさい。あなたたちにたくさん迷惑かけてしまつて……。」

それから、ありがとう。こんな私を最後まで引き止めてくれて。」

深々と頭を下げる。

それを見た二人は顔を見合い笑った。

「これからもよろしくね、梨子ちゃん！」

「ヨーソロー！梨子ちゃんも一緒に、楽しい内浦イフ（ウチウライフ）を送るであります！」

涙をこらえながら、精一杯言葉にした。

「うん！千歌ちゃん！曜ちゃん！」

「つていうか、もう夕方じゃん!!学校終わっちゃったよ!!どうしよう

!!!

「ああ、そのことなんだけど、ダイヤさんが話をつけておいてくれるって。二人がミラーワールドにいる間にそう言いに来たよ。」

「ダイヤさんが・・・？嫌な予感がする・・・。」

「嫌な予感？」

「あのね、梨子ちゃんと戦った時・・・。」

学校へ戻る途中、3人は絶え間なく話し続けた。

教室に戻る。

他の生徒は皆下校しており、3人だけの空間だった。

梨子が、制服のポケットからライアのデツキを取り出して机に置く。

その元へ、千歌が寄る。

「どうするの？」

「そうね。壊して降りちやおうかなって考えたんだけど、もったいない気がして。」

「もしかして、まだ？」

曜が怪訝な顔を向ける。

「ううん、そうじゃないの。もう私の戦いは終わり。だから、これからは千歌ちゃん、あなたのために変身するわ。戦いを終わらせるために戦うヒーローのために。」

「梨子ちゃん・・・!!!ありがとう!!!」

梨子の手を取り、その場で子供のように無邪気に跳ねた。

「想いの戦い・・・か。」

「どうしたの、曜ちゃん？」

「千歌ちゃん！ううん何でもないであります！」

その様子を、不思議そうに梨子は見つめた。

「あ、ところで、梨子ちゃんの叶えたいことって何だったの？」

その質問に対して、以前までの梨子であれば「あなたには関係ない」の一点張りだっただろう。

しかし、今は違う。

千歌と、曜がいるから。
今は満面の笑みでこう答えよう。

「そうね、もう叶っちゃったかな。」

【side 梨子】

我ながら、小さな願いだと思う。

それでも、助けてほしかった。

続けていたピアノの音が聞こえない。

始まりは、確かそうだったと思う。

誰かのための料理が他より美味しいように。

誰かのための音でなければ、音色は聞こえなかった。

誰かに聞いてほしかった。

別に友達がいなかったわけじゃない。

ただ、この音を届けられる相手を見つけれなかった。

この小さな悩みは、いつからかわわっていた。

「どんな私も受け入れてくれる人が欲しい。」

だから、こちらに来た時驚いた。

この力を、誰かのために使う人がいることに。少し、意地悪をした。

あの子が本当に自分以外のために戦っているのか確かめるために。やっぱり、優しい子だった。

だから、この戦いにはだめだと思った。

デッキを破壊した後、残るカードも完全に消そうとした。

とどめを刺すのだと思われ、防がれたけど。

当たり前か。悪いのは私だと諦めた。

手を差し伸ばそうとしていたことは、誰にも言わないでおこう。

あと、隣にいる女の子。

あの子も、きつと優しい子だ。

だからこそ、関わってはだめだと思っていたのに。

それでも、もし許されるのであれば、一つだけ、こう呼びたい。

「千歌ちゃん、曜ちゃん」と。

スリリング・ワンウェイ

戦いから一夜が明けた。

昨日の雨によって散った桜が進む道を暖かな色で染め上げている。もうすぐすれば、今度はこの桜の木が緑で埋め尽くされるだろう。どこにいようと、多くの場合それは変わらない。

日常だって、きつとそうだろう。

でも、今までと違うことが一つ。

梨子は桜の木から視線を移した。

「梨子ちゃん、おはようー!」

二人が手を振っている。

「千歌ちゃん、曜ちゃん!おはようー!」

少しでも早くその元へ。

逸る気持ちに身を任せ、駆け出した。

昼休み。

隣土士の千歌と曜が机をくっつけ、そこに梨子が自分の椅子を持ってきた。

それぞれが家から持ってきた弁当に手をつける。

三人の会話は、千歌の一言から始まった。

「午前中ずっと考えてたんだけどさ、仮面ライダーって全部で何人いるの?」

それを聞いて、他の二人が驚いた表情を見せる。

「千歌ちゃん、寝てるだけじゃなかったんだ……。」

梨子と曜の目には、一限目の国語も二限目の数学も、三限目も四限目も千歌が机に突っ伏して寝ているようにしか映っていないかった。

「ひどいよ梨子ちゃん!そりゃ確かにほとんど内容覚えてないけど……。昨日の疲れがまだ残ってるっていうか……。って、そんなことはいいの!」

良くはないよ、とため息をついてから梨子が話し始めた。

「あまり学校でこういう話はしないようにしようと思っていたけど、いまなら周りも騒がしいし大丈夫そうね。」

曜はすかさず自分の机から紙とペンを梨子に渡した。

それを受け取ると、紙に11個の円を描いていく。

「ライダーは全部で11人。ただ、千歌ちゃんみたいに二つのライダーへと変身できることが分かった今、参加者も11人だとは限らないみたいけど。」

次に、描いた円の中に文字を書いていった。

「ライダーの名はそれぞれ 龍騎、ナイト、シザース、ゾルダ、ライア、ガイ、王蛇、タイガ、インペラー、ファム、ベルデ。内タイガは：私が壊してしまったから脱落・・・。」

気にしないでという千歌の言葉に頷き、タイガの円の上からバツ印を書く。

横から、曜もそれに書き込み始めた。

「龍騎が千歌ちゃん、ライアが梨子ちゃん、つと。ええ!? わかってるのこれだけ!？」

「デツキをくれたダイヤさんが他のライダーって可能性は？」

「うーん、確かなことは言えないわ。ただ・・・。」

「ただ?。」

その続きが気になり千歌と曜の声が被る。

「落ち着いて聞いてね。千歌ちゃんがダイヤさんのお家にいる頃、私を訪ねてきた人がいたの。その人は、自分もライダーだって言ってたわ。」

「その人って?。」

千歌が真剣な顔をして梨子を見つめる。

「この学校の理事長、小原鞠莉さん。あなたたちもよく知ってるでしょ?。」

そのあと梨子が「ところであの年でしかも先輩が理事長っておかしくない?。」と言ったが二人には届いていなかった。

意外な名前に言葉を失う。

二人の様子に梨子が思わず質問する。

「そりゃあ驚くことだろうけど、何も言えなくなるほどなの？」

先に口を開いたのは曜だった。

「私と千歌ちゃんが幼馴染だっことはこの間話したけど、もう一人私たちより一つ上の果南ちゃんって子と三人でよく遊んでいたんだ。

その果南ちゃんが、よく私たちに話していた子が二人いて。一人はダイヤさんで、もう一人が鞠莉さんなんだよ。」

千歌もそれに続いた。

「ダイヤさんと鞠莉さんが関わってるってことはもしかして果南ちゃんも・・・？」

二人が不安を募らせる。

「なるほどね・・・。」

「梨子ちゃん、ライダーはみんな沼津に集まっているって言ってたけど、もしかしてライダーってみんなこの学校の生徒なんじゃ・・・。」

これ以上踏み込むと、取り返しがつかなくなる。そんな予感をさせる曜の言葉。そんなことない、と言い切れない現状が拍車をかける。

突然、千歌が立ち上がった。

「よし、わかった。ダイヤさんにもう一度話を聞こう。この戦いが何なのか。他に誰がいるのか。」

話を終わらせるかのように予鈴が鳴り響く。

続きは放課後に話そうと決めて、梨子は自分の席へと戻っていた。

机を戻した曜に、そっと聞いた。

「果南ちゃんにも聞いてみた方がいいのかな。」

小さく首を横に振る。

「まだ決まったわけじゃないし、もう少し調べてからにしよう。」

それぞれの胸に疑念が残るまま、本鈴が午後の授業開始を知らせた。

授業後の三人を待っていたのは下校のチャイムではなく敵を知らせる甲高いあの音だった。

校舎裏で変身した龍騎とライアがミラーワールドへと消える。

見送った曜は別の場所へ向かうため振り返った。

二人が戦っているうちに少しでも情報が欲しかった。

あの時のダイヤの言葉、鞠莉の参戦、果南のこと、そして……。

目の前の少女に気付いたのはその独特な挨拶を聞いてからだだった。

「シャイニー☆って、今のあなたにとっては招かれざる客かもしれないわね、曜。」

目の前の少女に動揺する曜。

しかしその口には少しの笑み。

「そんなことないですよ、ちょうど私も会いたかったところですよ。」

着いた二人が最初に聞いたのは女性の悲鳴、そして最初に見たのは腰が抜けたのか尻もちをついて後ずさる白い鎧をまとった戦士。

視線を移すと10-20体ぐらいのミラーモンスター。

予想しなかった光景を目の当たりにしてあっけにとられる二人の意識を戻したのは、その白い戦士の叫びだった。

「助けてー!!!なんかどんどん来ちゃったんだけど!!!おーねーがいー!!!」

ライダー集結

すべて倒しきるまでに時間はかからなかった。
苦勞しない、というわけではない。

それでも、戦う時の倒しやすい戦法だったり少なからず生まれている。

それが二人ならば尚更。

改めて、千歌は梨子の存在に感謝していた。

敵の全滅を確認し、白いライダーの元へ。

その当人は、目の前で起こった出来事にただ啞然としていた。

一つは、二人の戦士が共闘して敵を倒したこと。

そしてもう一つは……。

「大丈夫だった?」

ライアが問う。

もう一つは、それがこの前の紅色だということ。

問いかげに、慌てながら答える。

「あ、えっと、大丈夫。ありがとう、助かりました……。てか!!! あなたあの時の紅色!!! 銀色と戦ってた紅色!!! 私とも戦う気なの!?! の、望むところよ! あ、でも待つて! ちよ、た、タンマ!」

「落ち着いて! 梨子ちゃんはあると戦ったりしないから!」

慌てた千歌と梨子の変身を解き、攻撃の意志がないことを示す。

「へ?」

つられて白いライダーも変身を解除した。

現れたのは、自分たちと同じ制服を着た少女。

リボンの色から、1年生だとわかる。

姫カットと頭の右側に作られたシニヨンが特徴的なその少女は、整った顔立ちに似合わないほど間抜けな表情を向けている。

「いや、タンマって……。今も使うんだ……。」

梨子がため息交じりに呟く。

ため息をつく回数が増えた気がする、と少しだけ心の中で憂いた。
「というか、あなたもあの時あそこにいたの!?!」

「あなたも、って、あなたもいたの!？」

質問に質問を返す会話。

先に進まないと感じ、間に梨子が割って入る。

「いた、というよりこの子と私があの時戦っていたのよ。」

シニヨンの少女の表情が二転三転する。

「ええ!？」

「そうだよ、驚くよね。梨子ちゃん、この子にちゃんと説明しよう。」

「そうね、あなたのこと聞きたいし。」

シニヨンの少女も、戸惑いながらそれに了承した。

ふと、思い出したように千歌が話す。

「そういえば、私たちお互いの名前まだ言っていなかったよね。私は高海千歌。こっちは桜内梨子ちゃん。あなたの名前は？」

その振りにシニヨンの少女の目が変わる。

少女は漫画やアニメで見かけるような大げさなポーズをとって謳いあげた。

「ふふ、私の名前？私は墮天使。墮天使のヨハネよ。地獄からのフォーリンエンジェル。わかったかしら、リトルデーモン？」

決まったらしい。自分をヨハネだと言った少女は満足そうな顔をしている。

あれだけすらすらと言えたのだから、おそらくこの少女の常套句なのだろう。

「ヨハネ・・・？なんかわかんないけど、かつこいい名前だね!？」

千歌は目を輝かせていた。

一方の梨子は頭を抱えた。

予想外の展開。この子は、痛い子だった・・・。

千歌に代わって梨子が今までのことを伝えた。

同時に、ヨハネと名乗った少女は「津島善子」という名前だということもわかった。

梨子の笑顔に何かを察し、言わなければと思ったらしい。

また、善子も自身の経緯について話した。

カードデッキを雑貨屋の店主からもらったこと。家の全身鏡にかざしてみたらあの姿になったこと。その後ミラーワールドに入りタイガとライアの戦闘に遭遇したこと。

ライダーバトルに関しての知識は、梨子と出会う前の千歌と同じぐらいだった。

戦うことができた千歌の方が幾分かましなほど。

梨子は善子に、その力がファムと呼ばれるライダーの力だと教えた。

必死に話を理解しようとする善子の姿に梨子は少しの安心感を覚えた。

痛い子ではあるが、悪い子ではない。

千歌も、それを感じていた。

少なからず、千歌は自分と似たところがあるのではないかと考えた。

であれば、この子も協力してくれるかもしれない。

希望に心が舞い踊る。

大方、話の整理と説明が終わったところで千歌が異変に気付いた。

「梨子ちゃん、あれ！」

指差す先に、モンスターの群れ。

先に倒した数より明らかに増えていた。

「また・・・！」

しかし、千歌が変身しようとしたところで、群れの中で小さな爆発が起きた。

直後、背後で機械音が鳴り響く。

『ファイナルベント』

小さな爆発は数を増し、激しさを増し、威力を増す。

それが背後から発射されたミサイルやレーザーに起因していることに気付いたとき、敵は既に全滅していた。

三人が振り返る。

視線の先には緑色のライダー。

牛とロボを組み合わせたような姿をしたミラーモンスターを従えている。

「梨子ちゃん、あれって……。」

「ええ……。あの姿は、仮面ライダー……。名はきつと、ゾルダ。」

突如現れた新しいライダー。

二人に緊張が走る。

「ふう……。大丈夫だったずら？」

ゾルダは変身を解除しながら、千歌たちに話しかけてきた。

「……ずら？」

その独特な口調とあらわになった顔に善子が目を見開く。

「ず、ずら丸!？」

「って、善子ちゃん!？」

思いがけない再会、望まない運命。

想いが、入り混じる。

ハミンググフレンド

その少女は、国木田花丸と名乗った。

善子の幼馴染で、同じく浦の星に籍を置く高校一年生。住んでる場所の関係で、小中は別々の学校だったらしいが。

高校が同じであることさえ知らなかったらしい。

善子と花丸は、思いがけぬ場所での再開に戸惑いを隠せないでいた。

そして、その姓を知っている者がもう一人。

梨子はもう一度確かめるように聞く。

「国木田……。あなたが国木田さんなのね。」

まるで前から知っていたかのような言い方だね、と千歌が口をはさむ。

「知っていたかのような、じゃなくて知っていたのよ。国木田の家について。」

言いたいことを理解した花丸が一步前に出た。

「それは、私の方から説明します。善子ちゃんにも。」

普段は自分はヨハネだとすぐ訂正する善子も、花丸の真剣な表情に言葉が詰まる。

言い返さない善子に少しばかりの面白さを感じながら、花丸は自分の役割について話し始めた。

内浦には、代々続く寺がある。

国木田の家は、代々その寺を守ってきた家系である。

花丸も、寺に生まれた娘として国木田の役割を担ってきた。

しかしもう一つ。国木田の家が継いできた役目がある。

千歌たちが現在参戦しているライダーバトル。

その勝利条件や、そも、この戦いについての説明をするための存在、言わばルールテラーとしての役割である。

ライダーとしての力を授かったものが現れば、その者にライダーバトルのルールを伝える。

代々受け継がれてきたゾルダの力を使い、自らも戦いに身を置くことで幾度もその役目を果たしてきた。

「でも、おらは戦いなんて望まない。」

代々継がれてきた家の役割を否定することは苦しかった。

それでも、戦い続けることは間違っているとは思えなかった。

そのため、今回のライダーバトルにおいてのルールテラーである花丸は誰にも教えようとはしなかった。

自身で戦いの意味を知り、それでも戦おうとする者を止めることはしなかった。

それは、その人の意志であるから。

自分が自分の意志で役割を放棄している以上、止める資格はないとの考えからだった。

ミラーモンスターが出現したときだけ変身して駆逐する。

現実世界に被害を及ぼさないようにすることが、自身にできるせめでの行動であり、役割を放棄した償いでもあった。

「そんな時にあなたたちが現れた、というわけすら。」

「私が調べてたどり着いたのは国木田って家の人たちが戦いを管理している、ということだけ。だから沼津に着たら話を聞こうと思っただけのだけれど……。」

それがこのような考えを持つ少女だと、梨子は予想していなかった。

だから、千歌や善子は何も知らなかった。

少し、話が繋がった気がした。

しかし、梨子には一つ不可解なことがあった。

鞠莉が以前話していたこと。

鞠莉は戦いについてダイヤヤから話を聞いた、と話していた。

であれば、どうしてダイヤヤは戦いについて知っていたのだろうか。

梨子のように、調べれば良い話ではあるのだが。

ならばどうして国木田の家のような役割があるのだろうか。

現状で解決できない疑問が多すぎる、何かがある。

一方、千歌は目を輝かせて花丸を見ていた。

「あなたも、わたしと同じなんだね!!!」

戦いを望まない。人同士の争いは間違っている。

その考えは千歌と同じだった。

この子はきつと協力してくれるだろう。

戦いについてもっと詳しいことも知っているはずだ。

そうすれば、この戦いを終わらせる方法を見つけられるかもしれない。

うまくいけば、だれも争わずに戦いをなくすことだってできるかもしれない。

今でも期待は「かもしれない」で留まっているが、それでも希望の灯りは大きい。

「花丸ちゃん!」

千歌が花丸の右手を両手で握る。

花丸が間拔けな声を出したことなど気にもせず、じっと見つめた。

「花丸ちゃん。わたしね、この戦いを終わらせたんだ。あなたと同じで、私も戦いなんて嫌だって思ってる。そりゃあ、ヒーローになれたことはうれしいけど、梨子ちゃんに『なろうとしてなるものじゃない』って言われちゃってるし。」

顔を向けると、梨子はため息交じりに小さくはにかんだ。

「でもね、やっぱりこの力、ヒーローだと思ってる。私が思うヒーローって、大切な誰かを守る為の勇気をくれる存在なんだ。そんな力を与えられたのに、それ同士が戦っちゃうなんておかしいよね。誰かを想う気持ち、守りたいって気持ちは変わらないもん。力の強い弱いとかじゃない。って、なんか話がまとまらなくなっちゃったけど、とにかく! 私はライダーバトルなんて終わらせたい。協力してくれないかな?」

自分の説明力不足を恨んだ。ちゃんと伝わったか不安でいっぱいだった。

しかし、その不安は花丸が向けた晴れやかな笑顔で消え去った。

「千歌さん!!!千歌さんはとても優しい人ずら!おらもこんな戦い終わ

らせたい。協力するすら。家の監視が厳しいかもしれないけれど、何とか掻い潜って行動するすら。」

「花丸ちゃん・・・！梨子ちゃん！仲間が増えたよ！」

見てわかるようにはしゃぐ千歌。

それを見ながら、今まで黙っていた少女が声を発した。

「・・・私も!!」

3人はあからさまに驚いた顔を善子に向けた。

「ちよつと！私のこと忘れてたわけじゃないでしょうね！まったく・・・。そりゃあ、話の半分も理解できてないけれど・・・。それでもこのヨハネにかかれば問題ないわ！私もあなたたちに協力する。怖いけど！怖いけど!!!まだ戦ったりとかしてないし。でも、モンスター？あの変なのそのままにしとくと現実の人たちが危ないんでしょ？私のリトルデーモンたちが危ない目に合うかもしれないなら、このヨハネが守ってあげるしかないじゃない！」

じゃんけんのチョコキの変化形みたいな手を目にかざしたお決まりのポーズを取る。

千歌と梨子は顔を合わせて微笑んだ。そしてふたりして、ありがとう、がんばろう、と声をかけた。

花丸はというと、ジト目になりながら善子に話しかけた。

「おら見てたずらよ！？善子ちゃんが腰抜かしてるところ。ほんとに戦えるのかなー？」

「な、なによーあれは別に・・・！っていうか、こんな大変なこと背負ってたのなら、もつと早く言いなさいよ。学校離れてたとはいえよく遊んだ仲なんだから・・・。いきなりこんな再開したら、戸惑って素直に喜べないじゃない・・・。」

言い終わるより先に頬を赤く染め、視線を下に逸らす。

そんな善子を見て花丸は安心した。

何も変わらない、あの時の優しい善子だと。

「ありがとう、善子ちゃん。おら、うれしいすら。」

「なによ・・・。っていうかずら丸、あんたいまだに『くずら』とか『おら』とかついてんのね。」

「ななな・・・!!!またおらつて言っちゃってたずらかう!!!」

いつか幼少の頃と変わりのない会話。

またこのような時間が来ることをどれだけ望んでいただろうか。環境はあまり良くないかもしれない。

それでも、この再会は素直に喜びたいと思った。

善子も、花丸も。

「あと善子ちゃんはルビィちゃんにも会わなきゃだね。ルビィちゃんも、ずっと善子ちゃんに会いたがつてたんだよ。」

もう一つの懐かしい名前に善子が反応しようとした時だった。

「危ない!!!」

梨子の叫び。

見上げれば無数の火の玉。

明らかな殺意を持ったそれは、定められたように四人の元へ。着弾した衝撃と爆風が、少女たちを襲った。

夢と現実の狭間

爆風と煙。

一帯が高温で包まれた。

しばらくして、4人の周りの煙が消える。

そこには、変身した4人のライダーの姿。

先に襲撃に気付いた梨子は千歌に合図を送っていた。

自分のデッキに防御系のカードが無いため、ガードベントを持つ千歌に変身を促したのである。

千歌が少しでもためらったならば、被害は甚大だっただろう。

戦いを通して信頼を手にした二人だからこそその所業だった。

攻撃が止んだことを確認し、上げていた盾を下ろす。

「ありがとう、千歌ちゃん。」

「ううん、こちらこそ。早く知らせてくれてありがとう。それよりこの攻撃は……。」

辺りを見渡す。

火の玉が発射されたと思われる方向に、二つの影。

一つは、ミラーモンスター。

いままで千歌たちが戦ってきたものとは形が異なる。

それは、人の形をしていた。

もうひとつは、ライダー。

腰のベルトとデッキでそれは判断可能だった。

青い鎧の戦士。

サメやシャチを模した姿のそれは、こちらをじっと見ていた。

「梨子ちゃん、あの人もライダーだよね?」

梨子は答えない。

「梨子ちゃん?」

「わからない……。」

梨子の声が震える。

「わからないって?」

「わからないの……。あれが、どのライダーなのか……。」

「どういうこと? ずら丸、あんたなら何か知ってるんじゃないの?」

善子の問いかけに、花丸が首を振る。

「おらもわからない……。あのライダーも、となりのモンスターも、聞いたことがないすら……。」

「ここは?」

ホワイトボードと会議机、段ボールがいくつか置かれた部屋。

鞠莉は、体育館の横に作られたその場所に曜を連れてきた。

「ここは、かつて部室として使われていた場所よ。私と、ダイヤと、果南の三人で活動していた部活のね。今はもう、こんな感じだけど。」

鞠莉がホワイトボードを指でなぞる。

目を凝らしてみれば、消えかかった文字がそこに書いてあることが分かる。

何が書いてあるのか、曜はうまく読み取れなかった。

「部活とか、やってたんですね。どんな部活だったんです?」

「うーん、それはネクストタイム、また今度ね。」

ホワイトボードから指を離す。

果南が部活をやっていたことを知らなかった曜は、少し、何をしていたのか気になった。

「さて、本題に入りましょう。」

部屋の隅から、アタッシュケースを運んでくるとそれを机の上に置いた。

曜に、開けるように合図を送る。

早まる心臓の音を感じながら、ゆっくりとそれを開く。

「え……?」

「視界に入るそれを言葉にするには時間が必要だった。例えようなない衝撃。それが何であるか、何度も確認する。」

中にあるのは、3つのカードデッキ。

そのすべてが、ひびが入っていたり、二つに割れていたりして、機能を破壊されていた。

これが意味することはつまり、少なくとも3人のライダーが脱落している、という事実。

叶えたい願いを叶えられずして散った戦士がいる。

「誰がこれを・・・まさか!？」

「Oh:そんな怖い顔をしないで。私がやったわけじゃないわ。」

曜の厳しい視線を受けながら、デッキの一つに触れる。

「この戦いに参加するライダーについて、梨子あたりから話を聞いているでしょう?」

曜は何も言わず頷く。

「11人のライダーによる願いをかけたバトルロイヤル。でもね、何事にも予想外のことであってあるでしょう?」

触れていたデッキを持ち上げる。

「そう、この戦いにはイレギュラー、12人目のライダーがいる。」

「イレギュラー・・・?」

鞠莉の言う通り、物事には何であれ予想外の出来事が付きまとう。

この戦い自体、非日常的な事象であるのだから、何があってもおかしくない。

「もしかして、これって・・・。」

「イエス。そのイレギュラーがやったことよ。わたしはそれをアビスと呼んでいるわ。」

そう。非日常に染まった今では何が起こっても、どんな真実だろうとあり得ないことではない。

「どんなライダーなんですか。」

「青を基調とした鎧に身を包んでいるわ。サメともシャチともとれるような姿をしている。」

それでも、時に真実は残酷だ。

「誰が、変身しているんですか。」

「その答えは、あなたが私に聞きたかったことと繋がると思うわ。」
知らないほうがよかった、そう思うことがこの世には溢れすぎている。

青のライダーが千歌たちを指し示す。

隣にいる人型のミラーモンスターは、それを確認すると再び千歌たちに襲いかかってきた。

慌てて千歌が盾で食い止める。

しかし、盾は簡単にはじかれ、無防備の身体に蹴りが入る。

嗚咽を漏らし、龍騎の身体が宙を舞った。

「千歌ちゃん!!」

『スイングベント』

召喚した鞭で立ち向かうも、効いている様子はない。

「善子ちゃん、千歌さんを！おらは援護に回るぞら！」

『シュートベント』

召喚されたのは自身よりも大きな大砲。

腰を落とし、梨子と戦っているそれに標準を合わせる。

「はあっ!!」

引き金を引くと、その衝撃でゾルダ自身の身体が後ろに引き下がる。

衝撃は大きく、狙い通りに攻撃は当たった。

巻き起こった爆風が引く。

仕留めた感触は十分にあった。

しかし、そこにあっただのはまるで傷一つついていない敵と、それに首をつかまれたライアの姿。

気道がふさがれ、呼吸が出来ない。

やがてライアの意識は消え、投げ飛ばされた。続けて、ゾルダの元へ。

尾羽を鞭のように使用し、ゾルダを襲う。

デツキ内の防御カードをベントする余裕などなく、ゾルダはそこに倒れた。

「ちよつとー千歌さん！しっかりしてよ！ねえってば！」

苦しむ千歌に声をかけ続ける。

状況を確認しようと振り返れば、横たわるライアとゾルダの姿。

「なにこれ……。そんな……。」

敵が近づいてくる。

千歌を守らなければという気持ちと逃げなければやられるという恐怖心が入り混じる。

「善子ちゃん……にげ……て……。」

かすれた声は梨子のものだった。

気道が確保されたことで、朦朧としながらも意識が回復していた。

「でも……でも……。」

デツキのカードに手を伸ばす。

ここで戦わなければ、いつ戦う？

ここで戦って、はたして勝てるだろうか？

考える間にも、敵は近づいてくる。

決めなきや、やらなきや、私が、やらなきや。

覚悟を決めた、その時。

「戻れ。」

声は、青のライダーから。

その令に従い、モンスターが離れる。

「ま……て……。」

梨子の声など届かず、青のライダーがその場から消える。変身を解除した善子は、その場に膝から崩れ落ちた。

そして繋がる みんな繋がる

千歌が目を開ける。

視界に広がるのはまたも知らない天井。

自分の身体が敷布団に横たわっていることを確認する。

い草の香りが心地良く感じる。

腹部に痛み。直に蹴りを入れられたことを思い出す。

「デジャブかな・・・あはは。」

一人、力なく笑った。

「目が覚めたずら?」

声の主が花丸だということに千歌はすぐ気が付いた。

「もしかしてここ花丸ちゃんの・・・?」

「そうずら。ここはおらの実家のお寺。ここなら一先ずは安全です。」

「あれから、どうなったの?」

「おらも梨子さんもやられました。とはいえ、千歌さんに比べればダメージはひどくなかったのであの場で何とか動けるようにはなつて。善子ちゃんは難を逃れたみたいで、手伝ってもらって今に至る、という感じですよ。」

「そつか。迷惑かけてごめんね。その、梨子ちゃんと善子ちゃんは?」

「梨子さんは一人になりたいって外へ。善子ちゃんも、戻ってくるからとは言ってましたけど、どこかにか・・・。」

「そうなんだ・・・。」

少しの沈黙。

ふと、曜がないことに気付きスマホを確認すると、メールが1件届いていた。

『気になることがあるから、少し動きます。戦いを見届けられなくてごめんね。』

突然消えたわけではないことに安心して、再び花丸と話し始めた。

「あの敵、強かったね。」

花丸の顔がゆがむ。

「はい。すごく。今までいろんな敵と戦ってきましたけど、あれだけ

戦闘能力の高い個体は初めてで……。」

よみがえる記憶。

攻撃能力の高いモンスター。

そして、隣にいた青のライダー。

「あの青の仮面ライダーって、敵なのかな。」

「はつきりとしたことは言えません。けれど、あのようなライダーが参戦している事実はありません。例外と呼ぶしかないすら……。」

「例外……。」

青の鎧。サメのような、シャチのような……。

サメ……シャチ……イルカ？

千歌の頭に一瞬、嫌なイメージが広がった。

「もつと調べてみます。千歌さんは痛みが治まるまでもう少し休んでいてください。」

そう言つて、花丸が部屋から出ていった。

「……見つけた!」

善子の視線の先で、梨子が一人砂浜から海を眺めていた。

「もうすっかり暗くなったし、何も見えないんじゃない?」

話しかけられて初めて梨子は善子に気が付いた。

「善子ちゃん、どうして?」

「だからヨハネだってば。って、あんな顔して出ていくんだもん、追いかけないわけにはいかないでしょ。」

「……ふふつ。堕天使だってあれだけ言つたのに、意外と優しいのね。」

「なっ……!!!別に堕天使だって心配ぐらいするし……!」

「全然……敵わなかった。」

「え……?」

それが何についての話題なのか善子はわかっていった。

「わたしね、千歌ちゃんに救われたの。ライダーとして戦う道以外に、助けてくれる誰かの力で願いが叶えられるんだって教えてくれた。だから、私も助けたかった。なのに目に映るのはあの子が倒れている姿。勝てなかった、勝てなかった……。」

涙が頬を伝う。

聞いていた善子は必死に言葉を探していた。

今言うべき言葉は何が正しいのだろう。

何を言えば、目の前の涙は晴れるだろう。

見つからない、わからない、追ってきたくせに、何も言えない。

いや。

考えるな。

さつきだつて、さんざん考えた結果がこれだ。

考えなくていい。

今思うことをそのまま、伝えればそれこそ。

「変身よ。」

「変身……?」

「そう、変身。なりたい自分に、いつか思い描いていた自分に変身するの。仮面ライダーとかじゃなくて、きもちで。あこがれていた姿への変身。きつと大切なのは、変わろうとすることだと思う。リリーはさ、前の自分から変わろうとした。たぶん、あと少しなんだよ。」

自分に言い聞かせるように。先への不安にためらった自分じゃない、強い自分へ変身するんだと。強く、胸に。

何も言わない梨子に、だんだん恥ずかしくなった善子が顔を伏せる。

その様子がおかしくなり、梨子から笑みがこぼれた。

「なにそれ、励ましのつもり?」

「なによ!私だつてこれでも……。」

「でも、ありがとう。少し救われたかも。つて、また私誰かに救われたのね。」

「あ……えつと……そ、そうよ!大切なリトルデーモンが困ってい

るんですもの、たまにはこのヨハネが・・・」

「リトルデーモンじゃないし。っていうかりりーって何よ。私そんな呼び方認めてなんかないわ。」

取り留めのない会話が続いた。

その中で一つ、梨子は決めたことがあった。

「善子ちゃん。千歌ちゃんたちに伝えておいてもらっていいかな。行くところがあるって。」

「行くところ・・・。わかった。伝えておく。」

決心が伝わるそのままざしを善子は信じることができた。

自分も、覚悟を決めたのだから。

「戻ったわよ、ずら丸。」

少ない灯りを頼りに寺に着いた善子は、まず花丸を探した。

「善子ちゃん！お帰りなさい。」

「ヨハネ！・・・千歌さんは？」

「少し前に目を覚ましたずら。もう少し、様子をみなきやって感じだけど。」

「そう、はやく回復することを願うしかないわね。：ねえ、少し話でもしない？」

寺の縁側。

外を見れば夜空が広がっている。

ちようど月が雲から顔を出したところで、花丸がお茶を運んできた。

「お待ちせすら。こうやってお話しするのもひさしぶりずらね。」

「そうねー。別に同じ市内に住んでるっていうのに案外会わないものね。」

「びつくりした？」

「ええ、それはもういろいろと。いくらこの私が墮天使だからって、

キャパオーバーすぎるわ。」

「だよね……。」

「でも、変わってないところもあった。あんたのその口癖とか。それは、安心したかな。あの頃のままのこともあるんだって。」

「なんかあまりうれしく無いすら……。でも、それはおらも同じすら。」
「どういうこと?」

「おらね、ミラーワールドで善子ちゃんと再会したとき、本当は嫌だったんだ。大事な友達がこんな戦いに巻き込まれてるなんて、こんな再開したくなかったって。でも、善子ちゃんは善子ちゃんだった。それはどんな状況でも変わらないんだって。変わっちゃいけないんだって。」

姿を見せた月の明かりが二人を照らす。

慣れてきた目に、多くの星のきらめきが飛び込んでくる。

「……もう一つ。秘密にしていることがあるの。」

「ルビイのことでしょ?」

「……!?知ってるの!?!」

「ううん、何にも。あんたと同じぐらいご無沙汰。でも、鏡の世界でその名前を呼んだあんたの顔、少し寂しそうだったから。」

「そっか……。これを見て欲しいの。」

花丸が風呂敷を取り出すとその結び目をほどく。

包まれていたのは、一つのカードデッキだった。

「さっきの話と同じ。こんな戦いに巻き込みたくなかった。おらにこれが何か尋ねられた時、咄嗟に嘘をつけてこれを預かったの。使わないうように。」

「それってつまり、ルビイも仮面ライダーってこと……?」

「そう、その資格をライダーバトルから与えられた一人。」

「どうするの?」

「本当のことを、話そうと思う。」

「そう、あの子ならわかってくれるわよ。」

用意されたお茶はぬるくなり、月が再び雲に隠れる。

この先どんな未来が待っているかなどわからない。

それでも、この日の夜空を、二人は忘れない。
今度は、三人でお茶をすすりながら。

嘆きのナイト

千歌がそれを聞いたのは今朝、花丸からだった。

「はい……。なんでも、理事長が決定したらしくて。今日から二週間休校とすると連絡が。」

「休み！ゲーム三昧じゃない！部屋に墮天！」

「善子ちゃん……。割と今、それどころじゃない状況すら……。」

「善子言うな！……。まあ、でもそうよね。」

学校の理事長と言えば鞠莉であることは皆知っていた。

鞠莉が学校の存在を大切に思っていることも。

学校が廃校になることを阻止するために活動している、という噂を千歌は思い出した。

廃校自体が噂話でしかないため、それが本当なのかは怪しいところではあるが、それだけ大切に行っている学校をいきなり休校にするだろうか。

「まあでも、確かに人の数は少ないしなあ……。」

「なにがずらっ？」

「あわわ、ごめん。考えてることがそのまま口に出ちゃってた、あはは。」

何を考えようが学校が休みとなったことに変わりはない。

寝ている間に考えていたことをやろうと自分を奮い立たせた。

「お休みなら、私、行きたい場所があるの。」

「おらと善子ちゃんも、行くところが。じゃあ、別行動ですね。またあの敵が現れたら連絡ください。」

「うん、多分、大丈夫。」

本土と淡島をつなぐ連絡船から降りて棧橋に立つ。

今朝のやり取りを思い出しながら、千歌はそびえる小さな山を見ていた。

棧橋からすぐの場所にあるダイビングショップに来ることが千歌の目的だった。

ダイビングをするわけではなく、そこにいる人に会うために。建物の隅でダイビング用のボンベを調整している少女が一人。ポニーテールにした長い髪とスタイルの良さが特徴の彼女は千歌に気付くと名前を呼んだ。

「千歌、どうしたの。学校は？」

「休校だって。理事長が決めたことらしいよ。果南ちゃんこそ、まだ学校来ないの？」

「鞠莉が……。そっか。うん、父さんのけががまだね。もうしばらくは店の手伝いしなきゃって感じかな。」

「そっか。大変だね。はやく果南ちゃんと学校に行きたいなあ。」

「あはは、もう少し待っててね。」

「うん……。」

「千歌、どうしたの？」

最近、自分の鼓動の速さがわからなくなるぐらい、毎日のようにドキドキしていると千歌は思った。

それでも特に今は、今までで一番鼓動が早い気がしていた。

「果南ちゃん、イルカ好きだったよね。」

「うん、それがどうしたの？」

「シャチとかサメは？」

「……聞きたいこと、ストレートに言っても良いんだよ。」

「あの青の仮面ライダー、果南ちゃんなんだよね？」

「さすが幼馴染、ってところか。うん、そうだよ。アビスって呼ばれるアレに変身したのも、モンスター、ガルドサンダーって言うんだけどね。それに指示出してたのも、私だよ。」

「どうして……。」

「どうしても何も。これは願いを叶える戦い。最後の一人になるまで戦うバトルロイヤルだからね。」

「私は、戦いたくなんか……。」

「うーん、まあ、千歌はきつとそう言うと思ってたんだけどね。それでも私は戦うの。」

「わかんないよ、どうして……。」

「先に一つ、千歌の質問に答えたから私から。どうして千歌が龍騎のデッキを持つてるの?」

「え?これはダイヤさんから。」

「ダイヤから?」

「うん、最初はタイガってライダーだったんだけど。」

果南が不審な顔をしたことを千歌は見逃さなかった。

今の顔が何を意味しているのかはわからないが。

「わかった、ありがとう。それで、まだ聞きたいこと、ある?」

「もちろんだよ!いくつだってある。全部答えてほしい!」

「まあ、そうだよ。でもね、千歌?これはライダーバトルだよ。」

「え、うん・・・。」

「願いを叶えるためには戦う、そうじゃない?」

「そ、そんなこと・・・!」

「待ってるから。変身。」

そう言うと、果南は反射したガラスからミラーワールドへと消えた。

ためらいながらも、千歌も変身後を追う。

ミラーワールドに移るとすぐそこに青のライダー、アビスがいた。

「さあ、始めようか。あの時は逃がしたけど、今日は違うよ。」

『ソードベント』

召喚した剣を手に、アビスが近づいてくる。

戦いたくない。戦いたくない。戦いたくない。

それでも、矛盾した気持ちでも、決めたことは曲げない。

「果南ちゃん、私だって決めたんだ。こんな戦い終わらせるって。」

『ソードベント』

同じように龍騎も剣を手にする。

合図をしたわけでもなく、二人は戦いを始めた。

斬りつけ、薙ぎ払い、いなして、また斬りつける。

剣で攻撃を受け、また斬る。斬る。斬る。

しかし、勝負はアビスが優位にいた。

徐々に龍騎は押されていき、一撃、交わすことのできない斬撃を食

らった。

龍騎が膝をつく。

立ち上がるうとしても、身体に力が入らない。

「ごめんね千歌、これは終わらせない。」

『ストライクベント』

「ハーイ！ここにきて騎士様の登場って、最高にかっこよくない？」

カード名を告げる機械音と同時に、陽気な声が聞こえた。

声の主は蝙蝠を模した姿をしていた。

その振る舞いは、本人が言うように騎士のようだった。

「鞠莉、何しに来たの。」

その名前に千歌が反応する。

「鞠莉って・・・理事長!？」

「イエース！浦女の理事長、マリーです！」

「鞠莉さん！学校お休みってどういうことですか!？」

「Oh・・・ちかっち、今それを聞くのね…。意外とハードなメンタルね。でもごめんなさい、今はそれに答えてられないの。」

「鞠莉、あなたと話すことはない。千歌と話をしているの。」

「話って、これが？戦いこそが話し合いとでも言うのかしら？全く、脳ミソまで筋肉なの?？」

ジェスチャー付きのいかにも呆れている、という話し方。

慌てて千歌が会話を割り込む。

「鞠莉さん、私も果南ちゃんに聞きたいことがまだまだあるの。」

「ちかっち。」

『ソードベント』

「ちかっち、別に私はあなたの味方をしに来たわけじゃないの。私だって、あなたの望み通り戦いを終わらせられたら困るんだから。このナイトが黙ってないわ。」

召喚した剣を地面に突き立て、龍騎を牽制する。

「あなたは曜のもとへ向かいなさい。外で待っているはずだから。この場は、私に譲ってもらえないかしら。」

「鞠莉さん!!!」

千歌の言葉など聞く耳持たず。

ナイトと呼んだその姿で、視線はアビスに向けられていた。

「千歌、今日はもうおしまいみたい。今はこの駄々っ子を黙らせな
きやいけないからね。またおいで、いつでも相手してあげる。」

「ちかつち、行きなさい。」

嫌だ、と言うべきだ。

止めるべきだとわかつてはいる。

それでも千歌にはかつて友人同士であった二人の睨み合いにこれ
以上すべきことが無かった。

この時の止められない自分への悔しさを胸に。

この先また何度も訪れるであろう自分への悔しさに覚悟を決めて。

そして、アビスとナイトは戦闘を始めた。

知らない情熱

鞠莉が話していた通り、外で曜が待っていた。
心身ともに疲れ、乱れた呼吸を整える。

「曜ちゃん。」

呼びかけに反応し、曜が千歌の方を向いた。

「千歌ちゃん、来てくれたんだね。」

「でも、二人を止められたら・・・。」

「今の千歌ちゃんじゃ止められないと思う。」

予想していなかった言葉。

わかっていたことではあるが、まさか曜の口からその言葉が出るとは思っていなかった。

思わず、千歌は言葉が詰まった。

「ごめんね千歌ちゃん、でも、事態は思っているより深刻らしいんだ。」
「深刻って、どういうこと？」

再会した時から険しかった曜の顔がさらに険しくなる。

「千歌ちゃん、この戦いを終わらせるって思いは変わらない？」

「うん、もちろんだよ。」

「この先、きつと今日以上に悔しい思いをするよ、それでも？」

「うん、決めたことだから。」

千歌はじつと、曜を見ていた。

「わかった。わたしも、千歌ちゃんの助けになりたいと思う。」

「曜ちゃん・・・！」

「だから、いまから話すことをよく聞いて。鞠莉さんから聞いた話、それから、今までに知った情報とを合わせて、私の予想を今から千歌ちゃんに伝えようと思う。」

地を照らしていた太陽が、雲に隠れ始めた。

「まずは、今戦ってる二人からかな。千歌ちゃんはどこまで知ってるの？」

「果南ちゃんがアビスって呼ばれていることと、アビスはこの戦いの参加ライダーじゃない、ってことぐらいかな。あと・・・モンスター

を連れてる。」

千歌の脳内にあの時の悲惨な様が浮かぶ。

「鞠莉さんは？」

「全然。蝙蝠みたいなライダーに変身したってことぐらいしか。ていうか、初めて話したぐらいだし。」

「そっか。ありがとう。じゃあ、まず鞠莉さんのことから。あれはナイトってライダーなの。本人が言ってた。」

「そういえばそんなこと言ってた気が……。って、会ったの!？」

「うん。あのメールはこのためだったの。ていうか、じやなきや鞠莉さんも千歌ちゃんに言わないでしょ、私が外にいるって。」

千歌が納得したと頷く。

「でね、鞠莉さんと会った時にいろいろなことを聞いたの。果南ちゃんとダイヤさんと部活やってたってこととか。」

「え、そうなの?」

「うん、知らなかったよね。まあ、その話は置いておくとして。その時に、三つの壊れたカードデッキを見たの。」

「壊れたって……。」

「そう、そして、破壊したライダーが、アビス。果南ちゃんだって。そう言ってた。」

戦いをためらわない果南の表情を思い出す。

「果南ちゃんが、三人のライダーを……。」

「私も耳を疑った。でも、デッキは本物だった。」

「でも、果南ちゃん、アビスはこの戦いには……。」

「うん。参加ライダーじゃない。それに、千歌ちゃんが話してた、アビスが連れているモンスター。他のライダーとは明らかに違うよね。」

「果南ちゃんに何が起こってるの?」

「一つだけ言えることは、果南ちゃんがこの戦いに大きく関わってるってこと。それ以外は、想像がつかない。」

果南がアビスだと察した時から、少なからず何かがある予感を感じていた。

ならば尚更、果南ともう一度話をしなくては。

「果南ちゃんからこの戦いについて聞き出すことができれば、これを終わらせる手がかりがつかめると思うんだ。」

「でも、アビスにはあのモンスターが……。」

「うん。そのモンスターを倒さない限り、ただでさえ勝てないのにチャンスすら生まれえない。だから千歌ちゃん。まずはそのモンスターを倒すことを目的にしていこう。」

「そうだね、どうせいつかは戦わなければいけないんだ。でも、四人でも敵わなかったのにどうやって……。」

「四人でダメなら、五人。」

「え？」

「私ね、もう一つこの戦いについての予想があるの。ここまで、現れたライダーはアビスを除いて六人。その六人全員、浦女の生徒だったよね。前に話していたこと、覚えてる？」

「ライダーがもしかしたらみんな浦女の生徒なんじゃないか……。」
「その予想は当たりだと思う。壊された三つが誰に渡っていたのかわからないから、確かだとは言えないけど。」

「でもそれが、どう関係するの？」

「ここからが私の予想。今変身しているライダーはみんなどこかで繋がっていると思うんだ。」

「浦女の学生、ってことじゃなくて？」

「じゃなくてね。例えば、私たちと果南ちゃんは幼馴染でしょ？で、果南ちゃんはダイヤさんと鞠莉さんとも友達だよ？てことは、私たちと鞠莉さんたちは果南ちゃんを通してつながりがあるって言えない？」

「ああ、確かに。」

「残り変身者がわからないデツキは二つ。そのうち一つが誰か、いまの考え方で導き出せると思うんだ。」

「そのうち一つがだれか……？」

「千歌ちゃん、残り千歌ちゃんが知ってて名前が出ていないのは？」

「花丸ちゃんと……善子ちゃん。」

「学年は？」

「一年生って言った気がする。」

「私たち、この戦いが始まってから、他に出会わなかった？戦いに関係しそうな一年生に。」

「そんな子……。あつ。」

千歌は思い出した。

龍騎のデツキを差し出した人物の存在を。

確かに、その子がいれば人間関係が繋がる。

そうだ、確かあの子は1年生だった。

答え合わせをするように、千歌がその名を告げる。

「黒澤……。ルビィちゃん。」

曜が頷く。

「ルビィちゃんにも戦力になってもらおう。今まで千歌ちゃんは一人で戦ってきたけれど、ここからはチームプレイだよ。」

千歌も力強く頷いた。

「行こう。黒澤家へ。」

答えは出た。

とりあえず目指すべき道も見えた。

まずはそれをクリアしていこう。

今度こそ、戦いを終わらせると千歌は自分に言い聞かせた。

一つの疑問を新たに抱きながら。

花丸と善子とはミラーワールドが初対面だったはず。

どうして、曜は二人のことを知っているのだろうか。

ゆれるこころの迷いを

「こうやって改めて来てみると、立派なお家だよね。」

口を開け、千歌は目の前に建つ昔ながらの住まいに目を奪われていた。

「そりゃあ、ここら辺の網元だった家系だからね。さ、いこつか。」
「うん。」

曜の言葉に頷き、視線の先にあるインターホンを鳴らす。

歴史を感じる建物とは合わない機械的なそれは、この家の長い時代の流れを感じさせる。

『はい、どちら様でしょうか。』

機械越しのノイズ交じりの声が、ルビイの声だと二人はすぐにはわかった。

「高海です。ルビイちゃんだよ？あなたにお話があつて来ました。時間あるかな？」

『あ、千歌さん！えっと・・・今友達が来ていて・・・。』

声の後ろから誰かの声がしていることがわかる。

その友達の声だろうか。

ただ、千歌はその声をどこかで聞いたような気がしていた。

『え、あ、千歌さんだよ。高海千歌さん。ルビイたちの高校の・・・』
インターホン越しに、向こう側の会話が聞こえる。

途切れ途切れで、ルビイがどんな人と会話しているのかまではわからない。

「曜ちゃん、悪いし引き返さない？」

向こうの様子を察し、曜に提案したその時だった。

『高海・・・千歌さん!?!』

ルビイではない、聞き覚えのある声が千歌の名前を呼んだ。

「っはい！私です！」

思わず千歌は返事をした。

声を出してすぐ、馬鹿なことをしたと少し自分が恥ずかしくなった。

『千歌さん、どうしてここに？あ、こちら善子ちゃん！だめずら！』

善子という名前、特徴のある語尾、聞いたことあるこの声。

千歌はそれが誰か、答えが出た。

「もしかして、花丸ちゃん!？」

ルビイが自室に千歌と曜を案内する。

千歌は、その部屋を見て思わずつぶやいた。

「すごい……。アイドルグッズとか雑誌とか。好きなの？」

「はい！特にスクールアイドルが好きで！」

「スクールアイドル？」

千歌には聞きなじみのない言葉だった。

「学校のアイドルみたいなものです。部活みたいな感じでも、すっごくキラキラしていて素敵なんですよ！」

「ほえ、知らなかった。私たちの学校にもいるの？スクールアイドル。」

「今かどうか知りませんが、前はいたって話聞いたことがありますよ。」

アイドルの話をするルビイの目はキラキラと輝いていた。

こんな輝きをもった子にこれから戦いの話をするなんて。

千歌は罪悪感でつぶされそうになる。

「ルビイちゃんのアイドル好きは昔からずら。」

先に部屋にいた花丸が会話に入る。

「ルビイの家で集まることになるなんてね。ところで、千歌さんの隣に居るのは……?？」

善子の視線は曜に向けられていた。

「あ、うん。渡辺曜ちゃん。ずっと私の戦いを手助けしてくれているんだ。って言っても曜ちゃんはライダーじゃないんだけどね。」

「ヨーソロー！よろしくであります！いきなりお邪魔してごめんね。」

敬礼のポーズをとり二人に笑顔を見せる。

千歌はそれを見ながら、花丸と善子に耳打ちをした。

「二人が言つてた行くところって、ここだったの？」

「ええ。ずら丸と話して、決めたことが。」

「それって……」

「あ、あの！」

千歌が仮面ライダー、と言いかけたところで、ルビイが割り込んだ。

「きつとみんな、ルビイに話があるんですね。とても、大切な。」

場に沈黙が訪れる。

先に口を開いたのは曜だった。

「うん。ルビイちゃん、あなたもライダーなんだよね。」

まだルビイに説明をしていない花丸が慌てて割り込む。

「あ、あの、それは……」

「はい、きつとそうだろうとは思ってました。」

「え……？」

前から知っていたかのような言い方に花丸が動揺する。

「千歌さんにあれを渡したとき、前にルビイが花丸ちゃんに相談したものと同じだって気付いていたんです。きつと花丸ちゃんは、それをルビイから遠ざけるために、預かってくれていたんだよね。花丸ちゃん、優しい人だから……。」

「ルビイちゃん……。」

「花丸ちゃん、あれを返してもらつてもいい？ 預かっててくれてありがとう。きつと、今日ここに来たのはそれが理由なんだよね？」

「でも、やっぱり……ルビイちゃんまで戦いに参加なんて嫌だよ……。」

「ずら丸……。」

耐えきれず善子がうつむく。

ルビイは千歌の方を向いた。

「千歌さん、千歌さんの話って何ですか？」

「私たちと一緒に、敵を倒してほしいんだ。」

敵、という言葉に花丸が反応する。

「敵って……まさか……！」

「うん、私たちが一度負けたあのモンスター。」

「ふぎけないで！ ルビイちゃんは何にも関係ない！ 巻き込むのはやめ

て！」

花丸の激昂。

その場の誰もが言葉を詰まらせた。

「私だって、傷ついて欲しいわけじゃない！でも、戦いを終わらせるには、ルビイちゃんの助けが必要なんだよ！」

「うるさい!!!」

花丸の目には、涙が浮かんでいた。

「ルビイちゃんにデツキは返します。でも、あんな危険な目に友人が会うのはもう嫌なんです……。だったら、私一人で、あれを倒してやる。」

持ってきたデツキを部屋の机に置き、千歌と曜をにらむ。

「それでも、まだルビイちゃんに戦えと言うのなら。あなたたちをここで倒したつていい。」

「倒すって……。ずら丸本気なの!？」

花丸は答えず、部屋の全身鏡に向かってデツキをかざした。

「変身。」

花丸の身体がゾルダの鎧で覆われる。

そして、ミラーワールドへと姿を消した。

「まって花丸ちゃん！」

慌てて千歌も龍騎へと変身後を追った。

「私も追うわ！えっと、曜さん！ルビイをお願いします！」

そう言うと、善子もまた、ファムへと姿を変え鏡の世界へ向かった。

残されたルビイと曜。

花丸の思いとライダーに選ばれた自分と、ルビイは板挟みにされているような気分だった。

「私も、戦っていないのに、卑怯だよ。千歌ちゃんたちばかり苦しめて。ルビイちゃん、あなたも。ごめんね。」

曜がそう零す。

「曜さん……。」

沈黙が部屋を埋め尽くす。

別の声が聞こえたのは、それからすぐだった。

「ルビィ、騒がしいですよ。」

部屋の入り口から顔を見せたのは、ルビィの姉であるダイヤだった。

この部屋に入って戸を閉めていなかったことに曜が気付いた。

「って……。なるほど……。なんとなくわかりました。梨子さん、私たちに関係あることみたいです。」

「梨子……?」

曜が名前を復唱すると同時に、梨子が姿を現した。

「よ、曜ちゃん!」

梨子も曜の姿をみて驚きをあらわにする。

「それに、あれは……。」

梨子が見ている鏡には、にらみ合う三人のライダーの姿があった。

「大体、予想はつきますけどね。」

ダイヤが梨子に、視線で机の上に置かれたデツキを示す。

「仮面ライダーの、デツキ。」

ダイヤが静かにルビィと向き合う。

「ルビィ、あなたは、どうしたいのですか。」

自分の力となるデツキを見ながら、ルビィは自分に問いかける。

「私は……。」

失敗もあるけど

善子が追いついたとき、二人のライダーはすでに睨み合っていた。とにかく制止せねばと、二人に呼びかける。

「二人とも！やめなさいよ！戦う必要なんてないじゃない！」

叫ぶ善子を横目に、花丸が千歌に問いかける。

「どうしても、ルビイちゃんを巻き込みたいんですか？」

「私たちであいつを倒せるのなら、こんなお願いしなかったよ、でも。」

「そうですか、それじゃあ・・・！」

『シユートベント』

機械音がカード名を宣言する。

召喚されたのは花丸自身よりはるかに大きな大砲。

その砲口を龍騎へと向けた。

「これはライダーバトル。望みをかなえるためには、戦うしかない。」

「花丸ちゃん!!!」

千歌の叫びと同時にゾルダはその引き金を引いた。

着弾地点付近のアスファルトはえぐられたように穴が開き、巻き起こる煙幕があたりを覆っていた。

善子の叫びはその轟音でかき消された。

砲口を下げ、じつと煙幕の先を見つめる。

「千歌さん、あなたとは仲良くやっていけると思っていたのに。」

「そう思っていてくれたのなら、まだ希望はありそうだね。」

煙の中からの声。

声に動揺した花丸は、視線をそれから外せない。

鼓動が、早くなるのを感じた。

煙幕が消えていく。

中から姿を見せたのは、盾を構えた龍騎だった。

「花丸ちゃん、私はもう逃げない。この戦いを終わらせるために。」

『ソードベント』

「それにきつと、この世界は、戦わなければ生き残れない。花丸ちゃんの方がそれは良く知っているでしょう?」

それを聞き、小さく深い呼吸をして、花丸は千歌に問いを投げかける。

「もう一度聞きます。千歌さんは何のために戦うんですか。」

「この戦いを終わらせるため。この場所に住む人々を守るため。この二つだよ。」

「一人の女の子が傷つこうとしているのに、その子の傷の上に成り立つ平和に意味なんてない。」

「それでも!!!」

目を強く瞑って、吐き出すように叫ぶ。

「それでも、痛みにも目を背けちゃいけないんだ。私は、みんなの痛みを受け止める。受け止めて、前に進むんだ!」

「私は・・・あなたほど強くない!」

『ストライクベント』!!!

「ああああああああ!!!」

角を模した武器を手で召喚し、龍騎へ攻撃を仕掛ける。

龍騎は先に召喚していた剣と盾で攻撃をしのぎながら、ダメージを負わせていく。

攻撃し、攻撃され、激しい攻防が始まった。

「花丸ちゃんの気持ちだつてとてもわかる、すごくわかる!でも、目をそらした先にあるのは後悔なんだよ!」

「いくら後悔したつて構わない!それで、あの子が傷付かないで済むのなら・・・!」

「このまま戦わなければ、いずれルビィちゃんだつてもっとつらい目に合うことになるかもしれない!その前に、終わらせるんだよ!!」

「だから言ってるでしょう!それなら私一人で終わらせてやるつて!!!」

「やめてよ!!!」

戦う二人を白鳥が襲う。

衝撃で飛ばされた二人の元へ、ファム―善子―が歩み寄る。

何が起きたのかと、二人は立ち上がりながら歩み寄ってくる影を見つめた。

先の叫びが善子のものであったと二人が気付いたのは、ファムの姿が視界に入ってからだった。

悲痛の混じる、それでいて厳しい口調で善子が話し始めた。

「もうやめてよ。一度一緒に戦った仲でしょう？なのはどうして戦わなくちゃいけないの。」

「善子ちゃん、だってルビイちゃんが・・・」

「ルビイがつて・・・。ずら丸、あなたたちが戦っているのをみて、あの子が悲しむとは思わなかったの？」

「でも、ルビイちゃんが無事ならそれで・・・」

「あんたね、そこにあの子の気持ちは一つもないじゃない。全部、あなたの願望でしかないわ。」

「善子ちゃん、それは言いすぎじゃ・・・」

「千歌さん、あなたもよ。ここで戦ったところで何が変わるの？涙が増えるだけじゃない。」

再び花丸へと向き直ると、今度は冷静に語りかける。

「ずら丸、あの子の元にもデツキが渡ったってことは、あの子にも叶えたい願があるんじゃないの？あんたそれを知ってるの？」

「・・・知らない。」

「だったら、あの子の意志に任せるしかないんじゃないの？少なくとも、ここでの戦いであの子が泣く姿を私は見たくないわ。」

それ以降、花丸はうつむき、黙り込んだ。

千歌も自分が行き過ぎだったと振り返り、善子に感謝を伝えた。

「あのまま戦っていたら自分を見失いそうだった。ありがとう、善子ちゃん。」

「まさか千歌さんがあんなになるとは、なんだか影を見た気がするわ。って、善子じゃなくてヨハネよ。」

「それでもって、これからどうしよう。戻るにしても花丸ちゃんを置いていけないし。」

変身を解き、壁の近くで膝を抱えて座る花丸を見る。

「そうねー……って、もうしばらく帰れなさそうよ。」

善子が指し示すその先に、人型のモンスター。

かつて全員を苦しめた、千歌が倒すべき相手。

「なんで……果南ちゃんは鞠莉さんと……まさか！」

嫌な予感が胸をざわつかせる。

「とりあえず今は、変身するしかなさそうよ。ずら丸も守らなきやだし。」

「そう、だね。」

「変身。」

龍騎とファムへそれぞれ姿を変え、戦闘態勢を取る。

「そういえば、堕天使？なのに真っ白の白鳥なんだね。」

「んなっ……!! 気にしてるところを……! いいでしょ! これから墮天するんだから!」

「気にしてたんだ、なんかごめん……。さて、行くよ!」

「もうっ!」

花丸の耳に、戦闘音は届いていた。

それでも、動けない、動きたくない。

今は、そっとしておいて欲しい。

ああ、あの子なら、ルビイちゃんなら、どうするだろう。

戦う音が少しずつ変わっていく。

きつと劣勢なのだろう。

四人で戦って勝てなかった相手だ、二人なら尚更。

それに一人で戦うと言った自分は、きつと馬鹿だ。

「でも、それだけ私は……」

「それだけ私は、あの子のことを大切に思っていた、違う?」

自分とは別の声に顔を上げる。

ライアに変身した梨子がそこに立っていた。

「梨子さん、どうして……」

「まあ……色々。なんとなく状況は察しているわ。きつと千歌ちゃんがんばったんだだろうなってのもね。」

「千歌さんの言うこともわかるんです、でも……」。

「そうね、あの子が本当に自分以外のみんなのことを大切に思っているって、そこは分かって欲しいかな。」

「それもわかります。だけど、それでも、善子ちゃんに続いてルビィちゃんまで……。」

「わかった、これ以上は私よりこの子から言ってもらいましょう。千歌ちゃんたち、かなりピンチっぽいし。」

「ちよ、梨子さん!」

じゃ、と言って梨子は千歌たちの元へと向かっていった。

その後、花丸の目の前に現れたのは、小さなツインテールの少女。

「花丸ちゃん、大丈夫?」

「ルビィ……ちゃん?うそ、なんで。」

ルビィの腰にはデツキを挿入するバツクル。

そして手にはそのカードデツキ。

「お姉ちゃんたちから聞いたよ。願いを叶えるための力だって。」

「だめだよ、すごく辛い目に合うから……ここから早く逃げて……。」

「花丸ちゃん、ルビィがこの戦いにかかる願いはね、もう一度三人で笑い合いたい、ってことなんだ。」

「え……?」

「善子ちゃんと別々の学校になっちゃって、寂しかったね。それから、この前の春休みかそれより少し前ぐらいかな。花丸ちゃん、あんま笑わなくなったよね。」

「春休み……。」

「花丸ちゃん、この戦いの大切なお役目があったんだよね。それで、疲れちゃったんだよね。」

「でも、それは家の義務で……。」

「ルビィを守っていてくれてありがとう。今度は、ルビィが花丸ちゃんの手を助ける番だよ。」

静かに、手に持っていたデツキをバツクルに差し込む。

「変身っ!」

ルビィの身体が銀色の鎧に包まれる。

頭と左肩にある角を模した装備から、サイを模したライダーである

ことが分かる。

「戦うよ、ルビィ。この力に選ばれたのなら！だから、見ててね。」

花丸に背を向け、三人が戦う場所に向かおうと一步を踏み出す。

その確かな足取りを見て、花丸は自分に問いかけた。

いま自分がすべきことは何なのか。

目の前の少女は戦うことを決めたのに自分はどうか。

私は、ただここであぐまっただけでいいのか。

だめに決まっている!!!

花丸は立ち上がって、銀色の鎧で覆われたルビィの腕を掴んだ。

驚いて、ルビィが振り向くより早く、花丸は叫んだ。

戦っている三人にも届くぐらい、大きな声で。

「おらも戦う！あなたを守る！一緒に、戦う!!!」

「花丸ちゃん・・・！」

「ルビィちゃん、ごめんね。・・・って謝ってばかりだ。ありがとう。

それから、これからもよろしく！」

「うんっ！」

「変身!!!」

夢で夜空を照らしたい

力の限り戦う。

召喚した剣で、敵を斬り付ける。

それでも、そのモンスターに決定的なダメージは与えられずいた。

千歌が相手の攻撃をかわしながら、善子に呼びかける。

「前よりは戦いになってるけど・・・やっぱり強すぎるよ！」

「遊ばれてるって感じるわね、って千歌さん危ない！」

「うわっ、と、ありがとう善子ちゃん。あの火の玉とか面倒だよね。」

「飛ぶとかズル過ぎない？チートよあれ！レギュ違反！」

空を見れば、鳥のように姿を変えた怪物が飛んでいる。

「なんかよくわかんないんだけど、善子ちゃんのそれ、白鳥でしょ？乗れたりしないの？」

「なるほど、リトルデーモンに乗るのね。やってみる！」

千歌の提案に賛成して、善子がデッキからカードを取り出す。

『アドベント』

「来なさいーリトルデーモン！」

現れたのは、先に千歌と花丸の争いを止めた白鳥のモンスター。それを自分の元に呼び寄せると、またがるように背中に乗った。

「飛んでー！」

号令に従い、高らかに鳴き、白鳥が空中へと舞い上がる。

「ととと飛んだ！やるじゃないリトルデーモン！」

「リトルデーモンって呼んでるんだそれ・・・。とにかく、空は任せたよー！」

「出来る限り、やってみるわ！」

『アドベント』

千歌も同様に、赤き龍を召喚した。

「ドラグレッダー、援護をお願い。」

指示を受けたドラグレッダーは、咆哮を上げ善子の元へ上昇した。その後すぐ、梨子が千歌と合流した。

「梨子ちゃん、どうして?」

「それはまた後で。それより、劣勢って感じね。」

「うん・・・善子ちゃんとドラグレッツダーが上で頑張ってくれてる。」

「そう、ならもう少しだけ、私たちで踏ん張らなきゃね。助っ人が来るはずだから。」

「助っ人?」

それがだれか聞き返そうとしたとき、空から人が降ってきた。

それがファムであると理解するのに時間はいらなかった。

「なんなのよあいつ! マントなかったら死んでたじゃない!」

「善子ちゃん大丈夫!」

「あんまり大丈夫じゃないわね、こうやって振り落とされちゃったし。って、リリー?」

「リリーって?」

「今は触れなくていいわ・・・。それで、今はどうし・・・」

どうしているのか、そう聞こうとした時だった。

「善子ちゃん!!」

いつ現れたのか、あいつが善子のすぐ背後にまで距離を縮めていた。

千歌の叫びも間に合わず。

モンスターの拳が、善子の背中を捕らえた。

拳は鎧に食い込むように容赦なく振るわれる。

声を漏らす余裕などないまま、身体が地面に倒れ込む。

起き上がる為に力を込めるが、まるで入らない。

ただ、されるがままに善子の身体が蹴られ、殴られていく。

「やめろおおおおおおおお!!!」

喉が裂けそうになるほどの叫び。!!

それとともに、千歌は握りしめた拳を怪物にぶつける。

モンスターが退避した隙に、梨子が善子の身体を救出する。

「大丈夫!? 返事をして!」

善子の口から聞き取れるのは、嗚咽のような声。

「善子ちゃん!」

「生きてるってば……。しんどいんだから返事させないでよ……。」「よかった……。」

何とか意識があることを確認し、千歌に視線を向ける。

睨み合う龍騎とモンスター。

緊迫した空気に包まれる。

千歌がもう一度、拳を握りしめたとき。

砲弾が一発、モンスターを直撃した。

急いで砲弾の発射元を確認する。

「花丸ちゃん……！」

緑と銀。二人のライダーがいた。

「そっちはもしかして、ルビィちゃん？」

銀色のライダーは黙って頷く。

「ずら丸くルビィくおそいわよ……。」

せき込みながら、善子が二人を歓迎する。

花丸はそれを聞きながら、千歌の正面に立った。

「花丸ちゃん。ごめん、無理やり巻き込んで。」

「千歌さん、おら、自分が言ったことが間違ってたとか、そう思うつもりはないぞら。」

「うん。」

「でも、人の気持ちも、もっともっと知るべきだった。」

「きつとそれは私も同じだよ。」

「そうかもしれないぞら。だから、もう一度、立ち上がりたい。」
「戦ってくれる？」

「はい！それに、ルビィちゃんも。」

「うん、ルビィ頑張るよ。怖い怪獣さんたちやつつけるから！」

「……ありがとう！」

戦いから逃げず立ち向かう、確固たる信念を持った5人の少女が、そこにいた。

「長期戦は無理ね。」

「どうする？ 梨子ちゃん。」

「私と千歌ちゃんまで戦おう。二人はそれを狙って。」

「わかりました。」

「行くよ、千歌ちゃん。」

「うん！」

『ストライクベント』

『スイングベント』

「はああああああああああ!!!」

今までよりもはるかに大きな力を込めて。

多く、人を傷つけたこの怪物を倒すため。

「あと少し攻撃があれば、おらとルビィちゃんで……。」

「じゃあ、任せたわよ。」

「え？」

『ファイナルベント』

それを発動したのは、重傷を負い回復に努めていたファムだった。

「善子ちゃん！ そんなことしたら身体が持たない！」

「善子ちゃん！」

「ぶっちゃけしんどいわよ!!! でも、やっと回ってきたチャンスでしょ

！なら、つかまなきやー！」

白鳥が翼で風を起こし、龍騎たちの攻撃を受けていたモンスターを吹き飛ばす。

「おりゃあああああ!!!」

吹き飛ばされてきたモンスターを、同じくファムが召喚した薙刀で切り刻んでいく。

「ずら丸！ ルビィ！ 頼んだわよー！」

そう言い残し、ファムは地面に倒れた。

「任せて、善子ちゃん。」

『ファイナルベント』

「エンドオブワールド。」

花丸の掛け声とともに、一帯が火力の渦に包まれる。

必殺レベルの攻撃を食らい続けたモンスターには致命的なダメージが蓄積されていた。

「「ルビィちゃん!」」

「やるんだ、ルビィも、戦うんだから!!!!」

四人の思いを受け取り、デツキから引いたカードを召喚機に挿入する。

『ファイナルベント』

現れたサイのミラーモンスターと角を模した武器を右腕に装備する。

「これが、1年生パワーだああああ!!!!!!」

サイのモンスターの肩に乗り、高速でモンスターへと突進していく。

「いけえええええええええええええええ!!!!!!」

確かにその角は、モンスターを捕らえた。

奇妙なうめき声。

大きな爆発とともに、モンスターの身体が粉々に乱れ飛ぶ。

5人のライダーの荒い息づかいだけがそこに響く。

「倒した・・・?」

千歌が言葉にして、それを確認する。

「花丸ちゃん……。」

ルビイが変身を解き、花丸の元へ駆け寄る。

「よかったよお……倒したよお……。」

「ありがとう、ルビイちゃん……。戦ってくれて。」

そつと、ルビイを抱き寄せた。

「善子ちゃんは!?!」

「はい……いきてますよー……何度倒れるんだろ……私……。
墮天使関係ないわよねさすがに……。」

善子の変わらない調子に一同が安堵する。

長く続いた強大な敵との戦いが終わった。

五人は見合い、それぞれを目で確認する。

「長かったしつらかったね……。ありがとう、みんな。一緒に戦ってくれて。」

千歌の感謝に全員が頷く。

善子が続いて千歌に尋ねる。

「でも、これで終わりじゃないんでしょ?」

「そう、ここからなんだよね……。」

あのモンスターを倒した。

曜の言っていたこと通りに事が運べば、果南はきつとこれを無視できなからう。

ここからが、正念場だ。

「とりあえず今日はもう帰りましょう。善子ちゃんだつてボロボロだし。」

「だからヨハネよ!つて、リリーもなかなかボロボロよ。みんなも
だけどね。」

「リリー?」

「ルビイちゃん、それには触れなくていいから。」
「なんでよー!」

取り留めのない会話。

戦いが終わればそこにいるのは他と変わらない少女。
ただ、願ってしまい、ただ、力を手に入れてしまっただけの。

「さて、ここから出よ・・・何?地震?」

その揺れを全員が感じた。

思わずその場でしゃがみ込む。

「止まった・・・大きかったね。」

「ええ、って、ルビイ大丈夫よ、止まったから。」

ルビイはまだ、しゃがみ込み小さくなっている。

「うん・・・。」

「梨子ちゃんと花丸ちゃんも大丈夫?」

「・・・」

二人から返事はない。

「二人とも・・・?おーい?」

「変わってない。」

梨子の言った言葉が、千歌には理解できなかった。

「変わってないって、そりや何も・・・。」

「違うぞら。」

梨子と花丸の声が微かに震えていることがわかる。

千歌は恐る恐る聞き返す。

「どういこと?」

梨子の口から放たれた言葉に、千歌は絶句した。

「変わってない、反転してないの。ミラーワールドから出ていないの
に・・・。現実世界と変わってない。」

願い、力を手にした少女たちの、最後の戦いが始まる。

Strawberry Trapper

注意して辺りを見回す。

ここがミラーワールドであれば、建っている家は反転して存在するはずである。

しかし、千歌の目に映る建物すべては、千歌の目には見慣れた、そのままの建物ばかりだった。

それだけではない。
人が、歩いていた。

仮面ライダーでも何でもない、普通の人が当たり前のように歩いていた。

「何が起っているの……。」

善子が呟いたその疑問は、当然そこにいる5人全員が抱いていた。

「ねえ……あれ……。」

ルビイが空を指差した。

今にも降り出しそうな曇り空。

その分厚い雲を覆うように、無数に飛ぶミラーモンスター。

数匹は地上めがけて降下していることが確認できた。

「嘘でしょ……。」

花丸は呆然と空を見上げた。

すると、少し離れた場所から女性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴の数は次第に増えていく。

ミラーモンスターが人々を襲っていた。

老若男女問わず無差別に襲っては、飛んでその身体を遠くまで運んでいた。

「まづい、助けなきやー！」

千歌は目に見える範囲から、モンスターを倒しにかかった。

それに続いて、4人も討伐にかかる。

「数が多すぎる、間に合わないよー！」

花丸が叫ぶ。

5人が戦っているその間にも、戦闘していないモンスターが次々と

人々を連れ去っていく。

「みんな離れて！」

千歌はそう言いながらカードを一枚引き抜いた。

『ファイナルベント』

「ライダーキック！」

ドラグレッダーに力を借りたその技で、蹴りが入った敵とその周辺のモンスターすべてが衝撃で倒れた。

爆発とともに、モンスターの身体が飛び散った。

「でもまだ、たくさん敵いるよね……。」

ルビイは怯えながら、空を見上げる。

「おら、何も聞いていなかった、こんなことが起こるなんて。」

「ずら丸が悪いわけじゃないでしょ、っていうか、これ誰が悪いとかあんの？」

先の開かれた空間を埋めるように、モンスターの群れが近づいてきていた。

攻撃の手を休めることなく、5人は目に映るモンスターを倒していた。

「向こうで襲われている人が！」

千歌が指す先で、次々と人がモンスターに運ばれていた。

「梨子ちゃん！あっちにも助けに行かなきゃ！」

「そうね、でも。」

仮面の下で、梨子の首筋に汗が流れる。

「こっちの相手も、しなきゃいけないわね……。」

梨子が「こっち」と呼んだ相手が誰なのか、千歌が振り向いた。

その姿に言葉を失う。

「なんで……。」

それは、鳥を模したモンスター。

先まで5人で戦っていた、倒したはずの敵。

「なんでよ……さつき倒したはずじゃない……。」

「別个体、かもしれない。」

梨子が考えを口にする。

「今空に飛んでる無数のモンスターののように、このモンスターみたいな上位種も、いくつか個体があるんじゃないかしら。」

「そんな……。」

鳥型のモンスターはまだこちらに気づかずにいる。

「千歌ちゃん、行って。」

梨子の話し方は、いつもの会話と変わらないものだった。

「え？」

「行って、みんなも。遠くで襲われている人を助けなきゃ。」

「でも梨子ちゃんそしたら……。」

「ええ、私はここで、あれの相手をするわ。」

「そんな！そんなことしたら梨子ちゃんが……！」

「そうずら！5人がかりでやつと倒せた相手を一人でなんて……！」

「じゃあ、向こうにいる人たちは誰が助けるの？」

「それは……。」

「意地悪な質問だったね、ごめんね。でも行って。私は、大丈夫だから。いつかあなたに助けられたように、今度はあなたが私を助ける番だから。」

梨子はいつもと変わらない笑顔を見せた。

「梨子ちゃん……。」

「必ず倒すから。だから、信じて。」

「で、残ったわけね。」

「そうだけど……どうしてあなたはここにいいのかしら、善子ちゃん？」

得意げな顔をした善子が、当たり前のようにそこにいた。

「ヨハネよ！そりゃあだつて、ヒーロー一人なんてすぎるじゃない。最後のセリフとか完全にフラグだったし。」

「あーなるほど、一人じゃ心配だけど他の人が残るのも危ないし、じゃあ自分が残っちゃおう、つてことね。さすがよっちゃん。」

わざとらしくポンツと手を叩いた。

「んなっ・・・!って、よっちゃんって何!?!」

「よっちゃんよ。善子ちゃんだから、よっちゃん。リリーっと呼ぶのと似た感じね。だめ?」

「ああ・・・えっと・・・まあ良いわよ・・・ほら、さっさとやるわよ!」

「ええ!あ、あとね、よっちゃん?」

「ん?」

「フラグなんて、へし折ってやればいいのよ。」

善子には、梨子の周りの空気がガラリと変わった気がした。

梨子はデツキからカードを一枚取り出した。

その瞬間、手にしていた召喚機が蒼い風に包まれた。

風が消えると、召喚機は形を変えていた。

「これが、戦いへの私の答えよ。」

召喚機へカードを挿入する。

召喚機は、そのカード名を宣言した。

『サバイブ』

ライア―梨子―の全身が蒼き疾風に包まれていく。

風が消えると、それは姿を見せた。

今までのライアの鎧の形を残しながらも、基調となる色に金が追加されたその姿に善子はただ驚いていた。

「これが、サバイブ体・・・。戦い抜くための力。」

変化した自身の鎧を見て、梨子が呟く。

「召喚機も弓みたいなのが変わってる。」

盾のような形をしていた召喚機はアーチエリーのような形へと変化していた。

「さあ、やるわ。」

召喚機を空を飛び回る鳥型のモンスターへ向け、弓を引く仕草をする。

すると、そこに実態のない弓矢が現れた。

「はっ!!」

声と同時に手を開いた。

威力を得た弓矢は勢い良く射出され、時を数える間もなく命中。

ゾルダの大砲でもダメージを与えられなかったそれを、撃ち落とすた。

「何それ、強すぎでしょ・・・。」

その様子を見ていた善子は圧倒的な威力に動けなかった。

空から落とされたモンスターは立ち上がり、怒りと取れるような勢いで二人の元へ接近してきた。

「もう、あなたに負けることはないわ。」

右手に拳を作り、力を込める。

「千歌ちゃんを守るために!!」

向かってくる的に拳を振りかざした。

「ライダーパンチ!!」

込められた拳は心臓部を捉え、体を砕いていく。

全身にヒビが渡ったところで爆発とともに、それは散った。

巻き上がった煙と炎だけがそこに残っていた。

「よっちゃん!このまま周囲の敵も倒していくわよ!」

善子があ然としているのがわかった梨子は、可笑しいと思いつつながら善子に呼びかけた。

それで正気を戻した善子はなんて言ったのかわからないような返事を返し、少し恥ずかしくなった。

「へえ、そんな力あるんだ。」

建物の陰から声がした。

誰かと慌てる善子を横目に、声の主に呼びかける。

「陰から見ているなんて、武士道はどうしたんですか。」

姿を見せながら、声の主は答える。

「そうねー、やっぱウィナーにならなきゃ意味なんてないでしょ？」

「え、ちよ、いろんなこと起こりすぎて、パンクしそう!？」

現れた人物に、善子のやっと思ち着いた思考が再び混乱する。

「こんな状況でも、あなたは戦うんですか？ 鞠莉さん。」

姿を見せた鞠莉はデツキを梨子たちにかざしながら答える。

「もう時間がないの。悪魔と言われたって良い。私は、勝ち残る。」

言ってから、鞠莉はかざしたデツキを落とした。

「新しいパフォーマンスだね。」

梨子と善子は目を疑った。

鞠莉が別のデツキを取り出したから。

紫色をしたデツキをかざし、出現したベルトに差し込む。

「変身。」

首を軽く回す。

関節の音が小さく鳴る。

紫色の、蛇を模したライダー。

「この王蛇の力で。」

王蛇の秘密

手に杖状の召喚機を持ち、けだるそうにライアとファムを見ていた。

「王蛇、最悪のライダー。」梨子が厳しい声で言う。

「あら、知ってるのね。」

「最悪と言われるその所以までは知りませんけどね。」

「それは、すぐにわかるわ。」言いながら、鞠莉は笑みを向けた。

一瞬、沈黙が流れた。

「鞠莉さん、こんな状況でもあなたが戦う理由って何ですか。」

「私はね、果南を救いたいなの。」鞠莉はすぐに返答した。

「果南さんを倒してでも?」

「・・・そう。でも私は負けたわ。果南には勝てないって、また負けてやっと思ひ知った。千歌っちから横取りしたってのに、恥ずかしいったらないわ。でも、最後に戦って区切りがついた。私が定めたこの2週間の期限、その間に私は最後の一人となるの。」

「最後の一人って、果南さん? って人と結局は戦うわけでしょ? なら今と変わらないんじゃないの?」端から流れを見ていた善子が口をはさむ。

「あら、あなたはアビスの話聞いていないのね。梨子、あなたはきくと聞いているでしょう?」

「ええ、ダイヤさんから。アビスという、戦いには含まれないイレギュラーが存在するって。」

「!?なんで教えてくれなかったのよ!」

「タイミングなかったじゃない・・・。でも、よっちゃんの言う通り戦いに勝ち進んでも結局アビス、果南さんを救うことはできないですよね。」

「ええ、そうね。だからね、私はやり直すの。」

「やり直す? 何を?」意味が分からず善子が言葉そのままを返す。

「そのままの意味よ。やり直すの。私たちの楽しかったと思う時間に、戻るの。タイムベントのカードを使ってね。」

「タイムベント・・・。」聞きなれない単語を梨子は復唱した。

「願いを叶えるために他のライダーすべてを倒したとして、その後私たちはどうなると思う?」

「そりゃあ、願いが叶うんじゃないの?」

「ううん、ラストバトルが待っているの。仮面ライダーオーデイン、不死鳥の戦士とのね。」

「仮面ライダーオーデイン・・・。」

「それに勝ってはじめて戦いが終わり、願いを叶えることができる。私は、そのオーデインが持っている時間逆流のカード『タイムベント』を手に入れて、果南がアビスになる前の時間に戻ってすべてをやり直すの。それが、私の本当の目的よ。」

戦いの先にあるものを知った梨子は情報を必死に整理した。

不死鳥のライダー、オーデイン。時をつかさどるカードを持つ、最後の戦士。

そつと、バツクルに触れる。

もしそれが、金色のライダーであるとしたら。

「オーデインが誰かはわかってるんですか?」梨子が聞いた。

「オーデインは私たちと違って無作為に選出されるわ。だから、名もなき誰か、と答えるのが適切なのかもね。」

名もなき誰か。きつとそれは、時間渡航によって選ばれたこの時間の人間ではない誰かのことなのだろう。

この時間の人間ではない誰かなどあり得ない、想像できない。

「もう一つ。果南さんがどうして戦うのか、考えたことはありませんか?」

「何度も、何度も、何度も何度も考えたわ。訊きもした。でも答えてくれなかった。ダイヤだって最初と話が違う。戦いを終わらせたら果南はどうなるの?そんなののために決まってる。だから、私が救うのよ!」

『ソードベント』

尻尾を模した剣を召喚し、それを梨子に向けた。

静かに向けられた剣先を見据えながら、梨子は召喚機からサバイブ

のカードを抜いた。

ライアの鎧が元の姿に戻っていく。

「あなたが王蛇の力を求めたように、私はこの力を求めた。」

言い終わると、梨子はカードを善子に投げ飛ばした。

いきなりで慌てながらも、善子は投げられたカードを受け取った。

「ちよ、これサバイブ……。」震える声で善子が言う。

「それを持ってここから離れなさい。大丈夫、私は負けないから。」

「でも、これがないや……。」

「行つて。そのカードの通り、私は生き残るわ。」

仮面の中で流れる涙を払うこともできないまま、善子は梨子に聞いた。

「大丈夫、なのね？信じていいのね？」

「だから言ってるじゃない。私を誰だと思ってるの、リリースよ。」

「うん、わかった。預かっておくから。」

善子は梨子たちに背を向けてその場から去っていった。

「二度もかっこつけるなんて、どうかしてるわ。」

かすれた声で呟きながら、大切に受け取ったカードを握って。

「さあ、始めましょうか。」

「ずいぶんと余裕なのね、あのカード強かったじゃない。」

「貫い物に傷つけるわけにはいかないもの。ダイヤさんに怒られちゃう。」

「そう、あれもダイヤが。何から何まで私の邪魔するかのよう……。」

「ダイヤさんの気持ちも、わかるうとは？」

「人の気持ちなんて、もう何もわからないのよ!!!」

王蛇の剣が近づいてくる。

先の睨み合いの中で、梨子は考えていた。

サバイブ体であったとはいえ、大きな敵との連戦続きで体力は限界間近だった。

仮面ライダーの力があれど、室内でピアノ弾いてばかりだったその体力はカバーしきれない。

サバイブ体を解除した今を考えると尚更。

デッキに残るカードはあと一枚。

最後の悪あがきでもしてみようか、そう思い、ファイナルベントのカードを召喚機に入れようとしたところで、その勝負はあっけなく終わった。

バツクルを貫通するように、王蛇の剣が身体を貫いていた。

剣が抜き取られると、ライアの変身は解け、梨子が静かに倒れた。痛みは感じ無かった。本当に痛いときは痛くないんだなどのんきに考えた。

貫かれた腹部を触ると、血が流れたことがわかる。

それでも、そこに傷はなかった。

ここまでの傷を負ったのに死ぬことがないとは。

ライダーの治療システムは致死量になるとここまでなのかと、またのんきに考えていた。

視界は擦れ、身体に力は入らず、腹部に回した手も力がなくなって地面に垂れた。

何とか意識だけは保とうと、目に残る全部の力を集中させ、視界を開かせる。

紫の鎧が血の垂れる剣を下ろして梨子を見ていた。

「あれだけ言っていた割に、何もしなかったのね。梨子、サヨナラ。」

梨子の目に映る紫は背を向けた。

「そして、ハロー。エビルダイバー。」

王蛇の手にあるのは何も書かれていないカード。

やがてそれは、つい先まで梨子が所持していたエビルダイバーのカードに変わった。

「なるほど・・・最悪のライダー、ね・・・。」

それを目の当たりにして、梨子は静かに目を閉じた。

元気全開DAY! DAY! DAY!

梨子と善子へ一時の別れを告げたそのすぐ後。

花丸もまた、千歌とルビィへ別行動する旨を伝えていた。

「おらはもう一度黒澤家へ向かいます。」

「花丸ちゃん、ルビィも……。」

「ルビィちゃんは千歌さんのことを助けてあげて。」

「でも、お姉ちゃんが……。」

「万が一の時、あなたに見せたくはないから……。」

ルビィは別れる直前の花丸との会話を思い出していた。

無数に現れるモンスターを撃破しながら、逃げ惑う人々を守る。

やがて行き場がなくなるであろうことは考えないでいた。

「千歌さん!こっちはもう誰もいません!」

「おっけー!ありがとう!これでしばらくの安全は確保できたかな……。」

モンスターが密集していた場所で個体を倒し逃げ道を作っていた二人は、あたりを確認して武器を下ろした。

「花丸ちゃんに善子ちゃん、梨子さんも……。みんな大丈夫ですかね……。」

「大丈夫だよ、みんなまた戻ってくるって言ってたし。私たちも頑張らないと!」

「そう、ですよね。がんばルビィ!」

「なにそれかわいい!がんばルビィ!」

異変が起こってから初めて休息を取る。

変身を解除して、デッキの枚数をリセットする。

そうしなければ、カード切れで戦う手段が限られてしまう。

数分の休息を取った後、遠くの空からモンスターの群れが来るのが見えた。

「また、来ましたね。」

「うん、でももう大丈夫。さあ、まだまだ行くよ!」

「はい!」

「あああああああああああ!!!」

それが爆発とともに散ると、今度はその周囲のモンスターを片っ端から殴りつけていく。

喉が痛み、血の味がしても叫び続けた。

やがてそれはルビイの耳にも届いた。

「千歌さん……?」

明らかに様子がおかしい千歌の姿をみて、近づこうとするが周りの敵がそれを阻む。

「千歌さん! どうしたんですか! 千歌さん!」

千歌の耳にルビイの声は届かない。

そこに確かにあるのは、殲滅する意思のみだった。

手の骨が折れる音がしても殴ることをやめなかった。

やがて周りのモンスターすべてが消滅しても、それに気づかず何かに向かって拳を振るい続けた。

「ストップ、千歌ちゃん。」

空に振るわれる拳を一つの手が止めた。

「もうまわりにモンスターはいないよ。だからもうおしまい。」
道を開けたルビイが、拳を止めた者の姿を確認する。

「……え?」

戦いで疲れているのだろうか。

けれど確かに、ルビイの目に映っているのは、ふたりの龍騎だった。
片方は、色が抜けているように感じる。

「あ、ああ、だれ……。」

「私だよ。あなたの頑張りは誰よりも知ってる。だから、この時のために、ずっと黙ってたんだ。ごめんね。」

もうひとりの龍騎は、威勢を失った千歌に語りかけた。

「千歌ちゃん、もう少しだけ頑張って。あなたがここで終わるはずは

ない。影に打ち勝つもの。」

「私は……千歌は……。」

「そう、あなたは何？むやみに攻撃するようなモンスター？違うでしょ？千歌ちゃん、あなたは誰？」

「私は……私はヒーロー……。そう、私は、みんなを守るヒーローなんだ！」

その声に呼応するように、千歌の召喚機が赤い炎に包まれた。

やがて炎が消えると、銃型の召喚機が現れた。

「ヨーソロー！さあ、そのカードを引いて！生き残りを願う決意のカードを！」

それに頷いて、デッキからカードを引く。

召喚機の口を開き、炎渦巻くそのカードをセットして閉じる。

召喚機がカード名を宣言した。

『サバイブ』

今度は千歌の身体が炎に包まれる。

その中で、龍騎の鎧は変化した。

炎が消えるとそこにいたのは、基本カラーに金が加わり、全体的に大きくなった鎧を身にまとった龍騎だった。

「この姿は……？」

千歌はもうひとりの龍騎に尋ねた。

「それはサバイブ体。簡単に言うとな、パワーアップかな？」

もうひとりの龍騎はそう言うのと、千歌の後ろを指した。

「まずは、あれを何とかしなきゃね。」

振り返ると、黒色に変色したドラグレッダーがこちらを見ていた。

「黒い……ドラグレッダー？」

「千歌ちゃん、ちよっと待っててね。」

もうひとりの龍騎は黒色のドラグレッダーへと近づいていった。

「千歌さん！」

様子を見ていたルビイが千歌に近づく。

「ルビイちゃん、大丈夫？」

「千歌さんの方こそ……あの、あれは誰なんですか？」

「うん、声ですぐにわかった。曜ちゃんだよ。ほら、私の隣にいた。」

「え？でも、変身できないって……。」

「私も、曜ちゃんは仮面ライダーじゃないってずっと思ってたんだけど……今はまず、さっきの女の子と曜ちゃんを助けなきゃ！」

「ええと……はい！」

「ドラグブラツカー、ダイヤさんはそう呼んでたっけ。」

ドラグブラツカーと呼ばれたモンスターは奇声を発した。

「さて、あなたのその力、曜ちゃんに貸しなさい！」

『ソードベント』

勢いを乗せた高い跳躍でドラグブラツカーの身体に乗り、剣をひと振りした。

しかし、シャーペン芯の如く剣は2つに折れてしまった。

「ええ!?弱!やっぱりブランク体じゃダメなのかなあ。」

しがみつく曜を振り落とそうと、ドラグブラツカーは身体をくねらせる。

「うわわわわわわ。下が水ならきれいな着水を見せられるけど、地面だしなあ……。」

「曜ちゃん！」

声のする方へ向くと、変化したドラグレッダーに乗る千歌がいた。

「曜ちゃん!何をすればいい?」

「千歌ちゃん!なるほど、ドラグランザーの上に……。分かった、私もそつちに乗る!」

言い切るより早く身体を空に投げ出し、向かってきたドラグランザーに着地した。

「ナイスキャッチ!ありがとう千歌ちゃん!」

「ううん、なんかもう色々聞きたいけど、まずはアレだよな?」

「さすが！さつきまでの様子が嘘みたい！」

「そちらに向かう他のモンスターはルビイが引き受けますー！」

下からルビイが二人に呼びかける。

「ルビイちゃんも！ありがとうー！よし、じゃあ千歌ちゃん。今から私がすることを言うね。」

千歌が目を見て頷いた。

「アレと契約する。千歌ちゃんのドラグレッツダーやルビイちゃんのメタルゲラスみたいのに、アレを私の契約モンスターにする。」

「へ？」

「そのために私をギリギリまで近づけて！そこでファイナルベントを放つから！」

「え、ちよ、契約って。」予想外の回答に整理がつかなかった。

「よしじゃあよろしく！」

「なんかもうわかんないけど、曜ちゃんがそう言うなら！ドラグレッツダー、じゃなかった。ドラグランザー！行くよ！」

ドラグランザーは咆哮を上げ応じるようにドラグブラツカーに向かって上昇した。

やがて、同じ高さに近づくと、曜が呼びかけた。

「このままもつと高く！」

「え？でも通り過ぎちやうよっ。」

「いいのー！っけー！」

言われるがままドラグランザーを上昇させ、ドラグブラツカーとの高さが出たところで、曜がまた叫んだ。

「よし！ありがとう！じゃあ千歌ちゃん、キャッチお願いね！」

「へ？」

きつと曜は千歌の抜けた返事を聞いていないだろう。

聞くより先に、ドラグブラツカーに向かって飛び込んでいったから。

「これだけ勢いがあればー！」

『ファイナルベント』

「ライダーキック!!!!!!」

力を右足に込め、一直線にドラグブラツカーに向かっていく。

「はあああああああああああ!!!」

足がドラグブラツカーに触れた瞬間、衝撃波が起こった。

自身もそれに耐えられず、身体が落ちていく。

ドラグブラツカーも無傷ではなく、身体がよろめきバランスを崩した。

「曜ちやーん!!!」

上から曜よりも早く急降下してきたドラグランザーと千歌が、落下する曜を拾い上げた。

「曜ちゃん!大丈夫!?何やってんの?!」

「おー、ナイスキャッチ!信じてたよ〜!」

急いで体勢を整え、もう一度ドラグブラツカーを見る。

「よし。契約だ、ドラグブラツカー。お前は私としか契約できないだろう?その力を貸しなさい!」

先までとは違う、真剣な声色でドラグブラツカーに呼びかける。

「それ!」

と思えば、いつもの明るい口調で、また身体を空に投げ出した。

「ちよ、また?!?!」

千歌が慌てて追おうとする。

「今度は大丈夫!」

曜が千歌に向かってそう言うと同時に、ドラグブラツカーが曜の元へ向かった。

やられる、千歌もルビイもそれを覚悟していたが曜は違った。

「よし、聞き分けのいい龍だ。」

気付けば、ドラグブラツカーの上に乗る曜の姿があった。

もうひとりの龍騎の色は黒色に変色し、バツクルと仮面に龍の紋章が刻まれた。

「契約完了。ああ、名前、そうだなあ。龍騎、とは違うし。うーん。」

ちらりと千歌の方を見ると、口を開けて目が点になったまま曜を見
てるのがわかった。

その間抜けな顔を見てくすりと笑い、

「よし、私はあの子の牙となる者。邪魔者がいれば噛み付こう。名前
はそう、龍牙！」

友情ヨーソロー

「曜ちゃん、何がどうなってるの?」

千歌が曜に問いかけた。

言葉こそ発しないものの、ルビイの目も同じことを訴えていることが伺えた。

「ずっと黙っていてごめんね。じゃあ、話していこうかな。千歌ちゃんがいライダーになる、その少し前から。」

「え……?」

曜は静かに、記憶を蘇らせていった。

高校1年の3学期があと少しで終わろうとしていた。

2月終わりの空気はまだまだ冷え切っていて、制服の袖に手を隠してばかりの、そんな毎日。

冬が終われば春が来る。春が終われば夏だ。高飛び込みをいっばいやろう。沢山泳ごう。

隣で今にも机に突っ伏しそうな千歌ちゃんとたくさん遊ぼう。

そんなことばかり考えていた。

実家のお手伝いがあるからって、その日千歌ちゃんは先に帰ってしまっていた。

1人で帰るなんていつぶりだろう。なんとなく考えながらバスに乗った。

私の家は学校から少し離れているし片道数百円するから、滅多に学校の人と会うことがない。

そう、思っていたんだけど――

「こんにちは、渡辺曜さん。」

その人のことは知っていた。

生徒がもともと少ないこの学校では、この時期から来年の生徒会長が誰になるのか噂が流れる。

今年その噂の人物、黒澤ダイヤさんが目の前にいた。

「いきなりでごめんさい、少しお話したいことがあるのだけれどよろしいかしら？」

凜とした態度と澄んだ声に圧倒されながら、思わず私はこくりとうなづいた。

「そう、ありがとう。そういえば自己紹介がまだでした。私は黒澤ダイヤ。ダイヤで構いません。」

予想が合っていた、まだこの頃はそんなのんきなことを考えていた。

話す場所に選んだのは大きな水門の展望台だった。

私とダイヤさんしかない空間。

ダイヤさんは外の景色を見て、私はそこにある椅子に腰掛けてそれを見ていた。

ダイヤさんは大きな深呼吸をしてから私の方に向き直り、話し始めた。

「今日はあなたにお願い事があってきました。あなたに、仮面ライダーに変身して欲しいのです。」

正直なことを言えば、そのときはこの人何を言っているんだろう？と思った。

仮面ライダー？聞いたことがない。変身？コスプレのなにかだろうか？

「不思議に思うのも無理ありません。まずは私が、それをお見せしましょう。」

そう言うと、ダイヤさんは反射する鏡にカードケースみたいなものをかざした。

私は目を疑った。

鏡の中から、ベルトのようなものが出てきてダイヤさんの腰に巻き付いたのだから。

「変身」

その合図とともにカードケースを先のベルトにはめ込んだ。

「いやいや、嘘でしょ……。」思わず私はつぶやいた。

先までダイヤさんがいた場所に今は鎧を身につけた戦士がいるのだから。

「これが、仮面ライダーの力です。」

ダイヤさんは当たり前のように言ったが、私には受け入れ難かった。

それでも、目の前にある現実を受け止めるしか未来はなかった。

夢ならばと何度かつねった手首は内出血していた。

「変身して、仮面ライダーってのは何をするんですか？」

私は聞いた。少しでも受け入れたと感じたのか、ダイヤさんの口元が少し緩んだのがわかった。

「では説明していきましよう。願いを叶えるための戦い、ライダーバトルについて。」

ダイヤさんの説明はとてもわかりやすかった。

ミラーワールドという存在、そこに生息する怪物ミラーモンスター、11人の仮面ライダー同士の戦い。

小説の中の出来事のようなことがただひたすらに続いた。

「私にも、戦えというんですか？」

誰かを落としてまで叶えたい願いなど、私には心当たりがなかった。

しかし、それに対するダイヤさんの返事は意外なものだった。

「いいえ、あなたにはイレギュラーを担当してもらいます。」

「いれぎゆらー?」

「願いをかけて戦う11人の仮面ライダー。それには含まれない12人目……いや、13人目の仮面ライダーになってもらいたいのです。」

「13人目・・・?12人目じゃなくて?」

「それはまた、いずれ知ることになりますので。あなたにとっては、今から話すことのほうが重要かもしれません。」

「どうしてこの人は私が変身すると決めた前提で話を進めているんだらう、と首をかしげた。」

「けれど、その理由はすぐにわかった。」

「11人のライダーのうちの一人に、あなたのお友達、高海千歌さんが選ばれます。」

言葉はなかった。

千歌ちゃんが、戦う?誰かと傷つけあう?

そんなこと、許さない。

「千歌ちゃんを巻き込まないで。」

「残念ですが、私にそれを変える力はありません。さらに言えば、私に仮面ライダーとなる人間を選ぶ権利もありません。」

「どういうことですか?今私はあなたから・・・。」

「そう、それこそ本題です。」

「・・・聞かせてください。」

「私があなたに渡す仮面ライダーの力は、この時間の戦いと全く関係のない力です。」

「それってイレギュラーってことですか?」

「大まかに言えばそうですが、厳密に言えば『どこかありえたかもしれない別の戦いの力』ですかね。」

私にはあまりピンと来なかった。

「まあ、私がイレギュラーと申し上げたのですし、それで構いません。」
「言いながら、ダイヤさんは私に何も描かれていないカードケースを渡した。」

「そこにはまだ力がありません。ブランクの状態です。仮面ライダーは普通、ミラーワールドのモンスターと契約して、その力を使って戦います。けれど、そのデッキでは、通常のモンスターと契約することはできません。」

「なら、どうやって・・・。」

「それで契約できるのは同じ虚構の力。そしてそれは、いずれ高海千歌さんの元に現れます。」

「どうして千歌ちゃんに・・・!」

「いずれ高海千歌さんが手にする龍の力には影となる存在がありません。それは次第に千歌さんの精神と肉体を乗っ取るでしょう。」

「つまり、私はそれと契約して千歌ちゃんを助ければいいんですね。」
「簡単に言えばそうです。高海千歌さんを守るためならば、きっとあなたはそれを受け入れるでしょう?」

そして私は、仮面ライダーになった。

それからしばらくして、千歌ちゃんから仮面ライダーの話を聞いた。

あの話は本当だったとショックを受けた。

けれど千歌ちゃんが話したのは白い虎だった。

ダイヤさんが話していた龍とは違っていた。

私は悩んだ。このことを千歌ちゃんに話そうかどうか。

でも、千歌ちゃんは言った。

「ライダー同士が戦うのは間違っている」と。

私がここでライダーだと告白したら、彼女はどんな顔をするだろう。

だから、私は来る時まで隠すことを決めた。

『何度も現場に遭遇するうちに、これが現実だと受け止めることができようにはなったが、今でも夢なのではないかと疑ってしまう。』

(同じ音と、同じ光景を私も感じてしまっていたから。) EP2

やがて、梨子ちゃんがここにやってきた。

梨子ちゃんは私が力を持っているってすぐに気付いた。

『そういつて曜のほうに視線を向けると、曜は困ったようにして、私はどうか、と口にした。』

(私はどうかな、私の力は、それとは別のものだから。) E P 3

後に聞けば、ミラーワールドはライダーしか認識できないからと答えた。

それに千歌ちゃんが気付かずにいたのは、最初から私が見ていたからだろう。

千歌ちゃんが梨子ちゃんとの戦いで負けてタイガの力を失った時。

急いで千歌ちゃんのもとへ向かおうとしたんだけど、先にダイヤさんがいた。

1つ、千歌ちゃんの悲惨な具合を受け入れられるか。私はいと答えた。もう、覚悟は出来ていたから。

もう一つ、もう一度千歌ちゃんが戦うといったらどうするか。私は、私が聞くと答えた。それが私の覚悟だったから。

そして千歌ちゃんは、龍騎のデッキを受け取った。

同時にこの時から、ダイヤさんがこの戦いに何か仕掛けようとしていると思いはじめた。

友情ヨーソロー2

梨子ちゃんを諭したときは、本当に千歌ちゃんはすごいなってただただ感心した。

もし私が同じ立場なら、何も言わずベルトを破壊していただろう。

梨子ちゃんがそうしたように。

けれど、梨子ちゃんは仲間となった。

千歌ちゃんのサポートができる人が現れたことは本当にありがたかった。

私は戦えないから。まだ、その時ではなかったから。

梨子ちゃんに、このデツキについて言われたことがあるんだ。

見せてはいないんだけど、気付いてみたい。

「あなたのそれは私たちとは違う」って。

梨子ちゃんもさすがだなって。

でも、私は言った。

「何も変わらないよ。みんなと同じ、ごく普通の女の子の願い事だから。」

千歌ちゃんたちが善子ちゃんたちと出会っていた頃、私は情報を集めるために動こうとしていた。

『あの時のダイヤの言葉、鞠莉の参戦、果南のこと、そして（このデツキのこと）。』EP11

そこへ鞠莉さんがやってきた。

内容はこの間千歌ちゃんに話したこと。

そしてもう一つ。

ダイヤさんのこと。

「ダイヤさんは何を知っているんですか。」

鞠莉の表情が曇る。

「ダイヤ・・・昔からおカタイヤツだとは思っていたけれど、まさかここまでとは思っていなかった。」

「何か、あったんですか。」

「私はもともとダイヤからこの戦いについて教えられた。果南のことに気付いたのはそのすぐあと。それで私は願いをかけたの。果南を止めたいって。」

「私も、ダイヤさんから。」

「そんな気がしていたわ。変身しないあなたがここまで知っているのは変だものね。」

「……だけど、ダイヤは龍騎の力を投げた。そして言ったの。『この戦いを終わらせる』って。そんなことしたら、果南はどうなるっていうのよ!!」

鞠莉さんが机をたたく音が部屋中に広がった。

直後、私の顔を見て言った。

「あなた、オーデインについては?」

「オー、デイン?」

「ダイヤ、これは話していないのね。私がリークするとも思っていたのかしら。いいわ、教えてあげる。」

私は、オーデインについての話を聞いた。

不死鳥、時間渡航、タイムベント……。

「それがオーデイン、戦いの果てで待ち受けるライダー。」

その時、ミラーワールドから剣同士の交わり合う音が聞こえた。

見れば、龍騎とアビスが戦っていた。

「千歌ちゃん……! 果南ちゃんと……!」

「あら、でもかなり押されているわね。あのままだとあの子はもう駄目ね。」

このまま千歌ちゃんを脱落させるわけにはいかなかった。

だから私は一つ、鞠莉さんに提案をした。

「鞠莉さん、果南ちゃんを止めたいんですよね?」

「何度も言っているでしょう?それが私の……」

「きつとですが、私はオーデインの居場所を知っています。」

はなしを聞いていて、私は居場所の見当がついていた。

「どうということ?それ」

「最後の一人にならずとも、鞠莉さんがタイムベントのカードを手に入れられるかもしれない、ということですよ。それさえ手に入れば最後の一人にならなくてもいいんじゃないですか？」

鞠莉さんは不敵な笑みを見せて言った。

「つまり、何が言いたいのかしら。」

「千歌ちゃんを助けてください。千歌ちゃんが脱落してしまつたらだめなんです。助けてくれたら、オーデインの居場所を、といっても確実ではないですが、教えます。それに、今果南さんと戦って止められるのであれば、それに越したことはないですよね？」

「あなた、意外とクールなのね。」

「普段使わない頭使っているせいでもうパンクしそうですけどね。」

千歌ちゃんと合流した後、私は千歌ちゃんにひとつ提案をした。

ルビイちゃんを仲間にして一緒に戦おう、と。

普段の千歌ちゃんであれば、間違いなく断るであろう提案だったけれど、千歌ちゃんはそれを受け入れた。

誰よりも自分以外が戦うことを嫌う千歌ちゃんがそれを受け入れてしまった時、私は察した。

その時が近づいている、と。

それから私はわざと嫌なことを言った。

ルビイちゃんたちには本当に申し訳ないと思ってる。

それを乗り越えたあなたたちは、私以上に立派な仮面ライダーだ。

それからは千歌ちゃんたちが知っていることとほとんど変わらな
い。

元々、龍騎のデッキにダイヤさんはサバイブのカードを仕込んでいたんだ。

ドラグブラツカーが現れた時、千歌ちゃん自身がそれに対抗するための切り札としてね。

いくら、契約する私がいなくても、龍騎から追い出さないことに

は勝ち目なんてなかったし。

見事、千歌ちゃんはサバイブを引いてくれた。

千歌ちゃんは生き残る力を、私は牙を手にした。

「ってわけ。これが私の今までの戦い。ずっとだまっついて、ごめんなさい。」

深々と頭を下げる曜に千歌が慌てる。

「そんな、頭を上げて。曜ちゃん。曜ちゃんは私のため、いや、みんなのために一人戦ってくれていたんだよね。ありがとう。」

「千歌ちゃん……。」

「曜ちゃんがルビイちゃんたちの話をしたときに、どうして二人のことを知っているんだらうってずっと疑問だったんだけど、そういうことだったんだね。」

「ルビイも不思議でした。戦えないって言ってるのに、どうして鏡の向こうが見えているんだらうって。」

「あれ、私隠すの下手だったかな……。」

「……曜ちゃんらしいね。」

三人は笑いあった。

普通の少女と何ら変わりなく。

しばらくして、曜が言った。

「ドラグブラツカーを呼び出すためとはいえ、ルビイちゃんを戦いに巻き込んだこと、本当に申し訳なく思ってる。ごめんなさい。」

「へ？いやいやいやいや！あああ謝らないでください！私が、決めたことですから。」

大げさに手を振るルビイに曜はくすりと笑った。

「で、曜ちゃん。それだけ？」千歌が言った。

特別厳しいわけではない、いつもと変わらない口調。

曜はやられたという表情を見せた。

「ほんと、千歌ちゃんに隠し事はするもんじゃないなあ。一度明かしたら、とことん来る。」

「えへへ、まあ、幼馴染だからね。ライダーなのはわからなかったけど……。」

「あと一つ、言わなくちゃいけないことがあるんだけど、それは私より別の人の口から言っただけのことでもある。」

「別の人？」

「ルビイちゃん。」

「ピギイ!?ル、ルビイは何も知りません……!」

「あ、いや、違う違う。ルビイちゃんはどうであれ変身しなければいけなかったんだ。」

「ルビイが、変身しなければいけなかった……?」

「そう、その理由でもあるんだ、これは……」

曜が言いかけた時、遠くから声がした。

誰だかはずきりとわかる距離まで近づいてきて、その人が涙を流していたことも分かった。

「善子ちゃん……!」

ルビイが駆け寄る。

トレードマークのシニオンはほどけ、服はところどころ破れ、汚れていた。

顔にも傷と泥がついており、それでも手の中にある一枚のカードだけは離さないでいた。

一緒にいたはずの梨子がないことも、誰もが気付いていた。切れる息を整えることもなく、善子は助けを求めた。

「リリーが……。助けて……。」

「落ち着いて善子ちゃん。梨子ちゃんがどうしたの?何があったの?」

千歌がそつと背中をさすってなだめる。

呼吸が整いかけてきたところで、善子が再び口を開いた。

「リリー、梨子は、鞠莉さんの相手をするって、これを持って立ち去れって、立ち向かう体力なんて残っているわけないのに、逃げる途中で聞こえたの。デツキが壊れる音、誰たが倒れる音を！」

曜は善子が持つカードを見た。

「サバイブのカード。それがあれば鞠莉さんにも・・・待って、鞠莉さんはどんな仮面ライダーに変身した？」

「どんな・・・確かリリーは王蛇って・・・。」

「王蛇・・・。」

「どうしたの？曜ちゃん。」

「千歌ちゃん、みんなも。急ごう。みんなに真実を知ってもらおう必要がある。」

「リリーはどうするのよ!？」

「梨子ちゃんはあなたにサバイブ、生き残れって託したんだよ。それを無駄にするの?。」

「・・・言ってたから。絶対負けないって。」

「だったら、きつと梨子ちゃんは負けない。」

「・・・教えて、私にもその、真実ってやつ。」

千歌は一人呟く。

戦わなければ、生き残れない。

トリコリコPLEASE!!

お世辞にも綺麗とは言えない澱んだ空。

そこを飛び交うミラーモンスター。

鳴き声か叫び声か、きつと耳を塞いでも貫いてくるそれは鳴りやむことがない。

ダイヤは深くため息をついて空から視線を外した。

先から動く茂みに目をやり、呆れた声で呼びかける。

「いつまでそうしているんですか。別に、捕って食べようとか思っていますせんわ。」

その言葉に反応し、隠れていた影が姿を現した。

「一応これはライダーバトル。相手がライダーなら普通は構えるすら。」

花丸はいつでも変身できるようにデツキを右手に持ちながらダイヤの前まで進んだ。

「相手がライダーなら、ね。おおよその見当はついているのですか。」

「・・・わからないすら。このライダーじゃないかと予想を立ててもそれが信じられない。それぐらい、おらが聞いていた戦いと現状が違ってきているすら。」

「無理ありません。まあ、答え合わせはそのうちに。それより用件は？何かあって戻ってきたのでしょうか？」

「・・・わかつているくせに。」

「あら、二つも下の後輩にそんなことを言われては仕方ありませんね。」

「何か知っているんですか。今の世界のこと、ライダーバトルのこと。」

ダイヤは再び空を見上げた。

花丸もつられて空を見る。

「今の世界はミラーワールドと現実世界が混じった世界。逃げ惑う人々は現実で、それを追うモンスターは虚構。」

「今もたくさんの人が襲われています。今までだって時々モンスター

は鏡から出てきて人々を鏡の向こうに引きずり込もうとしていました。モンスターたちは、ミラーワールドは何をしようとしているんですか。」

ダイヤは花丸の右手をつかみ顔の前まで持ち上げた。突然のことに驚いた花丸は引き払おうとしたがダイヤはそれを逃さなかった。

「あなたが今こうして持っているデツキの中にもモンスターは眠っています。ライダーは皆、モンスターを飼っている。じゃあ、そのモンスターがなんであるか、あなたは考えたことがありますか。」

「モンスターが、何なのか・・・。」

言われ、花丸は自分の右手を見つめた。

今まで役目だと自分に言い聞かせてきた花丸にとって、それは考えることを拒んでいたことであつた。

考えてはならないと、誰かに言われたような気がしていた。

「きつと、今まで考えてこなかったのでしょうか。仕方のないことです。特にあなたは。」

「特に・・・？それってどういう・・・。」

「先にライダーバトルとモンスターについて話しましょう。あなたのことはそれからでも遅くはありません。」

花丸の右手を離し、今度は自分の手を見た。

「誰もが一度は願うこと。お金持ちになりたい。頭が良くなりたい。絵がうまくなりたい。好きなあの子に振り向いてほしい。花丸さん、あなたにだつてきつとあるはずですよ。」

「それは・・・。」

「あるところに、一人の少女がいました。その少女にも同じように願ったことがあります。ある理由で友達とけんかしてしまった少女はこう願つたんです。『私たちは一緒にならない方があの子にとつて幸せだった。あの子のために、私たちが出会わない世界を』と。」

花丸はそれをじつと聞いていた。

「それはとても優しい願いでした。とても優しくはかない思いでした。やがてその思いが一つのモンスター、ゴルトフェニックスと仮面

ライダーオーデインを生みました。それがライダーの始まりです。」
「オーデイン……。ライダーバトルの最後に待ち受ける最後の戦士すらね。」

「その通りです。様々なモンスターと仮面ライダーが生まれました。オーデインを含め、仮面ライダーは12体。少女が生み出した仮面ライダーに選ばれる条件は一つ。『誰かを想う気持ち』です。少女と同じように、誰かのため、誰かに、といったような想いでした。そこでは、愛、恋、友情、すべてが同じ想いとして扱われました。」

「てことは、おらも……。？」

「ええ、きつとルビィや善子さんに対する友情でしょうね。姉としてその感情には感謝を述べなければなりません、それはまたすべて終わってからです。」

「え、あ、いや、そんな……。ずら。」

「話を戻しましょう。誰かを想う気持ちが強い11人がライダーに選ばれる。でも、そういうのって11人しかいないはずがありませんよね。」

「そりゃあ……。。」

「では、その選ばれなかった候補者たちの想いはどこへいくと思えますか？」

花丸は考えた。

私たち以外の、ライダーに選ばれなかった想いの行方。

「……。まさか!!!」

花丸はそれが間違っていてほしいと願った。

「わかったようですね。」

けれど、それは叶わない。

「まさか、ミラーモンスターって……。。」

「そう。ミラーモンスターの正体は仮面ライダーに選ばれなかった者たちの想いです。選ばれなかった、つまり他より小さな想いだど突き付けられたそれらは、他の願いや想いを取り入れて自己を大きくしようと考えました。ミラーモンスターが人々を襲うのはそれが理由です。」

「ミラーモンスターが、元はおらたちと同じ……。襲われた人はどうなるんですか。」

「外傷は与えられません。普段と同じように、なにも変わらず戻ってくるでしょう。けれど内面、好いていた相手や親しくしていた感情、その一番大きな部分がなくなります。」

「どういうことすら？」

「例えば、カップルの片方、男性が襲われた場合、その後男性は女性に対しての感情を奪われて女性に対して好きだと思わなくなるでしょうね。」

「そんなことって……。」

「あなたたちが行っていることだって変わりません。」

その言葉だけで花丸は何も言えなくなってしまう。

モンスターの元の正体を知った今、自分の力の正体にも気付いてしまったから。

「あなたたちがモンスターと戦うのは、あなたたちが使役するモンスターが本来行うべき行動を代行に行っているということですよ。けれど人を襲うわけにはいかない。だから想いを持つモンスターを無意識的に倒すんです。」

今まで忌々しいと思っていたものと自分が同じだったと聞かされ、めまいがする。

「嘆くことも自分を責めることもありません。結果としてあなたたちは人々を救っているのですから。」

真実を知った今、後戻りが出来なくなつたと実感した。

ライダーバトルで人は死なない。

けれどそれは、死なないのではなく死ぬことを許されないのだ。

死んでしまつては、誰かを想うことができないから。

想う者同士が戦い、傷つけあい、でも逃げられない。

戦わなければ、モンスターに想いを奪われてしまう。

結果、戦わなければ己という存在が生き残れないのだ。

「じゃあ、どうして今、世界が混ざり合っているんですか？」

花丸は決意した。

それでも戦うと。

その先へ進むと。

たとえばその先が間違っつていようとも。

「・・・覚悟ができたようですね。では、続きを・・・それは後になりそうです。」

ダイヤはそう言うと、花丸のさらに奥に焦点を当てた。

視線の移動に気付いた花丸も、その先に振り向く。

「やつと見つけたよ、ダイヤ。」

ポニーテールの少女は、歩きながらダイヤに話しかけた。

花丸もその少女が誰であるか察しがついた。

「あら、家にいるのは当たり前ではありませんか。で、ご用件は？」

「千歌から聞いた。デツキを渡されたって。どういうこと。」

「どういうことって。その言葉の通りです。それ以上でも、それ以下でもありません。」

「あくまで知らない、と。」

「もしそれでも聞きたいようでしたら、これがライダーバトルだって理解していますわよね？」

「・・・さすが。」

果南はデツキをダイヤに向け、ベルトを呼び出した。

「変身。」

二人の目の前にアビスが現れる。

花丸も変身しようとずっと持っていたデツキをかざそうとした。

しかし、ダイヤがそれを制止する。

「いいです、花丸さん。これは私が受けた戦いですから。」

「でも・・・。」

「先ほどの答え合わせです。」

ダイヤはデツキを宙高く投げ上げ、落ちてきたところで出現したベルトにデツキを差し込んだ。

「変身。」

「・・・ダイヤ、それ、なんなの。」

果南はその姿を見て眉を寄せた。

何度かライダーとは戦ったが、そのどれとも姿が異なっていた。

そも、変身時のベルトから、他とは明らかに異なっていたのだ。

花丸は絶句する。

その姿に、その変身に。

目の前にいるのは、仮面ライダーではなく……。

「どの仮面ライダーか。いいえ、これは仮面ライダーではありません。

仮面ライダーのサンプルから作り上げた疑似ライダー。命名するな

らば、オルタナティブ、とでも。」

英雄は戦う

デッキがあり、ベルトがあり、変身をして鎧を身に纏う。それだけ見ればこれまでのライダーと変わらない。

けれどそれは、ライダーと呼ぶには抵抗のある姿だった。

例外であるアビスでさえ仮面ライダーであると認識したにも関わらずそう思うのは、きつとその雰囲気だろう。

「千歌さん、言つてませんでしたか？最初は別のライダーであった、と。」

果南は千歌との会話を思い起こした。

たしかに千歌は言っていた。最初はタイガであったと。

「でもそれがどうしたの？それ、どう見てもタイガじゃないよね。」

黒ベースの機械チックな姿は、タイガのそれとは似ても似つかない。

「ええ。あの時タイガのデッキは梨子さんの手で破壊されました。それが恐らくこの戦いにおける最初の脱落者。私はそのデッキを回収し、それを元に生まれたのがこのオルタナティブ。」

「どうしてそんなもの作ったの。龍騎のままでもいいじゃん。」

「ミラーワールドを、閉じるためですわ。」

ダイヤはデッキからカードを取り出し、スリットの入った右腕の召喚機にスライドした。

『ソードベント』

女性声の機械音がカード名を告げる。

棘のようなものがついた剣が現れた。

ダイヤはそれを構えると果南に言った。

「これ、変身できる時間が短いんですの。」

『ソードベント』

果南も剣を召喚し、その先をダイヤに向けた。

「そう。じゃあ、続きは倒してからだね！」

果南が素早く間合いを詰め、剣を振るう。

ダイヤはそれを剣で受け、鏝迫り合いに持ち込んだ。
仮面越しに、両者睨み合う。

「偽物ライダーがどこまでやれるかな？」

「油断していると、死にますわよ。」

果南の剣を払い、その隙を狙って斬り付ける。

ダメージを受けた果南は声を漏らしながら距離を取った。

「……この……！」

再び距離を詰め、剣を振る。

剣と剣がぶつかる音があたりに響く。

それは、異様な光景だった。

イレギュラーとイレギュラーの戦い。

どちらが勝ってもライダーバトルには何も影響しない。

言葉を選ばず言えば、この戦いは無意味なものだ。

「じゃあ、どうして二人は戦っているずら……。」

花丸はわからなかった。

鳴り続く金属音、そして吐息。

その戦いの果てに、二人は何を見ているのか。

花丸の困惑を他所に、戦いは過熱していった。

「なんだ、鞠莉よりやるじゃん。」

「……鞠莉さんは？」

果南はそれに淡々と答える。

「ベルトを破壊する前に逃げられちゃった。今にも泣きそうな顔で、

まるで手が届かないものを見るような目で私を見ていた。」

「そう……。確かに、今は届かないでしょうね。」

『アクセルベント』

「それは果南さん、あなたも同じでしょう？」

花丸は目を疑った。

今まで果南と向かい合っていたはずのダイヤが、今はその背後に移

動していたから。

「なっ……！」

反応するより先に、ダイヤが剣を振るう。

背面に攻撃を受けた果南が膝をつく。

そのまま後ろに剣を回すが、ダイヤは果南の目の前に移動していた。

再度、ダイヤは攻撃した。

「くっそ……！」

『ストライクベント』

体制を崩したまま、高圧の水流をダイヤに放つ。

ダイヤがそれを防ぎ切り、視界が戻る。

そこに、果南の姿はなかった。

「撤退……ですか。」

ダイヤは変身を解除し、自身のスマートフォンを確認した。

「6分32秒、私も危なかったのですね。」

一人そう呟き、立ち尽くす花丸に声をかける。

「一先ずは終わりましたわ。傷が癒えぬうちは仕掛けても来ないでしょう。」

まるで戦闘などしていないかのように話を進める。

「……どうして。」

「はい?」

「どうして、ダイヤさんは戦うんですか。」

抱いた疑問をぶつける。

質問しかしていないことはわかっていた。

それでも、これだけは聞きたかった。

ダイヤはそれに考える間もなく答える。

「決まっていますわ。ミラーワールドを閉じるためです。」

「何がダイヤさんをそこまで……。」

何かを考え、それからダイヤが口を開く。

「二人とも、大切な友人だったのです。」

だった、という言葉の真意を問おうとしたとき、自身の名を呼ぶ声が聞こえた。

「花丸ちゃん!ダイヤさん!」

名を叫ぶ千歌。その横には曜とルビィに身体を預けるように歩く

!!!!!!

花丸は悔いた。

気付いてしまった。

ルビイが戦わなかった期間。

その間に、姉であるダイヤへの想いがモンスターに奪われてしまっていたことに。

これまでほとんど二人が話しているところを見ていなかったから気付かなかった。

私たちが戦っている間にも、徐々にモンスターはルビイを蝕んでいた。

「花丸ちゃん落ち着いてーどうしたの!？」

千歌たちの言葉は耳に届かず、花丸は叫び続ける。

「花丸さん、あなたは間違ったことはしていませんわ。」

聞こえていないとわかりながらも、ダイヤは花丸に語りかけた。

「千歌ちゃん、ルビイちゃん。まずは善子ちゃんを。私から話すよ。本当はダイヤさんからまとめて話してほしかったんだけど、私にもこれは予想できなかったから……。ダイヤさん、花丸ちゃんをお願いします。」

「ええ、それと曜さん。」

「はい？」

「善子さんが回復したのち、皆さんを広間へ。」

「……わかりました。」

「花丸さん。」

「ごめんなさい、ごめんなさい……。」

「あなたが泣いていては、あの子は誰を想えばいいんですの。」

「ごめんなさい、ごめんなさい……。」

「……はあ。私はあなたに言いました。感謝していると。正直、こうなることはわかっていましたし、私も覚悟をしていました。そりゃあ、実の妹に他人だと言われているのと変わりませんから、辛いわけはないのですが。」

「・・・！ああ、あああああああ・・・!!!」

「でも、あなたがいてくれて良かった。あなたがいて、皆さんがいて、だからあの子はまだ人を想うことができる。ありがとう。」

「でも・・・でも・・・!!!」

「私があなただの立場であれば、同じことをしていたでしょう。戦いから遠ざけるために。」

「でも、おらと違って二人は姉妹だから・・・」

「ええ、だから私は信じています。また、元通りになると。まだまだ私たちは未熟ですから。」

「未熟だから・・・」

「そうです。あなたも、私も、皆さんも。だからまずは、顔を上げて涙を拭いて。顔を洗って来なさい。広間で待っていますから。」

そう言い残し、ダイヤは屋内へ入っていった。

袖で涙を拭き、ダイヤの背中を見る。

そして心に決める。

オーデインを倒し、姉妹の救済を願うと。

復活の日

それから、どれぐらいたったのだろうか。

壁にかかる時計を見れば2時間ほどしか経過していないことがわかる。

それでも、千歌をはじめそこにいる皆が時の流れを何倍にも感じていた。

花丸とダイヤを残し、善子を別室で安静にした後。

曜はダイヤが花丸に伝えたことを同じように千歌とルビイに伝えた。

既に姉への想いを奪われているルビイは、その話を聞いて黙り込んだ。

姉はずっと隠していた。実の妹が姉に無関心となろうとも。自分がその立場であればどうだろう。

きつと耐えられない。想いのない今、それは実感として湧かないがそれでも吐き気のする辛さだろう。

それを、あの人は一人で耐えてきたのだ。

友人と敵対しながら、怪物と戦いながら、この世界を閉じるために。そうまでしてこの世界を閉じようとするわけはわからない。いや、興味がどうしても向かない。

ああ、これもその影響だろう。腹立たしい。煩わしい。感じることはない愛情を、関心を、知らない間に奪われていた。

けれど、それを責めることが出来ようか。

ルビイのことを想い、友人は、花丸は戦いから遠ざけようとしてくれていたのだから。

先の悲痛な叫びを思い出す。

自分ができることは何だろう。

一方、千歌はそれらを受け入れようとしていた。

これまで、何度も悩み、迷い、逃げてきた千歌は覚悟を決めていた。誰のために戦う？みんなのためだ。

何のために戦う？みんなが争わないようにするためだ。

誰が戦う？自分が戦えばいい。

それで、皆が再び笑顔になれるなら。

自分の想いは、誰かが覚えていてくれれば、それで……。

善子の回復を待つ間、千歌、ルビイ、曜の三人は交代で外の見張り
と町の様子確認、善子の介護を分担した。

30分周期のローテーションで回すことにした三人は、それぞれの
持ち場に移動した。

今からは曜は町へ、ルビイは家の外周、千歌が善子の世話をを行う。
眠りから目が覚めていた善子は、横に座った千歌にそつと話しかけ
た。

「さっきの話、私も聞いてた。っていうか、あの人きつと聞こえるよう
に話してたわ。」

「あはは、曜ちゃんそういうタイプだし。」

「シヨックじゃないの？」

千歌は善子の顔を見てそれから視線を外へと移した。

「そりゃあ、シヨックだよ。私たちは戦うしか道がないなんて、何なん
だろう。」

善子は外を眺める千歌の背中を見つめていた。

「でもね、それを聞いたとき思ったの。もしかしたら、それって当然な
のかなって。」

「どういうこと？」

「ほら、私たちこうやって大きな力を手にしたでしょう？誰かへの想
いを、絆を守る為に。でも、本当にそれでよかったのかな。」

「力を使うことが、ってこと？」

「うん。前、って言ってもこの間の話なんだけど。梨子ちゃんとお友
達になるときに、千歌思いつきり梨子ちゃんの頬にパンチ入れたの。」
「ええ……。」

「今思えば痛そうだなーって。結局それから梨子ちゃんを止めること
ができてお友達になれたんだけど、時々思うんだ。あのときパンチし
なくても同じ道を進めたんじゃないかって。」

千歌は言いながら、自分の右手を見た。

「・・・なるほど。そういうことがあったのね。」

「まあ、でも今は今やらなきゃいけないことがあるからね！」

「そうね・・・。リリー・・・。大丈夫かな。」

善子の泣きそうな声に気付いた千歌は立ち上がり、笑顔を作って善子の方を向いた。

「大丈夫！だって梨子ちゃんだよ。負けないって言ったんだから負けないし、大丈夫って言ったのなら大丈夫だよ。」

千歌がニカッと笑う。

つられて善子も同じ笑顔になろうとした時だった。

壁が崩れる音がした。

爆音が周囲を埋め尽くす。

砂埃が立ち込め、視界が悪くなる。

最悪の事態を予期した千歌は、手にデツキを握りしめた。唾をのむ。

緊張で喉が渴いていく。

音で聴覚が若干異常を起こし、耳鳴りが止まらない。

それでも千歌は、砂埃の中に立つ一つのシルエツトから目を離さなかった。

影はだんだんとこちらに近づいてくる。

あと数メートルというところで、先に正体に気付いたのは善子だった。

「王蛇・・・!!!」

現れたのは紫色の鎧を身に纏ったけだるそうな戦士。

二人の前に現れるなり、変わらない陽気な声で話しかけた。

「壊せばどこだって玄関になると思ったのだけど、案外そうはいかないのね。」

「鞠莉さん・・・！」

千歌もそれに気付き、緊張が加速する。

「扉と壁、壊さなくてもよかったんじゃないですか？」

「そんなことないわ。いつだって奇抜さは大事でしょ？それに、ちゃんと玄関から入ると見つかってしまうもの。」

「ダイヤさんに？」

「オフコース☆マリーがここに来たのは一つよ。」

『ソードベント』

「善子が持つサバイブ、それを取りに来たのよ。」

言いながら、鞠莉が善子に急接近を試みた。

「変身!!」

『ガードベント』

千歌は龍騎に変身し、盾を身に着けそれを防ぐ。

「私が相手だ・・・!」

『ソードベント』

剣を召喚し、体制を整える。

「あら、じゃあまずはあなたから・・・!」

勢いよく剣をふるう鞠莉の攻撃を必死に受け止める。

『アドベント』

同時にそれぞれ龍と蛇を呼び出し、それ同士も戦いを始めた。

「善子ちゃん!今のうちにダイヤさんのもとへ!」

「ええ!」

さすがにダイヤにも聞こえているだろう、と突っ込む余裕は善子にはなかった。

回復しきっていない身体と緊迫した戦場。

何とか足を引きずりながら、逃げようとする。

それを鞠莉が見逃すはずがなかった。

「逃がさないわ。」

『アドベント』

「二枚目の・・・アドベントカード!?!」

召喚されたモンスターに千歌は言葉を失った。

召喚されたのはエビルダイバー、梨子がライアに変身するために契約していたモンスターだった。

「なんで・・・梨子ちゃんのモンスターでしょ・・・。」

「元、ね。梨子は負けたのよ。」

鞠莉が笑みを浮かべながら告げる。

エビルダイバーは善子の前に立ちはだかった。

「デツキを・・・！」

善子は何とか変身しようとしてデツキを取り出した。

しかし、重傷を負った身体では満足に身体を動かすこともできず、

デツキも下に落としてしまった。

「善子ちゃん!!!」

千歌が叫ぶ。

助けに行こうにも、鞠莉がそれを許さない。

ドラグレッツダーも戦闘を続けている。

鞠莉が冷徹に指示を出した。

「やりなさい。」

エビルダイバーが尾を振りかざす。

もうだめだ、善子は諦めようとしていた。

リリー、花丸、ルビィ、みんな、ごめんなさい。

サバイブを受取りながら、生き延びることができなかつた。

いや、死ぬことはないのだから延々苦しみ続けるのか。

生まれた時から不運な自分の結末などそんなものだろう。

ごめんなさい、ありがとう。

そう呟いて、善子は目を閉じた。

『ソードベント』

「よっちゃん、いつまで立ったまま寝てるのよ。」

聞き覚えのある声がある。

今まで以上の痛みも感じない。

攻撃を、受けていない・・・？

善子がそつと目を開ける。

逸る気持ち先行する。

この声は、この声は、この声は。

瞼を開け、広がる世界のすぐそこに、一人の騎士がいた。

騎士はその剣で自分を襲おうとしていたモンスターを討伐した。

「ごめんなさい、エビルダイバー。長く一緒にいたのに。」

祈りをささげ、エビルダイバーは消滅した。

鞠莉と千歌もそれに気付く。

「どうして……。なんで変身しているのよ……。」

鞠莉が今までの余裕とは正反対の明らかな動揺を見せる。

千歌は仮面のなかで口元を緩めた。

「お帰り、待ってたよ。」

騎士の耳にそれは届いた。

「ただいま。待たせたわね。」

今そこにある現実を理解し始めた善子の目に涙が浮かぶ。

「ほんとに、ほんとに戻ってきたのよね……?」

「ええ、よっちゃん。サバイブを預かっていてくれてありがとう。」

仮面の下で騎士はやさしく微笑む。

善子は、喉は壊れるほどにその名を叫んだ。

「リリー!!!」

「だから、それ呼んでいいって言ったわけじゃ……。まあ、いいか。」

梨子は剣を下ろし、鞠莉に言った。

「言ったでしょう? 私は負けないって。この時をずっと待っていた。

あなたがナイトのデッキを破棄したその時から。」

「あなた、最初から……!」

「さあ、第二ゲームよ。まだ勝負はついていない。そんなにこのカードが欲しいのならこの私を、ナイトを倒しなさい。ま、負けないけどね。」

『サバイブ』

Daydream Warrior

音がする。

コンクリートが崩れる音、ガラスの割れる音。

金属同士が接触する音。

ルビイはそれをじつと聞いていた。

何かが起こっている、そんなことは容易く理解できた。

今いる場所から音のする方へはすぐたどり着く。

向かわなければ。

急いで加勢しなければ。

必死で脳に命令する。

けれど脳はこう返す。

何のために？

私は何のために戦うのだろう。

脳がエラーを起こす。

「わからないよ……。」

呟いたところで何も変わりはない。

花丸の想い、強く受け取っている。

ルビイも花丸の笑う顔が見たいと思っている。

花丸と善子と、三人で。

けれど、それとは別に姉妹の絆もまた知りたい。

もう自身がそれを知る術を持たないから。

私は何のために戦えばいいのだろう。

一瞬だけ見せた姉の寂しそうな顔を忘れない。

きつとあの人は私の何倍も辛く、苦しい思いをしている。

音はだんだん激しくなっていく。

デッキを渡すときの花丸の表情だって忘れられない。

ひどく、寂しげな顔。

誰のために、戦わなければいけない？

どうして、ルビイはライダーに選ばれたの？

肌に雨粒を感じ空を見上げる。

休むことなく飛び続けるモンスターが変わらず視界の半分を占拠する。

誰かの想いのその一片。

一歩、音のする方へ進む。

そうだ、その時に決めればいい。

戦って、勝って、答えを見つけよう。

オーデインに会おう。

雨脚が強くなっていく。

ルビイは千歌たちの元へ駆け出した。

サバイブ体へと姿を変えたナイトが王蛇を睨む。

鞠莉は千歌との戦闘を切り上げ、ナイトに近づく。

「そうね、まずはあなたから。今度こそゲームオーバーにしてあげるわ。」

『スイングベント』

かつて梨子が使用していたものと同じそれを左手に、剣を右に構える。

「言われなくても、本気ですよ。」

梨子はカードを引き、静かに召喚機へ読み込ませた。

『アドベント』

疾風の翼を身に纏う、ダークレイダーを召喚する。

「千歌ちゃん、善子ちゃんをお願い。あなただってあまり体力残ってないでしょう？」

言われて千歌は足がガタついていることを自覚した。

返事をし、善子の元へ。

残りの体力を絞り出し、善子を支えながらダイヤの元へと向かった。

「あら、前と同じ光景じゃない。まさか結末まで一緒じゃないわよね。」

「まさか。言いましたよね？負けないって。」

「生意気な……!!!」

降り始めた雨は次第に強くなっていった。

「はあ……はあ……。」

降り続く雨の中、たどり着いたルビイが見たのは二人の戦士だった。

一人は剣を突き付け、一人は剣を突き付けられ。

騎士のごとき戦士の声で、それが梨子だとルビイは初めて気付いた。

「じゃあ、あれはもしかして……。」

もう一方の人物を推測したとき、梨子は剣を上げた。

「終わりです、鞠莉さん。」

剣が下ろされる。

ルビイは鞠莉と呼ばれた戦士の終わりを予期した。

黒い影が現れるまでは。

それは即座に現れ、梨子の右腕をしっかりと掴んでいた。

剣は触れる寸前で止められた。

「そこまでやらなくて、いいんじゃないかな。」
「……！」

声でそれがだれか梨子は理解した。

掴まれた腕と剣を下におろす。

「本当にデジャブみたい。あの時は手を指し伸ばそうとして、今はと

どめを刺そうとしてたつて違いはあるけどね。」

「それだつて、本気じゃないでしょ?」

「・・・さすがね。つていうかあの時のことも見てたんだ。」

「そりゃあ、心配だったからね。」

鞠莉の変身が解ける。

憤りが自身を埋め尽くす。

「曜・・・。なんで止めたの!!!」

曜が変身を解く。

それに合わせて梨子もその変身を解いた。

「そもそも梨子ちゃんにその気がないから止めなくてもよかつたんだけど・・・。ほら、鞠莉さんと約束したじゃないですか。」

「約束・・・?」梨子が問う。

「そう、果南ちゃんと戦つてる千歌ちゃんを助けてもらう代わりに約束したの。オーデインについてね。」

「オーデインについて、知っていますか。」

ルビイも三人の前に姿を現し、問いかける。

「ルビイちゃん。あなたもまさか・・・。」

梨子がいかけたところで鞠莉が叫んだ。

「もういいのよ!!!果南に負け、ナイトに負け、もう私の願いは叶わない、届かないつてわかつたから!!!」

「鞠莉さんは、どうして戦っていたんですか。」曜が問う。

「果南を止めるため。そのためならなんだってしてきた。なんだつて・・・!!!」

曜はそれを聞いてルビイを見た。

何のために戦うのか、その答えを探していたルビイは、曜に気持ちを見透かされたような気がした。

鞠莉に視線を戻し、曜が言う。

「果南ちゃんも、ダイヤさんも、自分と同じだつて考えたこと、ありま
すか?」

どういう意味、と鞠莉が問い返そうとしたとき。

屋内から声がした。

「何をしているんですの。」

ダイヤが鞠莉を見ながら、縁側に立っていた。

ダイヤを呼びに離脱した千歌と善子、また、花丸もそこに来ていた。「つていうかなんですのこれは。人の家になにしてくれてるんです？」

落ちている木片を拾い上げ、千歌たちの方を見る。

「あー……えつと……。でも最初は鞠莉さんが……。」

「他でやるとかあったでしょう。どうしてこうも……はあ。まあいいですわ。」

「いいんだ……。」 曜がぼそりと声を漏らす。

「ダイヤ。さつき曜が言っていたことはどういうことなの。」

「……。私たちは同じことを考える、こればかりは仕方のないことですわ。」

言うことをためらう様子を見せているダイヤをみて、曜が話し始めた。

「梨子ちゃん。そのサバイブのカード、誰から受け取ったの？」

突然の曜の問いに戸惑いつつ、梨子は答えた。

「え……。？ダイヤさんからだけど。」

それに反応したのは千歌だった。

「そういえば、梨子ちゃんもサバイブ持ってたんだよね。」

「ええ、それがどうかしたの？」

曜の表情が真剣なものに変わっていく。

「千歌ちゃんも持つてるよね。サバイブ。」

梨子が目を見開く。

「どうして千歌ちゃんが……？」

「千歌ちゃん、そのデッキ、だれから受け取ったんだっけ。」

千歌はその人を横目で見つつ答える。

「ダイヤさんから……。」

曜が静かにうなづく。

「サバイブのカードは全部で三枚。疾風、烈火、そして無限。疾風と烈火のカードにはそれぞれ羽が描かれているんだ。」

二人はそれぞれカードを取り出した。

曜の言った通り、それぞれ左右別々の羽が描かれていることが確認できた。

「無限のカードにはゴルトフェニックスっていう不死鳥の絵が描かれていてね、その羽もその一部なんだ。」

鞠莉がその単語に反応した。

「待ってよ……。そのモンスターって……。」

曜が頷く。

「そう、オーデインの契約モンスターだよ。」

その場のすべての人間が結末に気付いた。

花丸には追い打ちだった。

ルビイには理解しがたかった。

善子には信じられなかった。

梨子はただ黙っていた。

千歌はデッキを握りしめた。

鞠莉は嘘だと叫んだ。

曜は再び変身した。

「あの時からずっとこの日を待っていました。鞠莉さん、これが答えです。オルタナティブのデッキを開発していたことは予想外だったけれど、隠し通すつもりであったなら別の力も必要ですもんね。」

黒髪の少女は問う。

「最初からわかっていたのですか。」

リュウガは答える。

「いいえ、でも、このデッキの秘密がわかればおのずと。」

黒髪の少女は問う。

「あなたの望みは。」

リュウガは答える。

「最初から、変わってませんよ。」

黒髪の少女は問う。

「私と戦ってどうするのです、リュウガ。」

リュウガは答える。

「あなたがしてきたことと同じです。ダイヤさん。いえ、仮面ライ
ダーオーデイン。」

友情ヨーソロー3

曜は振り返る。

皆、思った通りの反応をしていた。

ただ一人を除いては。

わからない。

これだけ考えて、計画して、行動して。

それなのに、このざわつきは何？

あなたは何故、そんな顔をしているの？

再びダイヤの方へ。

あと一歩、あと少しなんだ。

あなただけじゃない。

きつとみんなが救われる。

きつと――。

ずつと音が鳴っている。

うるさい、うるさい、うるさい。

それが、自分の心臓の音だとやっと気付いた。

空を飛び交う怪物たちの悲鳴がその脈打つ音でかき消される。

「ねえ、曜ちゃん？」

穏やかな口調。

千歌は曜の背中に語りかける。

「曜ちゃんは今から何をしようとしているの？」

曜は振り返らずそれに答える。

「オーデインを倒すんだよ。それでタイムベントを手に入れて、戦いが始まる前まで遡って。誰もつらい思いをすることなく、これでお終い。これだけだよ。」

「そっか。」

「千歌ちゃん・・・？」

千歌の変化に梨子が気付く。

真実に怯える鞠莉がその口を開いた。

「私が戦ってきたのは何だったの・・・。何もかもを犠牲にして、それ

でもあの楽しかった日々を取り戻すためにつて、こんなになつてまであがいてきたこの時間は何だったの!!!こんなことなら、知らない方がよかった!!!」

それでも曜は振り返らない。

「鞠莉さん、その長い苦ししみももう終わりますから。」

『ソードベント』

龍騎のそれより低い機械音がカード名を宣言する。

召喚された剣を握り、先をダイヤに向けた。

「あなたがこのデツキを私に与えた時話したこと、覚えていますか。」
ダイヤの表情は変わらない。

「あなたの名前は曜。日の光が輝く様を現す言葉。けれど光には必ず影がある。だからこそ、これはあなたに相応しい。と申しました。」

「今ならその意味が分かる気がします。確かに今の私は、影だ。」
剣を構え、曜は勢いよくダイヤの元へ詰め寄った。

ほんの一刺し。

それだけで人は倒れてしまう。

そう、だからこれが決まればすべて終わる。

変身されたら押し通せばいい。

そのために手に入れたこの力なのだから。

けれど、曜の一撃は阻まれた。

オーデインに変身したダイヤではなく。

また、オルタナティブでもなく。

「違うよね、曜ちゃん。」

リュウガを阻んだのは龍騎だった。

「千歌ちゃん、どうして?そりゃあダイヤさんを傷つけるのは私だつて・・・」

「違う。そうじゃない。」

「え・・・?」

「曜ちゃん、本当は曜ちゃんがオーデインになろうとしているんじゃないの?」

そこで梨子が気付いた。

「まさか曜ちゃん……。」

「うん。きつと曜ちゃんは救おうとしているんだよ。自分以外の人すべてを。自分を犠牲にして。」

曜が剣を下ろす。

「それが、私がこの戦いにかけて願いだから。厳密に言えば、千歌ちゃんの願いを叶えたい、なんだけどね。でも、一緒にしよう？」

その声は明るかった。

「違う。私が望むのはそうじゃないよ。」

千歌はリュウガの顔をじつと見た。

「確かに私はこの戦いを終わらせたい。けれどそれは、全員が元通りに戻るってことなんだよ。曜ちゃんだけ取り残された平和なんて、私は望まない。」

マスクの下で曜の顔がゆがむ。

「千歌ちゃんだけ違った。気付いてたんだね。」

『ストライクベント』

「でも、ごめんね。」

リュウガの腕に装着された龍頭を模したグローブ。

そこから黒い火が千歌に放たれる。

曜の中で何かが崩れていく。

こんな結末じゃなかった。

あの子の笑う顔が見たかっただけなのに。
そうだ。

これからやり直せばいい。

そのためにも、カードを。

『サバイブ』

黒い炎が次第に赤い炎に飲み込まれていく。

サバイブ体に変身した龍騎が炎の渦の中にいた。

「ならわたしは止めなければいけない。曜ちゃんの友達だから。」
すべてが崩れる。

自分が積み上げたものはこれじゃなかったと気付く。

同時に、新しいものが積みあがっていく。

これまでとは違う、それでいて高くて丈夫に。

どうしてこんな簡単なことに気付かなかったんだろう。こんな彼女だから、私はリュウガになったというのに。このデツキのせいだろうか。

いや、違う。私自身の弱さだ。自身の無さだ。

戦いながら成長していく彼女が、まぶしかったから。

どれだけ転んでも、最後には起き上がる彼女だったから。

曜は引こうとしていたカードをしまった。

「私、馬鹿だな。」

「でも、そんな曜ちゃんだから私は信頼できるんだよ。」

視界がぼやけるのはこの仮面のせいだろうか。

今回だけは、仮面があつてよかつた。

「やっぱ、千歌ちゃんには敵わないや！あはは！」

見守っていた梨子も安堵した。

曜の計画は想像もしなかつた。

・・・やり直す？

「え・・・？」

それに気付いた瞬間、心臓は鼓動を速めた。

あり得ないことだと、吐き気が襲う。

でも、例のカードさえあれば・・・。

「ダイヤがオーティン・・・。ダイヤが・・・。なら、私があなたを倒せば・・・!!!」

鞠莉の言葉に梨子が返す。

「まって鞠莉さん!!!」

「何よ!!もう私にはこれしか・・・!!!」

「それでも!!!あなたこそ真実を知らなければいけない!!!」

梨子はダイヤに訴える。

「ダイヤさん!!話してください!すべてを!今まで鞠莉さんや果南さん、ルビイちゃんに隠していたこともすべて!」

今まで黙って聞いていた善子が梨子の隣に並ぶ。

「そうね。私からもそう願うわ。こうなった以上、もう隠す必要なんてないでしょう?」

ダイヤは空を見上げた。

頬を伝う涙に気付いたのは千歌だった。

「ダイヤさん……?泣いてるんですか……?」

「あの時から、泣かないと決めていたのです。なのに……まだ終わっていないのに……やっところまで来た……。」

「ダイヤ……?」

思い返してみれば、鞠莉はダイヤの泣く姿をほとんど見てこなかった。

泣いている姿と言えば、幼少の頃の……そう、まだルビイと同じで臆病さが抜けていないあの時以来だ。

それはルビイも同じだった。

妹の前で絶対に涙など流さない姉の頬を伝うそれは、どこか不思議だった。

ダイヤは涙をぬぐうと、そこにいる全員の顔を見た。

「まずはあなたたちに敬意を、感謝を、そして謝罪を。」

深々と頭を下げる。

顔を上げると、言葉をつづけた。

「皆さんには多く辛い思いをさせました。けれどおかげで私はあなたたちにすべてをお話する機会を得ました。」

視線は鞠莉の方へ。

「今からお話することは、鞠莉さんには特に辛いことかもしれない。」

鞠莉は笑みを浮かべた。

「ノープロブレム。もう辛いことは散々体験してきたわ。プライドだって捨てているんだもの。内容によっては、あなたを攻撃しかねないけどね。」

「構いません。鞠莉さんだけでなく、皆さんも。すべてを知った後でどう動くかはあなたたちの自由です。」

反応のない花丸をルビイは気にしていた。

「花丸ちゃん、大丈夫？」

「・・・うん。大丈夫。ありがとう。」

そう、大丈夫。

だって、私があなたたちを守るから。

「少し長い話になりますので中へ。お茶が入り次第始めましょう。2年前のお話を。」

未熟DREAMER（いつもそばにいても）

「スクールアイドル？」

「そうですね！学校を廃校の危機から救うにはそれしかありませんの
！」

「鞠莉スタイル良いし、一緒にやったら絶対注目浴びるって！」

高校一年の時、浦の星には統廃合の噂が流れていた。

それもそうだ。

静岡は沼津の海沿いにある小さな町。

その片隅にある小さな女子高が浦の星女学院。

生徒の数は頭の中で整理がつかくほどのだから、むしろ今までこう
やって続いてきた事の方が不思議なくらいで。

それでも。

生まれ育ったこの場所と、同じ時間を過ごしたみんなが大好きだっ
たから。

どうにかして統廃合を阻止できないかって考えた。

μ'sのようなストーリー。

ただの少女たちが起こした奇跡。

私は早速果南さんに相談した。

果南さんは快く引き受けてくれた。

そして言った。

「鞠莉も誘おう。ずっと一緒だったでしょ。」

最初は断っていた鞠莉さんも、最後は引き受けてくれて。

私たちは三人でスクールアイドルを始めることになった。

学校に申請して割り当てられた体育館横の小さな部室。

それが私たちの秘密基地だった。

毎日ダンスの練習と歌のレッスンをした。

全国のスクールアイドルの動画を見て研究会もした。

ホワイトボードに歌詞を書いて、恥ずかしくなって何度も消して。

初めて作った衣装は袖を通すことを忘れていた。

たくさん笑った。

とても充実した日々だった。

不安に思うこともあった。

果南さんが私に話してくれたことがある。

職員室で話している先生と鞠莉さんとの会話。

「本当にいいの？」

「は、スクールアイドル始めたんですー！」

私たちが誘わなければ、鞠莉さんにはもつと他の道に進めたのではないだろうか。

未熟だった私たちは、考えれば考えるほどわからなくなった。

活動を重ねるうちに、一つの知らせが入った。

東京で行われるスクールアイドルイベントへの招待。

その招待を受けたとき、私はどれだけ浮かれていただろうか。

私だけではなかった。

三人みんな飛び跳ねて喜んだ。

少しでも良いパフォーマンスをしようとして練習を増やした。

増やしすぎてバテもした。

その時も、私たち馬鹿だってみんなで笑った。

「大丈夫ですよ．．．？」

「全然．．．!!」

当日、鞠莉さんはけがをしていた。

足首の捻挫。

巻かれた包帯の下が腫れ上がっていることを私たちは知っていた。

それでも鞠莉さんは強がって、平気なふりをした。

そして、私たちの出番が回ってきた。

私たちは歌えなかった。

正確には、果南さんが歌えなかった。

そこに集まったスクールアイドルに圧倒されて。

会場の空気に負けて。

初めての東京は、そうして終わった。

数日後、果南さんは私に話があると云った。

「スクールアイドル、やめようと思う。」

その時私は最初に何と返しただろう。

けれど、続く果南さんの言葉に私は言葉が詰まった。

「私たちは進むべき道を間違えたんだよ。」

それが何を意味するか、私はすぐに分かった。

東京の日、果南さんは歌えなかったのではない。

わざと歌わなかった。

あのまま続けていればけがが悪化していたのは確かだろう。

事故につながる恐れすらあった。

けれど、それだけではなかった。

無理してまでステージに立とうとする鞠莉さんをみて果南さんは思った。

このままだと、もっと無理をさせてしまうのではないか。

未来の様々な可能性を奪ってしまうのではないか。

私は、それに同意した。

「どうして？東京で歌えなかったぐらいで。」

鞠莉さんにすべては話さなかった。

嫌になった、ただそれだけ。

鞠莉さんは納得いかない様子だった。

きつと私が同じ立場でも、同じ反応をしていたと思う。

鞠莉さんは私たちに衣装を突き出した。

それを私たちは手に取りはせず。

ホワイトボードに書かれた歌詞は完成しないまま。

私たちの活動は終わりを迎えた。

鞠莉さんは先方の話を受け海外へ短期の留学をすることになった。

果南さんも、実家の手伝いのために休学届を提出した。

私は、今までと変わらず浦の星での毎日を過ごした。

あれだけ好きだったスクールアイドルが、その時は言葉さえも耳に入れたくなかった。

時々、部室に入った。

ホワイトボードをなぞり、当時の記憶を呼び起こす。無力さとむなしさを再認識するだけなのに。

いつからか私は思うようになった。

「せめてあの二人の先に、輝かしい未来を。」

異変に気付いたのは、そのすぐ後だった。

誰かに見られている、そんな気がした。

部室を見回せど、誰かいる様子はない。

気のせいだと自分に言い聞かせた。

きつと疲れているんだ。

今日はもう帰ろう。

そう決めてスクールバッグを肩にかけた。

その時だった。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イン

耳を塞ぎたくなるほどの不快音。

知りうる限りのすべてのものが出せるはずのない甲高い音だった。

「何ですの!?!」

私はもう一度見回した。

視線が入り口のガラスに移動したとき、瞳は確かにそれをとらえた。

ガラスの鏡面の中に人がいた。

正確には、鎧を着た人間。

音も、その方向から鳴っていた。ただじつと、こちらを見ていた。

私を見ているというよりは、私の心を見ているかのように。

私はその場で動けなくなった。

やがて状況が呑み込めないながらもなにか言わなければいけないと脳が判断した。

口から出た言葉は「誰？」

人間、未知の体験をすると間抜けなことを言うのだと、今振り返ればわかる。

けれど、その時の私の脳はそれが精いっぱいだったのだろう。

鎧の人物は私を指さして言葉を発した。

男か女か、どちらにも分類されないような声をしていた。

「戦え。そうすればお前の願いは叶う。」

戦え？何と？

許容量をとつくに超えていた私の思考はさらにあふれた。

そんなことお構いなしに、鎧の人物はこちらに向かつて何かを差し出した。

鏡面から現実世界へ差し出されたそれを私は受け取った。

体が動いたことで思考が巡るようになり、私は問いを投げかけた。

「あなたは何ですか。」

「オーデイン。そう呼ばれている。」

呼ばれている？

誰か他にいるのだろうか。

私は続けて質問をした。

「戦うってどういうことですか。」

「それを使って仮面ライダーとなり、他のライダーを倒せ。最後の一人になればお前の願いが叶う。」

それを最後に、鎧の人物は消えてしまった。

あの音もいつの間にか消えていた。

手元には、渡された何かが残っていた。

「ベルトのバックル・・・？」

簡単に調べてみると、中にカードが入っていることが分かった。けれどそれが何かわからず、太陽にかざしたり振ってみたりする。何も変化は起きなかった。

戦い、願い、仮面ライダー……。

何もかもが分からないことだらけで、私は座り込んだ。

世界は私に恨みでもあるのだろうか。

そんな馬鹿なことを考えるぐらいには頭は回復していた。

結局あれは誰だったのだろうか。

オーデインと名乗った鎧の人物。

鏡の中に消えたことを思い出し、手の中のそれをガラスにかざした。

「え……？」

気づけば、私の腰に機械チックなベルトが巻かれていた。

やはり疲れているのだろうか。

このベルトが、ガラスの中から出てきたような気がした。

「ええ……。」

触って確認して、それが現実であることを知る。

疲れていて全部幻想でした。

そんなオチを期待した未来はもうなかった。

それが現実だと諦めたところで、ベルトのある部分に気付く。

先にバツクルみたいだと言ったそれがはまるようになっていた。

まさかと思い、差し込んでみる。

それはきれいにはまった。

同時に、身体が何かで覆われた。

視界、感触、すべてが一瞬にして変わった。

ガラスを見れば、そこに映るはずの自分はいなくて。

代わりに、先とは違う鎧の人物が立っていた。

確かに分かることが一つ。

「これ……私ですわ。」

これが、私の初めての変身。

後にこの姿が仮面ライダーガイと呼ばれる姿だと知る。

未熟DREAMER（言葉だけじゃ足りない）

手を開いて閉じる。

足首を軽く回してみる。

前を見て、天井を見て。

鎧で覆われた自分の掌を見て、そしてたどり着く答えはやはりこれが自分だということ。

「何がどうなっていますの・・・？」

とにかく状況の整理をと先までのことを思い返してみる。

「そうですね、確か窓から・・・。」

すべて入り口のガラスから事は起こった。

鎧姿の自分が映るガラスにそつと手を触れた。

「つっ・・・!？」

突如、身体が光に包まれた。

何かに飲み込まれるような感覚。

やがてその感覚は消え、視界を取り戻すとそこには私たちの部室があった。

けれどそれは・・・。

「逆ですわ・・・。」

すべてが逆だった。

部屋の配置も、外の景色もすべて。

信じがたいことではある。

けれど私は認めるしかなかった。

鏡の中の世界に来てしまった、と。

私は詮索をしながら、音の聞こえる方へと向かった。

あまりにも静かなこの場所で、その音はひどく目立っていた。

音が近くなる。

この音の正体は何か。

それは、すぐに分かった。

「はあああああああああああああああああ!!!」

「そうね、知らないまま終わるのもかわいそうだし教えてあげる。これはライダーバトル。願いをかけた戦いよ。」

『ライダーバトル……。』

気付けば、相手の後ろに大きな白鳥が羽ばたいていた。

「ライダー同士が最後の一人になるまで戦うの。そうして生き残った一人が、自分の持つ願いを叶えられる。」

それは、鏡の中にいた、オーデインと名乗った人物が言っていたことと同じだった。

「そんな話あるわけが……!」

「私もそう思ってた。でも見たでしょう?これは本気。大体、こんな世界にいるんだからもう何も不思議なことなんてないのよ。」

相手はもう一枚ベルトからカードを取り出した。

「じゃ、そういうわけだから。さよなら。」

『ファイナルベント』

機械が音声を発した。

このままでは死ぬ。

全身がそう叫ぶ。

逃げたい、でも逃げられない。

何かしなければここで終わる。

何もわからないまま終わってしまう。

果南さんや鞠莉さんを残したまま終わるなんて。

日常に癌を残したまま終わるなんて。

そんなの良いわけがない。

脳裏にオーデインの言葉が過った。

「戦え。」

私はバックルからカードを取り出した。

左肩に取り付けられている機械にそれを投げ入れる。

『コンファインベント』

「何……?カードの効果が……!」

相手が何をしているのか気にもしないまま、私はもう一枚のカードを取り出した。

『ファイナルベント』

私はただ叫んだ。

耳には今でも相手の悲鳴が残って離れない。

バックルを抜き取ると、変身を解除することができた。
仮面越しでなく、直にあたりを見渡す。

黒く変色した小さな池が二つ目の前に広がっていた。

私は、この人を……。

またこみ上げてきそうになる。

いつそ我慢しない方が楽になれるかもしれない。

そう思ったとき。

「……えっ？」

二つの遺体が消えようとしていた。

さらさらと、その世界に変えるかのように。

気付けば、そのすべてはなくなってしまうた。

元の世界へは入ってきたガラス面から戻ることができた。

私は、あの人が言っていたことを思い出す。

「最後の一人になるまで……か。」

命を奪った。

この手か、それともこの力か。

どちらでも構わない。

もう元には戻れない。

ならばせめて、これが何であるかは知らなければいけない。

きっとこれは罰だ。

楽しかった時間はもうとっくに終わった。

その時ため込んだ、私へのツケ。

鞠莉さんを悲しませて、果南さんを悩ませた。

逃げることなんて許されない。

ならば戦い抜こう。

戦いにかかる願いは「二人の救済」。

鏡面から音が聞こえれば戦いの合図だった。

何度も瀕死の重傷を負った。

それでもある程度はこの力のおかげですぐに回復した。

逆に、とどめを刺すのに必要なのは致死量のダメージだった。

日に日に増えていく傷を隠しとおすことはできず、ルビイにひどく心配された。

精神はすり減り、でも私はこう答えた。

「大丈夫だから。」

だってこれは罰なのだから。

私のデツキは初戦が肝心だった。

逃げられてしまえば、コンファインベントを警戒されてしまう。

だから私は、すべての戦いを初戦で終わらせた。

そして、私は最後の一人となった。

私の目の前に現れたのはオーデインだった。

私はそこで察した。

オーデインを倒せば、願いを叶える権利が手に入る。

『ストライクベント』

武器を召喚して、いつもと同じように攻撃の体制に入る。

けれど、私は聞こえてきたその声にすべてを奪われた。

「ダイヤ……。なんでダイヤがいるのさ。」

オーデインのそばに現れたのは長いポニーテールが特長の少女。幼い時から聞いてきたその声を、その姿を間違えるはずがない。

この少女のために、私は戦ってきたのだから。

「果南さん……。？」

未熟DREAMER（わかって欲しいと）

「果南さん、どうしてここに？」

答えはわかっていた。

ここはデツキを持つものしか入ることの許されない鏡の世界。私がこれまでに倒してきた人たちと同じ。

つまりは果南さんも――。

けれど、答えは少し違っていた。

それも、悪い方に。

「なんで、どうして。」

果南さんは私の問いかけなど聞こえておらず、自分の世界で何かにおびえていた。

「果南さん!!」

私は強く名を呼んだ。

それに反応したのか、それとも何か答えが出たのか。

焦点の定まっていなかった瞳はいつの間にか私を捉えていた。

「そっか、ここはダイヤが変身する世界だったんだ。」

『『ここは』？』という意味ですか？』

一生の内に、自分が住んでいる世界とは違う場所へ訪れることはま
ずない。

旅行や映画鑑賞などの比喩的な表現であればそれは可能ではある
が、言葉通りのこととなると現実では再現しがたい。

けれど、私が今いるここがそれにあたる。

果南さんの言う『『ここ』』はもしかしたら鏡の世界のことを言ってい
るのかもしれない。

それでも私の耳にそれは違うように聞こえた。

もつと漠然とした、全体を指摘しているような――。

「鞠莉やダイヤのためについてここまで来たけれど、そっか。ついに巻
き込んだじゃったかー。」

相変わらず瞳は私に向いていたが、もつとどこか別の場所を見ている、そんな気がしてきた。

そう、『ここ』ではないどこかを。

「あなた、さつきから何を言っているのですか？」

「わからなくていいよ、わかろうとしなくてもいい。」

「じゃあ、せめて質問には答えてください。あなたも仮面ライダーなのですか。」

「・・・違うよ。私は変身しない。ここにいるオーデインが真正銘最後のライダー。これを倒せばダイヤは願いを叶えることができる。」

ライダーではない？

ならばどうしてここにいることができるのだろう。

考えれば考えるほどわからなくなってきた。

「ならばあなたはどうしてここに？」

考えるよりぶつけるが早い。

「それは、戦いが終わってから教えてあげるよ。」

「あなたは戦わないの？」

「・・・そうだね、それは考えておく。」

ここまでの問答で確信した。

今ここにいるのはつい先日まで笑いあっていた友人とはまるで違う。

何かに取り憑かれているような、追われているような。

私を知りうる限りの松浦果南ではなかった。

「ダイヤ。私からも良い？」

「どうぞ。」

「あなたはここまで幾度となく戦い、数多の犠牲の上を進んできた。すべては願いのために。」

「あまり聞きたい言葉ではありませんわね。」

「そこまでしてあなたは何を願うの。あなたが戦いにかける願いは何。」

その瞬間だけは、確かに私のことを見ていた。

「私の親友二人の救済ですわ。」

口が少し赤く滲むのが分かった。

それをふき取ることもせず、

「やっぱり、私たちは似ているんだね。」
と言った。

その時の寂し気な顔を私は忘れない。

「始めようか、オーデイン。」

果南さんの言葉を合図に、オーデインは私に接近した。

戦闘開始から数分の間に、私は起き上がれなくなっていた。
構えればいつの間にか背後にいて奇襲を仕掛けられる。

わかっているうえでやられるのでそれは奇襲ではないのだが、それが一番適切だと感じた。

デツキからカードを選ぶ余裕もなかった。

今まで戦ってきたライダーとは明らかに違う力をオーデインは持っていた。

必死で起き上がろうとする私の目の前にオーデインは現れた。

「オー・・・デイン・・・!!!」

声さえもろくに出すことができない。

きつと内臓器官がやられているのだろう。

すでに右脚と左腕の感覚は消え、口からは声よりも先に赤い液体が流れた。

立ち上がったところで、きつと勝てることはないだろう。

結局、私は何もできなかった。

「ダイヤ、聞こえる?」

果南さんの声が聞こえた。

せめて顔だけでも起こそうとするが左の眼は流れる液体でつぶれてしまっていた。

意識したとたん、口の中が鉄の味で満ちて気持ち悪くなってくる。

この状況でそのようなことを考え始めるのだからまだ余裕があるのではないのかと思ったが、相も変わらず身体は起きない。

「聞こえてはいるようだね。」

また、果南さんの声が聞こえた。

「きつと最後になるだろうから、さつき言ってたこと、話すね。」

私はせめて聞き逃さないようにと全意識を聴覚に集めた。

「この戦いを作ったのはね、私なんだ。」

戦いを、作った？

「あの時からずっと私は思ってたの。ダイヤと鞠莉の幸せを。でも、またダメだった。何度繰り返してもうまくいかないの。それどころかあなたまで巻き込んだりして。これじゃ何のために戦ってるのかわかんないよね。ごめんねダイヤ。でも、もうこんなことはないから。さよなら。」

言葉の意味を理解しようとするも思考を巡らせれば激しい痛みに襲われる。

残る右目に映ったのは、時計の描かれたカードだった。

悪い予感がした。

この状況の中でもなお感じる最悪の予感。

私は痛みで飛びそうな意識を必死で防ぎながら、右手をバックルに忍ばせた。

思えば、この時にはもう痛みを感じていなかったのかもしれない。いつ目を閉じてもおかしくない中、一枚のカードを探し当てた。

あとはこれが間に合えば……。

そこで私の意識は途切れた。

気付くと私は教室に立っていた。

通いなれた自分の教室。

代り映えのないクラスメイト達。

そして――。

「だから、なんでもって言ってるでしょうっ？」

目の前に、鞠莉さんがいた。

鞠莉さんはそのまぶしい笑顔を私に惜しげもなく向けていた。恥ずかしい気もするが、心地がいい。

この太陽が白旗を挙げてしまうような笑顔が私は大好きで。

「……！違う！果南さんは!？」

違う、違う、違う。

私は今までオーティンと戦っていた。

果南さんが私に言ったことだって思い出した。

けれど、鞠莉さんの返答は意外なものだった。

「何言っているの？さつきドリンクを買ってくるって出て行ったばかりじゃない。」

ドリンク？さつき？

慌てて身体を確かめる。

いや、その必要もなかった。

立っている、ということがあり得なかった。

記憶では確かに、つい先まで私は動けなかったはずだ。

それが今は当たり前のように立ち、当たり前のように会話をしている。

少しだけ、当たり前前のありがたさを実感した。

そんなこと考える余裕ができたところで、簡単に整理をした。

まずは身体。五体満足でここにいる。

次に環境。あれだけのいざこざがあったはずなのに、鞠莉さんが目の前にいた。

それに、どうやら果南さんもいるらしい。

そしてもう一つ、気になることがあった。

「鞠莉さん、今日は何月の何日でしたか。」

「さつきからどうしたの？ほら、これでわかるでしょう？もうほんとにダイヤはおばさんなんだから〜！」

鞠莉さんから差し出されたスマホの画面を見る。

デジタル時計はお昼休み真っただ中を知らせている。

その上に小さく表示された、今日この時の日付。

それは、私たちがスクールアイドルを辞めることになった、その1

週間前だった。

わざわざ鞠莉さんが狂った日付を常に見ているとは考えにくい。もしそうだとしたら友人として治してあげるべきだろう。

とにかく、これで私の違和感が間違っていないことが証明できた。

私は、この会話を知っていた。

日付を聞いたたりするもつと前。

したいことを言ってみてといきなり鞠莉に言われたあの会話。

私がちよつと考える時間が欲しいと真面目に考えようとして、果南

さんは飲み物を買に行ったこのシチュエーション。

・・・関係ないけれどこれだけは言わねば。

「おばさんじゃありません!!!」

と否定したところで。

覚えている。私が出した答えを。

結局思いつかなくて、ならばいつそと叶いそうもないことを言った。

「それと鞠莉さん、さっきの話ですが。なんでもつて・・・オーケストラで踊るダンスパーティーとか？ ふふ、まさかね。」

こう言うと、次はきつと。

「あーそういえば船の上でパーティーってやってみたかったんだ!」

果南さんはいつの間にか飲み物をもって横にいた。

これで確信した。

ここは、私が一度通過した過去だ。

未熟DREAMER（夢の海を）

三日が経過した。

ただ時間だけを流すはずもなく。

私は、私に起こったことを一つ一つ確認していた。

まず、私は過去にきている。

仮面ライダーの力を手にするよりも前、まだスクールアイドルだった頃。

次に身体。

オーデインとの戦いで無数についた傷はすっかり消えていた。

身体の時間も巻き戻っているらしい。

ライダーバトルが始まっていから整えられず不揃いだった前髪がきれいに整っていることから、それを確信した。

変わったこともあった。

仮面ライダーのデッキは変わらず存在していた。

けれど、そこに描かれていたガイのエンブレムが消えてなくなっていた。

アドベントのカードも消え、代わりにコントラクトと書かれたカードが備わっていた。

と、一通り整理を試してみたが正直それどころではなかった。

理由ははつきりとわかっている。

あと三日。

72時間後、再び私はあの時間の中を進むことになる。

三人の関係が壊れた日。

私はそれが怖かった。

時は恐ろしいほど無情に流れていった。

72時間なんてあつという間で。

けれど未来を変えるには残酷なほど足りなくて。

目の前の鞠莉さんの表情やセリフは一度目と変わらず。

私は二度目の終わりを迎えた。

微かな違和感を抱きながら。

何か足りなかった。

同じことをもう一度繰り返しているはずなのに。

決定的な何かが――。

それが何か掴むことはできず、その日は帰宅した。

翌日。

学生らしく決められた時間に決められた道を通って学校へと歩みを進める。

他の人たちに比べて真面目であることは自覚している。

それだから今こうして苦しんでいるということもまた、わかっていた。

もしかしたら、それを再度自覚させるためにカミサマか誰かがこうしたのでろうか。

試練を乗り越えれば朝が来て、すべてが夢だったという物語のようなオチが待っているのかもしれない。

「なわけないか。」

そう呟いて、通りかかったコンビニに目をやった。

動けなかった。

視線がコンビニに固定されてしまったから。

正確には、コンビニのガラス。

映っているのはカミサマに願う私の姿ではなかった。

重そうな鎧を身にまとい、けれど軽々と動き回る二人の人物。

カードを使って武器を呼び出してお互いを傷つけあう光景。

「仮面、ライダー。」

呟いた声はあまりにも小さく、自分の耳にも届いたか曖昧だった。

私は変身してミラーワールドへと入った。

エンブレムのないデッキリでも変身はできた。

鎧の色が抜けており、武器のパワーもはるかに落ちている。

私は気づかれないように戦いの近くまで向かった。

勝敗はすぐに決まった。

問題は勝敗ではなく、戦っていたライダーだった。

勝者がその場を離れたところで、私は倒れた者の近くへ向かう。

敗北し、二度と起き上がることもないその鎧はガイのものだった。自分の亡骸が目の前にあるようで気味が悪い。

上がってくるものを喉の奥で抑えつつ、それを観察する。

どこを見ても、今自分が纏っている鎧と変わらない。

もしやと思い、デツキを探る。

「あった。」

それはすぐに見つかった。

アドベントと一緒に消えてしまったもう一つのカード。

『コンファインベント』だった。

このカードがあれば、また何かが起こるかもしれない。

祈りをささげて私はその場を後にした。

それからひと月が経ち。

私の参加していないライダーバトルが終わろうとしていた。

オーデインと戦う権利を得たのは仮面ライダータイガ。

戦いにかける願いは「英雄になること」。

最後の一騎が倒れたところで、タイガの前にオーデインは現れた。

「お前を倒せば私は……！私は……!!!」

オーデインに向かって叫ぶタイガに、誰かが問いかけた。

「英雄になつてさ、どうするの?」

その声、その姿。

もう考えなくてもわかる。

今更これが嘘だなんて思わない。

今ならわかる。

二度目の終わりの時に感じた違和感の正体。

私はこの世界この時間において、この人から鞠莉さんに関しての相談を受けなかったんだ。

あと少しというところであつた真実がもう少しで見えそうながする。

トレードマークのポニーテールが小さく揺れる。

かつて私が戦ったときと同じように、松浦果南はオーデインの横に姿を見せた。

「そんなの決まってる。英雄になればみんなが私のことを認めてくれる！」

果南さんはそれを聞いて笑みを浮かべた。

「へえ。でもさ、英雄ってなろうとしてなるものじゃないんじゃない？」

「どういう意味よ。」

「さあ？どんな意味でもないけれど、あなたには何か引つかかるんだね。」

「うるさい！！！！」

声が割れるほどのタイガの叫び。

すぐにでも襲い掛かりそうなタイガに、今度は冷たい目を向けた。

その目はどこか別の場所を、そう、あの時と同じ場所を見ているように――。

「私も目指してるんだ。ヒーロー。しかもたった二人にとってのね。でも、今回もダメだった。」

果南さんはタイガを指さし、オーデインに命令した。

「始めようか、オーデイン。」

オーデインとタイガの戦闘が始まった。

やっとわかった。

けれどこれはまだ予想でしかない。

それを今から確かめよう。

戦いは終わった。

決められていたかのようにオーデインは勝利した。

赤く染まったアスファルトに倒れるタイガを見下ろし、果南さんはオーデインに命令した。

「オーデイン、タイムベントを。」

その言葉に合わせて私はカードを使った。

この時間のガイが持っていたカードを。

これですべてがわかる。

もし私の予想が正しかったら。

考えているうちに、意識が沈んでいった。

目を覚ます。

視界に広がるのは見慣れた教室。

変わらないクラスメイト達。

声が聞こえる。

「だから、なんでもって言ってるでしょう?」

鞠莉さんだ。

やっぱりこの笑顔にはいつも励まされる。

元気をもらったところで、返事をしなければならぬ。

返事は決まっていた。いや、決められていた。

「なんでもって……オーケストラで踊るダンスパーティーとか? ふふ、まさかね。」

いつも間にか果南さんが横にいた。

自販機で買ったであろう飲み物を持ちながら

「あー·そういえば船の上でダンスパーティーってやってみたかったんだ!」

と言った。

過去に戻っている。

これで証明は完了した。

「あー、わかつちやいましたわ。」
声には出さない。

二人の前では笑顔で振るまう。

だって、目の前の果南さんがそうしているのだから。

ほんとうにうまく笑えているのか不安になる。

果南さんが何度も時を巻き戻していることに気付いてしまったから。

いや、それよりも重要なのはその理由。

私たちのために、何度も時を巻き戻しているということ。

私たち三人がばらばらにならないような時を探しているんだ。

もしかしたら、スクールアイドルをやらない世界を探しているのか

もしれない。

きつとスクールアイドルさえなければ私たちはばらばらにならなかったと思ってるんだ。

「お馬鹿さんですわね、本当に。」

私のやるべきことは決まった。

果南さんの罪滅ぼしがそれなら。

私の罪はきつとこうでもしなければ消えないだろう。

ずっと消えないかもしれない。

それでも私は一度、二人の救済を願った。

もう、逃れられない。

果南さんを止めよう。

その荷は私が代わりに担ごう。

私が、オーデインになることで。

未熟DREAMER（嵐が来たら）

自分がオーデインとなり果南さんを救う。

その決意から一晩が経った。

覚悟を決めてからずつと、それに至るまでの方法を考えていた。

「とは言ったものの・・・」

正直、何をすればいいのか見当もつかなかった。

この時間のライダー一人からデツキを奪おうかと考えた。

けれど奪うにはそれなりの力が必要なのは確かで、少なくとも大き
く力を失った元ガイのデツキでは明らかに力不足だった。

では、力以外に差し出せるものがあればどうだろう。

この世界の果南さん以外のだれもが知らないこと、タイムベントに
ついての情報はどうだろう。

果たして信じてもらえるだろうか。

いや、それより信じてもらえたとして、それが本当に相手にとって
有益な情報であるだろうか。

それも、デツキを譲渡するほどの。

とてもそうは思えない。

仮にタイムベントのことを知ったとして、それがどうということでも
もない。

この時間の人たちは、この時間にしか存在しないのだから。

決定的な案が浮かばないまま時間だけが過ぎていく。

思考は余計なことを次々と連れてくる。

例えば、オーデインのこと。

オーデインに変身している人はいったい誰なのだろうか。

それさえ判れば少しは突破口が見つかるかもしれないと考えたが、
仮面を着けた人物の名前を当てるなんて芸当を私は持っていなかった。
た。

いったいそんな芸を身に着けている人がこの世界に何人いようか。

「意外と多いかもしれませぬわね」

と独り言を呟いたところで判るなんてことはないと自分でも理解

していた。

解決策はひとかけらも見つからず、私たちはまた終わりを迎えた。鏡の世界でライダーバトルが始まる。

赤いライダー、青いライダー、緑のライダー。

それぞれがそれぞれの願いをかけて戦っている。

他人の願いを蹴落としてまで叶える願いのその先に待っているものは何だろうか。

私はなるべくそれを考えないようにしていた。

残るライダーが半分になった。

ここで、私は大切なことに気付いた。

もしこの時間のガイが最後まで残ったら、私はコンファインメントを使用できない。

私の身体はタイムベント影響を受け、二度と果南さんを追うことはできなくなるだろう。

最後まで残らないにしても、残りが少なくなった状況でカードを狙うことは極めて困難だった。

こんな大切なことをどうして早く気付かなかったのか。

焦りは人をどうしよもなくさせると自覚したうえで、自分自身を嘆いた。

『ねえ。』

焦りは幻聴さえも生む。

一度ちやんと寝た方がいい考えが浮かぶかもしれない。

『ねえってば。』

ほらまた聞こえた。

こんな調子ではオーデインどころではない。

『いい加減気づいてよー！』

「・・・嘘。」

幻聴ではなかった。

頭がいかれたわけでもなく、睡眠が足りないわけでもなく。

——睡眠は足りないか。

ともかく、それは確かに私の鼓膜を揺らしていた。

自分が正しければ、声の発信源は鏡の中。
私は恐る恐る後ろにある鏡に視線を移した。

『やっと思いづいてくれた。』

鏡の中の人物はそう言った。

私はそれが信じられなかった。

幻聴じゃなかったことではない。

自分の身体が思ったよりタフだったということでもない。

鏡の中にいる人物が私には信じられなかった。

「オーデイン」

名前を呼ぶ。

仮面でその表情は見えないが、なぜか笑った気がした。

『正解。黒澤ダイヤさん。』

私は力を失ったデツキを構えた。

するとオーデインはそれを見て

『ああ、変身はしなくていい。あなたを殺すつもりもない。味方でもなければ敵でもない。』

と言った。

「どういうこと?」

私は思ったことを正直にぶつけた。

『言葉通りの意味だよ。ただ、もしかしたらあなたにとって都合の良い人物にはなるかもしれないね。』

オーデインは私の返しを待たず、話し続けた。

『黒澤ダイヤさん、あなたはこの時間の人間じゃないね?』

心臓の鼓動が急に早くなるのを感じた。

1か月分は動いているのではないかと疑うぐらい早く打っている。

オーデインは気づいていた。

私がタイムベントを潜り抜けていたことに。

でもどうして?」

考えがまとまりきらなまま、私はその場の最適解だと思われる返答をした。

「確かに。私は二つ前の時間の黒澤ダイヤ。それで間違いありません

わ。」

『ああ、もう気付いているんだ。あの人が何をしようとしているのか。』

「予想でしかありませんが。」

『じゃあ、次の質問。あなたはどうしたい？』

この答えは決まっていた。

「初めてライダーになった時から変わっていません。二人の救済です。」

『次。そのためにあなたが今願うことは。』

これも決まっていた。

「私がオーデインになること。」

それまでずっと言葉を連ねていたオーデインが黙った。

緊張でにじむ汗を感じながら、返答を待つ。

『そっか。オーデインになる、か。ねえ、オーデインに選ばれる人物ってどういう人だか知ってる？』

「それがわからないから今まで何もできなかったのです。」

『そりゃあそうか。あのね、オーデインに変身する人は特別な人じゃないんだ。』

「特別じゃない人・・・？」

『ライダーバトルは願いの戦い。誰かを想いがために生まれた戦い。誰かに認められたい。誰かに振り向いてほしい。憧れの人と付き合いたい。あの人の未来を取り戻したい。とかね。』

私は黙って聞いていた。

『で、特にその想いが強かった人たちが仮面ライダーに選ばれる。そして殺しあう。殺しあうまではあの人も望んでいなかったんだけどね。』

今までの赤い記憶が駆け巡った。

『私があなたに気付いたのは、そのルールがあつたから。本来であればあなたは仮面ライダーに選ばれる素質を持っていたのに、デツキが渡らなかつた。すでに一つ持っていたからなんだね。』

手の中のデツキは身体と反対に冷たくひんやりとしていた。

『オーディンに選ばれるのはその逆。特別大きな想いを持っていない人たち。その中から無作為に選ばれるんだ。それが私。』

「なるほど、あなたが話しかけてこなければわからないことでしたわね。」

『オーディンになるということは、特別に持つ想いを失うってこと。それでもあなたはなりたい?』

その質問は酷く重かった。

二人のために二人を想うことを捨てる。

矛盾しているとはわかっていた。

でも、私の答えは決まっていた。

「ええ。二人を救えるのであれば。」

『きつとあなたは何のために戦うのかわからなくなるよ。それでもいいの?』

「私の決意は変わりません。それが私の償いで、二人に対する想いですから。」

『そっか。』

オーディンは少し空を仰いだ後、

『わかった。あなたをオーディンにしてあげる。』

「あなたは、どうなるのですか。」

『うーん、どうなんだろう。もうかなり鏡の世界にいるからなあ。きつともう駄目だね。』

「それでも、私にオーディンを?」

『あら、質問されちゃった。でもそうだね。あなたと一緒に。私はあなたに託すよ。』

オーディンはそう言うと、デツキをベルトから外し、変身を解いた。

「それがあなたの元の姿なのですね。」

『恥ずかしいあ。あ、あのね。3つお願いしてもいい?』

「ええ。なんでも。」

『ありがとう。やっぱり願いなんて、戦って叶えるものじゃないよね。』

「それさえも叶わないから、願いなのかもしれません。」

そうして、私は3つの願い事を聞いた。

「確かに。絶対に忘れません。必ず行くと誓いましょう。」

『頼もしいなあ。それじゃあ時間だ。よかったね、果南ちゃん。じゃあ、あとは任せたまよ。』

記憶が流れ込んでくる。

今まで巻き戻した時間すべての記憶。

およそ400の記憶を受け止めるには不十分で。

血が溢れ、視界はなくなり、胃の中のものはなくなった。

でも、これ以上の痛みを果南さんは400も堪えてきた。

それに比べればこれぐらい。

最後の記憶を読み取った後、私は私であることを捨てた。

未熟DREAMER（その時見える光）

酷く苦痛だった。

身体に刻まれたのは二人を救うという目的のみ。

そこに私の意志はなかった。

ただ、オーデインに変身する前の私が願ったことを実行しているだけの人形。

それでも構わないと決めたのもまた自分自身。

私はそれに従い続けた。

その日は突然やってきた。

何度タイムベントを繰り返しても戻れる時間は決まって同じ。

いつの間にか、果南さんの目から光が消えていた。

ライダーバトルが始まる。

何度目だろうか、数えることをやめたその戦いで今回も最後の一人が選ばれた。

王蛇だった。

「あなたの願いは何？」

何度も問うてきた質問を王蛇に投げかける。

相手に問うたびに、同時に自身にも問いかけ続けてきた。

多くの人は想う人と結ばれたいと願った。

家族の回復を願う者もいた。

それもまた、誰かを想う気持ちだ。

私と果南さんの知らない誰かが、他の知らない誰かを想っていた。それが、今回は違った。

「あなたを救うためよ。」

嘘だと思いたかった。

きつと果南さんも同じ気持ちだっただろう。

王蛇の仮面の内側にいたのは、鞠莉さんだった。

鞠莉さんは変身を解くと、果南に訴えかけた。

「果南！もう一度あの時みたい三人で笑いあおうよ！私たちならきつと！」

鞠莉さんは必死に訴えた。

「嘘だ、なんで、鞠莉まで、ダイヤも鞠莉もどうして、やめてよ、なんでなのさ」

膝をつき、果南さんの光無き瞳が鞠莉さんに向けられた。

「果南、帰ろう？もうこんなことやめよう」

手が果南さんに差し伸ばされた。

もしここで手を取っていたら、運命は変わっていたのかもしれない。

けれど果南さんは、その運命を許さなかった。

「オーデイン、やって。」

きつと抵抗したかった。

きつと叫びたかった。

きつとやめようと言いたかった。

きつと違う選択肢だつてきつとあると伝えたかった。

けれど、私はオーデイン。

逆らうことは決してない。

鞠莉さんの叫ぶ声はイヤになるほどよく聞こえた。

本当に、何のために戦っているのでしょうかね。

「今までで最悪のライダーだった。」

果南さんは王蛇のデツキを拾うとそう言った。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね、ごめんね」

何度も謝る姿を、私はただ見ていた。

「オーデイン、タイムベントを。」

私はオーデイン。

その指示に従うのみ。

悲劇は続いた。

次の世界でも鞠莉さんはライダーに選ばれた。

次も、その次も。

何度時間を巻き戻しても、鞠莉さんが戦いから外れることは一度もなかった。

「果南、もうこんなことは・・・」

「やめて!!!!!!」

何度も聞いたセリフを遮って果南さんは叫んだ。

「なんで、ダイヤは一度だけだったじゃん、なんで鞠莉もそうじゃないの、ねえ、なんでなの!!!」

「果南……? いったい何を……」

空を見て、果南さんは言った。

「……もう嫌になった。」

次の世界で、ライダーバトルは行われなかった。

果南さんがそれを願ったから。

私の目的が達成できない。

そう思ったが、私はオーデイン。

ライダーバトルが行われないのなら存在意義はない。

私はオーデインであることを隠し続けた。

お父様のケガのため、実家のダイビングショップを手伝うことを理由に果南さんは休学届を提出した。

鞠莉さんは短期の留学のため学校を離れた。

皮肉にも、最悪の形で果南さんの願いは少し叶えられたことになる。

私は生徒会長として、変わらぬ生活をつづけた。

「これが戦いの行く末だったんだ。」

休学前、果南さんが言ったことを私は忘れなかった。

これが、二年間のうちに起こった主な出来事。

状況が変わったのは、三年生として新学期が始まってからだった。二年前流れた統廃合の噂。

今度は噂ではなく現実として突き付けられた。

生徒会室でそれを知った私は、二年前のことを思い出した。思い出した、と言っても忘れたことは一度もなかったが。

私たちに奇跡は起こせなかった。

たった二人の友人さえ繋ぎ止められなかった。

あの人にだって謝らなければならぬ。

回想ついでに当時の部室に行こうと席を立った時、部屋の扉が開いた。

「久しぶり、ダイヤ。」

留学に行ったはずの鞠莉さんがこちらを見ていた。

私に近づき、懐かしい言葉を口にした。

「スクールアイドル、やろう。」

右手に二年前の衣装があることに気付く。

「留学はどうしたのです。」

「そんなのどうだっていい。私たちの学校がなくなるんだよ。もう一度私たちが立ち上がって……！」

「……どうして鞠莉がいるの。」

今度は果南さんが扉を開けて立っていた。

「果南！会いたかった、ねえ果南もまた一緒にやろうよ！」

「……そう、終わったと思ってたのに。やっぱり戦い続けるしかないんだね。」

果南さんはそれだけ言って、その場から立ち去った。

鞠莉さんも後を追いかけて、部屋には私一人残された。

嫌な予感がした。

予想はできた。

きつとまたライダーバトルが開かれる。

これを良しとしない、果南さんによって。

二年間触れることのなかったオーデインのデッキを取り出す。

「変身」

果南さんの命により、タイムベントを使用。

二年の経過により、戻る時間は二年の三学期に変わった。

再び繰り返される戦いの中で、ルールが再構築された。

一つに、ルールテラーの設定。

戦いを円滑に進めることができるように設置された。

幾度となく繰り返されることへの効率化だろうか。

役の候補者には国木田の家が選ばれた。

この土地に代々続く寺の地主を選出することで、伝達のしやすさを

確保できるためだと考えられる。

二つに、選出される変身者。

これは皮肉が過ぎた。

果南さんは、せめて自分の周りだけま巻き込まないようにと思っていた。

想ってしまった。

想いは歪み、気付けば果南さんに関りがある、またはそこからつながる人が選ばれるようになった。

数ある寺院から国木田の家が選ばれたのも、私の妹であるルビイと国木田花丸さんが友人であつたからだ。

三つ、ライダーは死ななくなった。

誰かが死ぬことを果南さんは恐れた。

しかし、これもまた歪められることになる。

ライダーとして契約するモンスターが変身者のだれかを想う気持ちをと奪うようになった。

死んでしまえば誰かを想うことはできない。

生きていけば、それがなくなるまで奪いつくすことができる。

自分の想いが奪われたくないのであれば、誰かと戦い、それをモンスターに差し出すという手段を取らざるを得ない。

こうして、戦いを加速させた。

同時に、契約しない野良モンスターも出現した。

これらはライダーに選ばれなかった人々の想いから生まれる。

私がオーデインにならなければ、オーデインになつていたであろう人々だ。

こうして、想いが想いを刈り取るシステムが出来上がった。

何度も繰り返した。

何度も、何度も、何度も。

そのどれも、時間を変えることはなかった。

果南さんは言った。

「戦わなければ何も変わらないんだ。」

次の時間で、果南さんはアビスのデッキを手にした。

違う。

こうなるためにオーデインになったんじゃない。
違う。

二人の救済を願っただけなのに。
違う。

私も果南さんも、目的を見失っている。

私はオーデインだから？

違う、違う、違う。

果南さんを救うためにオーデインになったんだ。

もう戦わせない。

力を貸して――。

『タイムベント』

2月終わりの空気はまだまだ冷え切っていた。

私は凍える手に息をかけてその人を待つ。

バスから降りたその人に私は話しかけた。

「こんにちは、渡辺曜さん。」

鏡の前に立ち、その向こうで行われている戦いをじっと見つめる。

「止まりませんのね、もう。」

何度も期待しては打ち砕かれたその常套句を意味も持たず発し、私は龍騎に変身した。

「あら、もう攻撃する必要はないのでは？」

「私は私のやり方で果南さんを、いいえ、この戦いそのものを終わらせます。」

できるかどうかなんてわからないのに。

それでも、あなたのそんな姿、もう見たくはないのです。

「ルビィ、お姉ちゃんに対する感情がないの。」

「ごめんなさい、私のその感情ははるか昔に失われています。」

それでもあなたが姉と呼んでくれるのなら、私はあなたの姉です。

それにあなたには、素敵なお友達だっているから。

これまでの出来事を千歌たちに語りながら、ダイヤは思う。

いつかこの戦いが終わるとして、その結末はあまり良いものではないだろうと。

私は、私たちは、罪を重ねすぎた。

少女と王蛇

すっかり冷めてしまった緑茶を含み、喉を潤す。

思うように喉を通らず、渴きは消えない。

そこでダイヤは自分が緊張しているということを自覚した。

言うべきことを言い終え、平然を装いながら様子をうかがっていたが、内心は恐怖でつぶれてしまいそうだった。

怖くなかったことなんて一度もなかった。

戦うことへの恐れ終わりのない旅の怖さ。

これまでそれらに何度も襲われてきた。

けれど今は違う。

今ダイヤが怖がっているのは話を聞いた皆の反応だ。

必死に自分を保つ。

それでも、心の震えは止まらなかった。

戦い続けて初めて、こうやって話すことができたのだから。

これまで多くを傷付けた。

心も身体も友人も家族もすべて。

これ以上傷付けたくなかった。

いつだって出来ることなら逃げ出したかった。

今だってそう。

今すぐここから去ってしまいたい。

でも、できない。

それが黒澤ダイヤであるから。

唇を噛みしめ、第一声を待つ。

沈黙を破ったのは鞠莉だった。

「……ふざけないで。」

今にも消えそうな声だった。

「ダイヤも果南も私のいる世界とは違うところから来たってこと？ 私の記憶とは違う人なんだ。別人なんだ。」

「でもそれはダイヤさんも……」

「私はダイヤに言っているの!!!」

梨子がフォローに回るも、鞠莉は強く言い捨てた。

「私は何のために戦ってきたの？プライドも捨て、傷だらけになって、それでも親友のために戦った。でもその親友は別人だった！私の知ってるあなたでは無いって言われたんだよ！」

ダイヤにこの言葉は重く、絞り出せる精いっぱい言葉を返す。

「私は、私です。」

「言葉遊びはいらないの！ねえ、教えてよ。私は、どうすればいいの。」
バックルをかざし、鞠莉は変身した。

「鞠莉さん！」

曜が止めに入ろうとする。

「変身しなさいダイヤ。私と・・・私と戦いなさい！」

「鞠莉さんやめて！もつとやることがあるでしょう!？」

「そうよ！こんな戦い意味ないじゃない！」

梨子と善子も訴えた。

それを鞠莉は振り切って

「意味なんて最初からなかったのよ。」

と吐いた。

「意味が無いなんて言わないでください。」

震えるダイヤの声はそこにいる全員の耳に届いた。

「果南さんを、私たちを、あなた自身を否定しないでください。」

「なら教えてよ、私は何のためにここにいるの。教えてってば！」

『ソードベント』

「・・・いつもいつもあなたは・・・あなたって人は・・・!!!」

ダイヤはオルタナティブのカードを手に取り、変身した。

『ソードベント』

王蛇とオルタナティブの交戦が始まる。

「止めないと、千歌ちゃん！」

千歌は二人をじっと見つめていた。

「千歌ちゃん・・・？」

「ん？ああ、ごめん梨子ちゃん。」

「ちよ、こんな時にそんなぼーつとして・・・。」

「だめだよ。」

「え？」

「だめなんだよ。争うことはよくないことなのに、きつとこの二人は止めちゃダメなんだよ。」

「千歌ちゃん、どうして。」

曜が二人のそばから問う。

「報われないんだよ。ダイヤさんも、鞠莉さんも。」

「どうしてオーデインにならないの。」

剣を交えながら鞠莉が叫ぶ。

「だってあなた、負けっぱなしでしょう？」

「・・・！言わせておけば!!」

互いの剣撃が傷を残す。

どこかの骨が折れる音がした。

流れる血は多く、今にも倒れそうだった。

それでも二人は剣をふるい続ける。

「あなたはいつもいつも！」

「ダイヤだって！一人でいつも抱えて、私のことをいつも一人にして！」

「よく言いますわ！」

『ファイナルベント』

『ファイナルベント』

後に残されたのは砂ぼこりと半分を失った黒澤家の屋敷。

地面には大きなクレーターができていた。

千歌達の目の前のクレーターの中で、二人は横たわっていた。

「どうしてくれますの、家が半分なくなってしまったではありませんか。」

「知らないわ、そんなの。」

「身体はボロボロ。ライダーの治癒能力があるとはいえ、話すことがこんなにしんどいなんて。」

「なら話さなければいいじゃない。」

「・・・鞠莉さん。」

「何よ。」

「ありがとう。」

予想していなかった言葉。

痛む頭を何とか回し、ダイヤを見る。

仰向けになったダイヤの頬を涙が伝っているのが見えた。

「ありがとう、本当にありがとう。あなたがいたから私はここまで来られた。戦い続けることができた。ありがとう。ごめんなさい。」

「・・・いつもそうだった。ダイヤは本当は弱いのにいつからかそれを隠すようになって。強がり続けてた。いつも壊れてしまいたいそうなのに。いや、これは私たちみんなね。」

「鞠莉さん。」

「だからお願い。あなたと同じで、私も弱い。とても弱い。もう私を一人にしないで・・・」

必死で泣くことを堪える鞠莉の顔を見ながらダイヤは思う。

きつと一番強いのはこの人だ。

自分の弱さを誰よりもわかってる。

それでも立ち向かおうとする。

きつとこれ以上の強さなんてない。

「これはライダーバトル、勝者は願いを叶えることができます。」

ダイヤは痛みをこらえながらそばに落ちているオルタナティブのデツキに触れた。

デツキは中央に大きな傷を受け、その機能を失っていた。

「もう二度とあなたを一人にはしません。絶対に。」

その手を今度は鞠莉の方へと伸ばし、手に触れる。

温もりを感じた鞠莉は、その手をやさしく握った。

「オーデインとして、あなたに問います。あなたの願いは。」

「決まっているでしょう？二人の救済よ。」

「わかってたの？」

梨子が千歌の顔を覗く。

「うーん、どうかな。でも、想いの力ってきつとこういうことを言うんじゃないかな。」

「そうかもね。」

長い少女の戦いは一つ終わった。

この結末を、彼女は知らない。

けれど、大きな前進であるだろう。

一歩進んでは何十歩も戻っていた少女に訪れた二歩目。

二人は願う。

今度はこの手が三つになりますようにと。

そのために、今はもう一度立ち上がろうと。

満足感と達成感。

すべてが終わったわけではないが、それでも一つの区切りで気持ちが緩む。

だから、気付けなかった。

「違う、そうじゃない。」

砲口は二人に向けられていた。

「それじゃ救われぬ。解決しない。おらが、おらが救うんだ。」

『シユートベント』

放たれた砲弾が二人を直撃する。

二人の身体は宙を舞い、重力に従って叩きつけられる。

「そう、救わなきゃ。殺してでも、助けなきゃ。」

吹き飛ばされた反動で落ちたものを拾い上げる。

「これがオーデインのデツキ。これがあれば。」

突然のことに、その場の全員が身体を動かさなかった。

全員ができたことは起こったことを把握するのみ。

花丸が、二人を攻撃した。

「花丸ちゃん・・・?」

ルビイが恐る恐る口を開き名前を呼ぶ。

「嫌なところを見せてごめんねルビイちゃん。でも、必要なことなんだ。」

花丸は思う。

許されようだなんて思っていない。

許されるぐらいなら、その運命をこの姉妹へと。

胸の内にある怒りは自分が被害者だったことに対してなんかではない。
ない。

戦いのために配役がされた？自分は戦いの駒に過ぎなかった？

そんなことどうだっていい。

何も変わっていないなかったって、信じていたのに。

想いのかけら

流れる血と煙で視覚は無いに等しい。

聴覚も砲弾の爆発音で一時的に機能を奪われている。

遠のく意識の中、浮かび上がってきたのは一つの記憶。

手を伸ばす。

少女に届くように。

どれだけ近づこうとも遠のいていくその子に触れるために必死になる。

ふと顔を見れば、少女の口が動くのが分かった。

声は聞こえず何を伝えようとしているのかわからない。

「待って、待ってください！」

呼び止める声も届かず、少女は微笑んで光の中へと消えていった。

——そこで黒澤ダイヤは意識を取り戻した。

これも一種の呪いだなとため息をつき、目線を横へとやる。

身体を動かさそうともしたが、攻撃が直撃した身体ではそれは叶わな
い。

生きてることさえも奇跡だと思うが、それはライダーバトルの影
響だろう。

隣には鞠莉がいた。

同じように飛ばされ、横たわってはいるようだが意識はある。

「お・こ・す・な」

鞠莉は微かに動く右手でダイヤにジェスチャーを送った。

限界が近いのだと察したダイヤは無事を確認しその通りにした。

やがて少しずつ視界が開かれていく。

ゾルダがオーデインのデッキを持っていることに気付く。

無理をすれば身体を動かせる状態であることにも。

口に溜まった血を吐き、その場に立ち上がった。

「ダイヤさんー鞠莉さんー」

千歌が呼び掛けて安否を確認する。

「心配は……いりません……。鞠莉さんも……無事です。限界が

きて・・・意識が沈んだみたいですね。」

それでも立ち続けていることは厳しく、がれきに身体を預け腰を下ろした。

途中、何とか鞠莉の身体を引きずり、安全な場所へと避難させた。

その一方、善子は花丸の前に立った。

「それ、どうするつもり。」

花丸の表情は変わらない。

「決まっているでしょう？おらがなるんだよ、オーデインに。」

「そんなことしてどうなるっていうのよ。」

花丸の表情が微かに動いた。

「どうにもならないから、こうするしかないんだよ。」

「それを返しなさい。」

善子はデツキをかざし、ファムへと変身した。

「返さないってんなら、力づくでも。」

「善子ちゃんも邪魔をするの？でも、もう遅い。」

花丸がゾルダの変身を解く。

そしてオーデインのデツキを善子に向けた。

「だめ！花丸ちゃん！」

曜と梨子の変身し、止めに入ろうとする。

それより先に、花丸はデツキを挿入し宣言した。

「変・・・身。」

多くは最悪の事態を予想した。

しかし、その予想は外れる。

そこにオーデインは現れなかった。

「何が起きているの・・・？」

ルビイが震える声で言う。

花丸は明らかに動揺していた。

「どうして!?!なんで変身できないの!?!ねえ!?!なんで!!」

何度もデツキを差し込むが、一切反応は無い。

「オーデインは無作為に選ばれた・・・誰かがなるライダー。ライダーバトルに選ばれなかった・・・弱い願いの集合体。もしくは・・・そ

れが存在……しない人たちの。」

ダイヤは口を開くたびに全身を駆け巡る激痛に耐えながら言った。「もしかして……ライダーである私たちはオーデインになれないってこと……?」

ダイヤはうなずき、

「ライダーの資格を持つものは皆何かしら強い願いを持っている。それがあろうちはオーデインには変身できません。」

と言った。

「あはは、なんだ……。私がやろうとしていたことは最初から無理だったってことなんだ。」

「曜ちゃん……。」

「大丈夫だよ、梨子ちゃん。もうそんなこと私は考えてないから。」

曜は言いながら千歌の方を見た。

千歌は何も言わず、一点を見つめていた。

「千歌ちゃん……?」

曜が言おうとしたとき、花丸がそれを遮った。

「あなたがいるから?」

あなた、が誰を指しているのか皆すぐに察した。

「あなたが……あなたがいるからおらはオーデインになれないの?あなたを殺せば……殺せば!したらオーデインになれる……?」

『ファイナルベント』

「ずら丸!やめなさい!」

訴えに背くようにすべての発射口が開かれる。

「まずい!ダイヤさんを守らないと!」

千歌の言葉に共感し、二年生が駆け寄りとうとする。

「させない。」

しかし花丸が砲弾を放ちがれきを崩した。

瞬間的に三人の行動を鈍らせた隙について、花丸は言った。

「エンドオブワールド。」

善子はすべての攻撃を逸らそうとした。

けれど一人の限界はある。

防ぎきれない数々の攻撃が無防備なダイヤへ向かっていく。

「ダイヤさん!!」

ダイヤは死を覚悟した。

死、とは言っても結局はこの戦いによって死ぬことはない。重くて意識を失う程度だろう。

・・・違う。

私は少しでも思い出した。

少しでも取り戻した。

三人楽しかったあの頃の思い出を、二人への想いを。

自分で言っておきながらどうして気付かなかったのだろう。

私も、オーデインの資格を失っていたんだ。

私はもうオーデインではない。

そうなら、話は別だ。

今この状態でこの攻撃を食らえば、まず命はないだろう。

ああ、そうか。

ここで私はゲームオーバーなのか。

砲弾や光弾が迫ってくる。

ダイヤは覚悟して、目を閉じた。

「お姉ちゃん!!!!!!」

煙幕が消えていく。

ダイヤは、自分がまだ生きていることに気付く。

開かれていく視界の中で立ち尽くす人のシルエットが見えた。

「・・・嘘でしょ。」

シルエットはガイのものだった。

鎧は多くの箇所が砕け、仮面も破壊されて変身者の顔が見えていた。

足元は赤く染まっている。

やさしく過ぎ去る風に身をゆだねるように、ガイは倒れた。

誰もが理解した。

黒澤ルビイが攻撃をすべて受け止めた。

「ルビイ!!!」

ダイヤが叫び、身体を抱える。

善子や二年生も同様にルビイの元へ駆け寄った。

「ル・・・ルビイ・・・ちゃん・・・?」

変身を解き、花丸はその場に立ち尽くした。

一瞬ルビイが向けた笑みを花丸は見逃していなかった。

「ああ・・・ああああああああああ!!!」

よろめきながら、花丸はその場から逃げ去る。

善子が後を追おうとしたが、ルビイがそれを引き留めた。

「花丸ちゃんを・・・責めないで上げて・・・」

今にも消えそうな声でルビイは言った。

「でもこれはいくら何でも・・・!」

梨子の言葉にルビイは首を振った。

「ルビイ、考えてたんだ。ルビイは何のために戦うんだろうって。お姉ちゃんの話聞いてわかったよ。お姉ちゃんの手になりたかったんだ。想いは取られて感情は無いけれど、それでもお姉ちゃんはルビイのお姉ちゃんだから。だから、もう一度お姉ちゃんのことを大好きだっと思ったかったんだ。結局叶えられそうにないけれど。」

聞き取ることすら困難な声を全員が必死に聞こうとした。

「今からでも叶えるのよ、ルビイ。」

「きつと、善子ちゃんや花丸ちゃんがいなかったら、もつと早くにだめになってたと思うんだ。千歌さんたちがいたから、決意できたんだ。」

「ルビイ・・・。」

「だから、ありがとうございました。それでね、負けちゃったルビイが言うのもどうかなくなって思うんだけど、お願い聞いてもらっていい?」

「・・・何言ってるの。あんたが自分で叶えなさいよ。」

「えへへ・・・。あのね、花丸ちゃんを助けて欲しいの。間違った方法で進むあの子を止めてほしい。それから、ありがとうって、伝えてほしい。」

「・・・任せなさい。だからあんたはゆっくり休みなさい。」

「うん・・・ありがとう。」

ルビイは静かに目を閉じた。

仮面ライダーガイ、脱落。

残る仮面ライダーはあと8騎。

ジングルベルがとまらない

善子は立ち上がるとすぐ背伸びをした。

「じゃあ、行ってくる。」

静かに眠るルビィを横目に、そう言った。

花丸の襲撃以降、千歌たちは体制を整え直していた。

善子はすぐ花丸を追おうとしたが、梨子がそれを止めた。

焦る気持ちばかりでは何も進展しない。

まずはこちらが十分に落ち着いてから動こうと提案した。

善子は渋りながらもそれに頷き、体力の回復に努めていた。

久しく見ていなかった時計が朝の7時を知らせていることに気付いたときは皆が驚いていた。

太陽の光さえろくに通さない分厚い雲で覆われた今、自然を頼りに時間を把握することは無理に等しい。

そしてそれからさらに2時間後、善子が動き始めるために立ち上がった。

「私も行きます。」

ダイヤが立ち上がりそう言った。

けれど、善子は首を振って

「ダイヤさんはここでルビィを見守っていてください。」
と言った。

善子は思った。

今ここでダイヤが離れてしまったら、ルビィが身体を張った意味が無くなってしまう。

いつか目を覚ました時、一番最初に目に映るのは姉であってほしい。
それに。

花丸を助けると約束した。

だから、これは善子自身の問題でもあるのだと。

「なら、私もいっしょに行くわ。」

柱の陰から姿を見せたのは鞠莉だった。

「んー！よく寝た。ねえ、私ならいいでしょ？」

鞠莉は大きくあくびをしながら言った。

「鞠莉さん。でも……。」

「勘違いはNO。これは私の戦いでもあるの。せつかくダイヤに勝てたんだもん、また負けだなんて、そんなのイヤ。」

口調は明るくても、目は本気だった。

善子はそう感じ、それを許諾した。

「OK！そうと決まれば。」

鞠莉はダイヤに向かって言った。

「ダイヤ。これ、借りていくわよ。」

これ、と呼ばれたものを見てダイヤは驚いた。

「ほんとに……あなたは最悪のライダーですわ。」

「それは、誉め言葉として受け取っておくわ。」

鞠莉は陽気な笑顔を見せる。

ダイヤもつられて笑った。

「ダイヤさん、最後に寝たのはいつですか？」

善子と鞠莉が花丸の元へ向かってから、千歌がダイヤに聞いた。

「なぜそのような質問を？」

「ダイヤさん、オーデインに選ばれてから一睡もしていないんじゃないんですか？」

少しだけ驚くも、微笑んでダイヤは返した。

「寝ている時間さえも惜しいのです。少しでも早く、この戦いを終わらせたいから。」

ダイヤはそう言うのとルビィの頭をなでながら続けた。

「それに、寝るのが怖いのです。いつ戦いが起こるのかわからない。もしかしたらもう目覚めないのかもしれない。そう思うと、眠りにつくことができないのです。」

優しい口調で言われるも、千歌にとってそれはとても苦しく聞こえた。

だからこそ千歌は聞いた。

今ならきつと思つて。

「少し、寝てください。見張りとかは私たちがやります。ルビイちゃん横ならきつと眠れるでしょう?」

ダイヤはルビイの顔を見る。

不思議と、今なら怖くなかった。

「・・・では、少しだけを。」

「はい。どこかのタイミングで起こしに来ますから、ごゆつくり。」

千歌はそう言い残して、部屋を去った。

先の戦いで屋敷の半分は壊滅しているため、姉妹はかろうじて残った部屋の中で一番部屋としての機能が保たれているところで寝ることとなった。

扉を閉めると、梨子と曜がいた。

「ダイヤさん、どうだった?」

「うん、今なら寝ることができそうだった。」

「よかった。まさかとは思ったけど、本当にずっと寝ていなかったなんて・・・。」

初めてダイヤに出会ったときのことを曜は思い返す。

当時は事情などいざ知らず。

どこまでも強い人だと感じていた。

「それで、私たちはどうしようか。」

残されたのは二年生の三人。

果南を探そうにも、下手に動くことはできない。

「作戦会議、かな。」

千歌の提案に二人も同意する。

「じゃあ、この先どう動くか、だよね。」

「紙とペン・・・って、私たち今デツキしか持っていないんだ。」

かつて教室でしたことと同じように、曜が梨子に差し出そうとしたがそれは叶わなかった。

「あれから、ほとんど時間は経っていないんだよね。」

曜が指を折って数える。

「そうだ、鞠莉さんが言った2週間の期限もまだ1日しか経っていない

んだ。」

「2週間・・・ねえ、梨子ちゃん、曜ちゃん。」

千歌の呼びかけに二人とも目を千歌にあわせる。

「2週間もこんなつらい戦い、続けていられないよね。」

何が言いたいのかはすぐわかった。

けれど二人は、千歌の言葉を待った。

千歌もそれを感じ、慎重に告げた。

「残り3日。これですべて終わらせよう。」

「3日・・・それまでに戦いの勝者が決まるってこと?」

「そういうことになるね。ただ・・・」

千歌はその先をためらった。

梨子はそれを察して言った。

「ただ、やっぱりライダー同士戦いたくないんでしょう?」

「うん・・・どうすればいいのかな・・・」

「私は、千歌ちゃんがしたいことを応援するよ。」

千歌の手を取り、曜が言った。

「私も同じよ。千歌ちゃんのしたいようにすればいいと思う。だって私たちは願いを叶えようとここにいるんだもの。」

そう言って、梨子も千歌の手を取った。

「曜ちゃん、梨子ちゃん・・・ありがとう。決めた。決めたよ!」

今までの陰気な空気を振り払い、千歌は立ち上がる。

千歌は二人に太陽のような笑顔を向け、言った。

「ねえ、私思うんだ。願いつてやっぱり戦って叶えるものじゃないって。」

「鞠莉、さつきダイヤに言ってたそれ何?」

歩きながら善子が聞いた。

「今はシークレットよ。でも、きっと切り札になるわ。」

「まさか、オーデインの・・・」

「NO!花丸を見てわかったでしょう?あれは私にも使えません。」

会話は途切れ、歩みを進める。

今度は鞠莉から話を切り出した。

「もし花丸が暴走したままだったらどうする？」

善子の答えは早かった。

「倒すわよ、私がね。罪の背負いつこってわけじゃないけど。でもそれぐらいの覚悟を持ってなきやここには来ていないわ。」

「そう。その答えが聞けてうれしいわ。」

再び会話が途切れる。

その後、会話が再開されることはなかった。

切り出すより先に、たどり着いた。

国木田花丸の元へ。

善子は吸い込めるだけ空気を吸い込んで、言葉を吐いた。

「迎えに来たわよ、ずら丸！」

キミのことが

少女は生気を失った目で善子を見た。

服は破れ、髪は乱れ。

頭部と手元が赤いことに善子は気づいた。

ひどい姿だと思った。

視線を自分の腕にやる。

治りかけの切り傷に支配された自分の腕を見て、人のことは言えな
いなと心の中で笑った。

「放っておいて。おらはもう、何もしたくない。」

花丸は善子にそう言った。

善子はそれを聞いて、ただ

「嫌だ。」

とだけ返した。

文字に起こせばたったの二文字。

それだけの言葉なのに、花丸は心がぐちゃぐちゃにかき混ぜられた
ような気分になった。

「何、何なの。ルビィちゃんを失って、ダイヤさんを傷付けて。善子
ちゃんを敵に回して、それで私に何をしろって言うの。」

「敵じゃない。」

善子はただひたすらに花丸の目を見つめていた。

「だったら、ここで私を倒してよ。」

光のない花丸の目から涙が流れる。

善子は唇を強く噛んだ。

「あんたがそれを望むなら。私だって覚悟ぐらいあるわ。」

「変身。」

仮面に表情を隠し、互いににらみ合う。

「何もかも、変わっちゃったね。」

それは、花丸の一番の気持ちだった。

変わらないでと願うものすべて自分の知らない姿へ変わっていく。

自分でさえも例外ではない。

花丸はそれが怖かった。

大切にしたいことが、人が、想いが、いつの間にか自分の知っているそれではなくなっていることが怖かった。

だから願った。

今のままでいたいと。

けれど善子の返事は、花丸の期待していたものとは違った。

「あんた、まだそれ言ってるの?」

「・・・え?」

花丸のおびえた声に苦笑いしながらも、善子はつづけた。

「変わらないものなんて、ほとんどないのよ。当り前じゃない。」

「でも・・・!変わらなければずっとこのまま・・・。」

もう少し早くにこれを伝えていれば、未来は違ったのかもしれない。

善子は言いながら後悔したが、それでも言うことをやめない。

「確かにそうね。だから、一番変わって欲しくないことを守るために変わるの。自分の大切なことを守るために、私たちは『変身』するのよ。」

「変身・・・。」

「あなたは私に気付いてくれた。津島善子に気付いてくれた。それが私にとっても嬉しかった。だから、この小さな喜びをずっと守るために私は変身するの。」

「じゃあどうして、私を倒そうとしてくれるの・・・。」

「殺してでも救ってみせる、よ。」

『ソードベント』

剣を構え、善子は戦いの姿勢に入った。

覚悟を固め、剣を振りかぶる。

しかし、花丸を斬りつけるはずだった剣は振りかざされたまま止まっていた。

否、止められていた。

「そこまでよ、善子。」

剣を抑えていたのは王蛇に変身した鞠莉だった。

「どうして止めるの。」

鞠莉は優しく言う。

「あとは私に任せて。」

善子は反論する。

「マリィ、私が花丸を倒すつて答えたらうれしいって言っていたじゃない。」

鞠莉は語調を強めて言った。

「ええ、うれしいわ。それだけの覚悟を持ってくれているということだからね。けれど、それと同じぐらい悲しいわ。その答えは、私たちと同じなもの。」

「あ……。」

言われて、善子は剣を持つ手の力を抜いた。

「とはいえ、その覚悟を無駄にするわけでもないわ。」

鞠莉は花丸の顔を見て言った。

「花丸、あなた今でもこの戦いに勝とうと思ってる？」

言葉が詰まる。

それでも、振り絞り言った。

「ここで倒してもらえないのなら。それ以外にはもう……！」

答えを聞き、鞠莉はため息をついた。

「そう、なら善子じゃなく私が戦うわ。」

善子が無言で言っていることに鞠莉は気づいていたが返事することなく続けた。

「これが倒せるならね。」

『アドベント』

鞠莉は召喚のカードを使用し契約モンスターを呼び出した。

それは、大きな蛇ではなかった。

それは、梨子のもとにいたエイでもなかった。

三体目の契約モンスター。

花丸がそれに気づかないわけがなかった。

「そのモンスターは……。」

鞠莉は口元に笑みを浮かべ言い放った。

「ええ。これはメタルグラス。仮面ライダーガイ、黒澤ルビイが契約していたモンスターよ。」

仮面越しに花丸の表情が歪んでいる、善子はそんな気がした。

「さあ、来なさい。」

鞠莉の挑発に、花丸はカードを引いて答える。

『シユートベント』

「それだけは・・・許さない!!!!!!」

花丸は叫ぶ。

けれど身体は反してそれ以上動こうとしない。

「なんで・・・!なんで動かないの!!」

鞠莉は近づき、かみしめるように言った。

「出来るわけがないのよ。だってそれが、あなたの強さだったはずだから。」

言うのと、鞠莉はメタルグラスを見てささやいた。

「友達と戦うのは、私たちだけで十分なのよ。」

それは鞠莉の本心だった。

鞠莉は戦うことでしか解を見つけることができなかつた。

決してそれを後悔しているわけではない。

しかし、絶対にそれは間違っていた、とも確信をもって言えてしま
う。

最後、鞠莉は果南を討つことになる。

だからせめて、鞠莉たち以外はこんな思いをせずにしてほしい。

そのためならば自分が外道と、最悪だと言われてもいいとさえ思
う。

メタルグラスはある意味その決意と言える。

一つ、ダイヤがこれを託してくれた時の顔はとても良かったと思
出す。

花丸は武器を下ろして変身を解いた。

「二度も阻まれたら、もうどうしようもないぞら。」

善子も変身を解き、そばに駆け寄った。

「お帰り、花丸。」

強く抱きしめられた花丸は、流れる涙を止められないまま、うんと言った。

それを見ながら鞠莉は思う。

ダイヤはずっとこれを見てきたのだろうか。

想像もできないぐらいに、ずっと、ずっと。

果南もきつと——。

「・・・バッドタイミングね。」

自分の心でも読んでいたのかと疑いたくなる。

果南がこちらに向かってきている。

それはそれで幼馴染感が出て悪い気はしないが、いまではないと切り捨てた。

それだけではなかった。

果南は大量のモンスターを従えてこちらに向かっていた。

一国の軍隊を思わせるような数に鞠莉は恐怖感を覚えた。

善子と花丸も異変に気付き、鞠莉の視線の先を見た。

「嘘でしょ、数が桁違いすぎる。」

いったいどこにあれだけの数が潜んでいたのか。

三人とも答えはすぐに出た。

「きつと、攫われた人々のものね。」

鞠莉は眉間にしわを寄せる。

突然、果南は一人別の方向に進路を変えた。

その直前、鞠莉と視線を合わせ、ついて来いと指示を出して。

数えるのも嫌になるほどの敵は変わらずこちらへ向かってくる。

そのほとんどがゴールドサンダーやそれと同等の強さを持つものだとわかる。

「これを倒してから来いってこと・・・？果南ちよつと壊れてんじやない？」

そう言いつつ、鞠莉は武器を構えた。

「ここが正念場、デース。」

気合を入れた鞠莉の前に花丸が立った。

「? なんでそこに立ったのかしら?」

花丸は振り向いて言った。

「追ってください。」

理解ができなかった。

言葉の意味は理解できたが、意図が分からなかった。

「正気?死ぬわよ?」

建前でもなんでもなく、鞠莉は本当にそう思ってしまった。

しかし、花丸はそこからどかなかった。

「最後までいい、国木田の意地見せないといけないぞら。」

そこで鞠莉はようやく理解した。

この少女は、ここで自分の戦いに終わりを見つけようとしている。

逃げるつもりで言ってるわけではない。

届かない分は、鞠莉に任せようとしている。

今ここでリタイアしても構わないと思ってる。

だから、そんなに暗れた表情をしているのか。

「気持ちわかるわ。だから……。」

これでいいのか鞠莉はわからなかった。

でも、今の花丸の顔を見ると、間違えていないと思えてきてしまうのが憎い。

「だから……。任せた。」

振り返り、鞠莉は果南を追いかけるため駆け出した。

「私、こういう役回りみたい。」

「善子ちゃん?!なんで?!」

「ヨハネ! ってリリーの時もそうだったけど、いや、今度は置いていかないのか。」

「何を一人ぶつぶつ言っているぞら。」

「うるさいわねー。せっかく残ってあげたのに。」

「頼んでないぞら。」

「なっ!!帰るわよ……!」

「・・・そうして欲しい。逃げ延びて欲しい。」

「ずら丸もよ。」

「・・・そうだね。」

横たわる二人の少女。

重なる掌。

ベルトは碎け、原形は無い。

それに気付く者もない。

軍隊のような数の敵は数えることができるまでに減っていた。
目標を失ったそれらは、果南の後を辿る。

仮面ライダーファム、仮面ライダーゾルダ、脱落。

残る仮面ライダーはあと6騎。

叶えたい願い

呻き声が聞こえる。

聞きたくないと耳を塞いでも掌を貫いて耳まで届く。

千歌、梨子、曜は近づいてくるモンスターたちをじつと睨んでいた。「数、増えてるね。」

千歌はそう言うのとデツキを構えた。

三人とも気付いていた。

それが、攫われた人々の想いだということに。

自分たちが戦うのは誰かが叶えたいと思った願い。

いままで戦ってきたはずなのに足がすくむ。

「ルビィちゃん、まだ目を覚まさないの？」

曜が千歌の問いに首を振って答える。

「今は、あれをなんとかしなきゃね。」

ダイヤを起こさないように、なんてのは無理だろう。

それでも、目が覚めた時にこの状況を見せることは避けたい。

それぞれ考えは一緒だった。

「花丸ちゃんが帰ってきてこれを見たらびっくりしちゃうし。」

「善子ちゃん、びっくりして腰抜けちゃいそう。」

「鞠莉さんがまた家を粉々にしないようにも、ね。」

三人とも目を合わせ、頷いた。

「二変身」

剣を取り、一体ずつ片付けていく。

背中を取られないように円になって。

「これ、一人何体!？」

足で寄り付こうとするモンスターをよけながら曜が叫ぶ。

「なるべく多く!」

剣で一突き、答えながらモンスターを消していく梨子を見て曜の口が緩む。

「わかりやすいね、了解!」

一体、また一体。

順調に倒していく。

数が減った様子は感じないが、手ごたえはしつかりある。これなら、いける。

千歌は勝利を感じた。

しかし、その自信はすぐに消え去ることになる。

大量のモンスターの壁を崩したその先。

それ以上の数のガルドサンダーが待ち構えていた。

それだけじゃない、その亜種であろうモンスターたちも群を成していた。

言葉は無い。

言い表すことのできない絶望。

浮かべたくもない言葉があふれだしてくる。

無理だ、勝てない、逃げることもできない。

足が動かない。

手は酷く震えている。

諦めてしまおうか。

ここで終わってしまったとしても、きっと次の世界で……。

気を持ち直して戦おうとする。

剣は当たる、攻撃は効いている。

それ以上に三人へのダメージが蓄積されていく。

ガルドサンダーだけでなく、倒せるはずのモンスターにまで攻撃を食らう。

耐えきれず、曜が膝をついた。

千歌もだんだん視界がかすれていく。

ここでゲームオーバーなのだろうか。

勢いだけで剣を振る梨子の視界に一体のモンスターの姿が映った。

ダメージを負い、動きが鈍っているモンスターはこの状況ではよく目立った。

目立つ理由はそれだけではない。

剣が背中に刺さっていた。

サーベルの形をしたその剣が誰のものか、梨子はすぐに分かった。

「それ・・・ファム、よっちゃんの・・・。」
鼓動が速くなる。

はちきれそう、止まってくれない。

この感情は何だろう。

わからない、そも、わからうとしていない。

無意識のうちに、梨子はそのモンスター元へ進んでいた。

爪で裂かれようと、殴られようと、歩みを止めない。

歩んだ道が赤く色づいている。

道しるべのようなものだ、これでもう迷わない。

やがて剣の目の前にたどり着き、モンスターに向かって言った。

「絶望とか、悲しみとか、いろんな感情の名前を考えたわ。」

剣に手を伸ばし、それを勢いよく引き抜いた。

そのままその剣で辺り一面に斬撃、周囲を一掃した。

「けどね、この感情はもつと単純だった。」

善子の剣がここにあることが何を意味するのか、すぐに分かった。

斬撃の後、剣は光となって消滅。

それは確信に変わった。

「怒り。あなたたちに向ける感情はそれだけで十分よ。」

デッキからカードを引き抜く。

青い風に召喚機が包まれ、形を変えた。

「誰かの想いとか、願いだとか、倒していいのかなって悩んでいたけれど。」

変化した召喚機にカードを挿入する。

『サバイブ』

ナイトサバイブ。

金色が加わった鎧を身にまとい、周囲をにらむ。

「そんなこと、守るべき人を守ってから考えるべきだった。」

『ファイナルベント』

「よつちゃんはこれよりもっと痛かったはずよ。」

言葉とともに、多量のモンスターが消滅していく。

千歌と曜に集っていたモンスターたちも梨子によって倒されていく。

「二人だけは守る、何があっても。」

霞む視界を必死に開き、梨子の姿を見ていた千歌は違和感を覚えた。

二人とは決定的に違う何か。

何か別のこととこの違和感がつながっているような……。

「ううん、それよりも！」

痛む身体に鞭を打ち奮い立たせる。

自分も強化を、とサバイブのカードを引こうとしたところで、曜の叫びが聞こえた。

「おおおおおおおおお!!!!!!」

こんなところで負けていられない。

骨の折れる音がする。

どうせ回復するのだから関係ない。

この力は飾りか？

いいや違う、守るための力だ。

おぼれたっていい。

今は梨子ちゃんのように私も戦わなきゃ。

『ソードベント』

『ストライクベント』

『ガードベント』

『アドベント』

『ファイナルベント』

ありったけのカードを突っ込む。

それらをすべて敵へ、敵へ、敵へ！

焼き尽くせ、切り刻め、滅べ！

どんだん敵が消えていく。

武器も消滅していく。

ならば素手だ、足だ、頭突きだ。

「もつと、もつと、もつと!!!」

「曜ちゃん、ストップ。」

千歌の手がリュウガに触れる。

どうして？止まったら敵を倒せない。

「それは本当に曜ちゃんの意志？」

曜が動きを止める。

「私の意志？そんなの当たり前……」

「ううん、それは違うと思う。」

違う？そんなことない。

「ほら、梨子ちゃんだってあんな風に……。この前とは違うよ。これは私の……」

「違う。今の曜ちゃんは戦うことが目的になってる。」

戦うことが目的に……？

掴まれた手を見る。

千歌の腕は無数の切り傷で埋め尽くされていた。

そこで我に返る。

「え……？千歌ちゃん変身……」

「解いたよ。危ないのはわかってるんだけど……。でも！」

掴んだ手を放し、手をデツキへ。

そして千歌はリュウガのデツキを取り外した。

「！返して！それが無いと……！」

千歌は確信した。

曜にリュウガの影響が及ばないわけではない。

リュウガを呼び出すためには曜が必要であったが、決して抗える身体ではないこと。

以前自分の身に起きた異変と同じことが今起こっている。

それでも曜は自分には影響なく変身できると信じていた。

自分の名前は渡辺曜。

千歌という光に魅せられて、輝こうとする影。そう思い込んでいた。

「曜ちゃん、聞いて？」

自分の手を曜の頬にそつと添える。

頬に血が付き、ごめんと軽く微笑んだ。

「曜ちゃんはきつと、もつと自分で戦える。こんな力に頼らずとも。だってあなたは渡辺曜、光り輝くって意味の「曜」なんだから！」

目を見開いて千歌を見る。

私が、光。

照らされていると思っていた自分が、光。

千歌ちゃんと同じように、輝いている、光。

そうか、オーデインになることがとかそんなことじゃなくて、もつと単純なことが違っていったんだ。

「二度目、だね。」

「何度でも止めるよ。だから、はい。曜ちゃんにはこつちがいいですよ？」

渡されたものを見て曜は動揺した。

「これ……。」

「タイミングをうかがってたんだ。いつ渡そうかって。梨子ちゃんがあれだけ戦っているのは予想外だけど。あ、あとで理由は聞かなきゃね。でも、うん。それを使って？」

「でも、千歌ちゃんは……。」

「大丈夫！対策はあるから！千歌なりに、だけどね。」

あははと笑う千歌をみて曜は思う。

本当に、どうにかしてくれる気がする。

「わかった、行ってくる。」

「梨子ちゃん、助っ人に来たよ！」

声を聞き、梨子が振り向く。

握られたデツキを見て、納得する。

「千歌ちゃん、今渡したんだ。」

「ねえ、梨子ちゃん。千歌ちゃんが何する気か、知ってる？」

梨子は首を振る。

「ううん。でもあの子ならきつと、やってくれるわ。」

「うん、そうだね。」

「じゃあ曜ちゃん、私ね目の前のモンスターたちが憎いの。倒したいの。怒りがどんどんあふれてくるの。」

「・・・何を見たの？」

「剣よ。堕天使の女の子の。」

「そっか、手、貸すよ。」

「・・・ありがとう。」

「変身!!」

かつての黒い鎧は今は無い。

曜を包むのは赤き龍。

牙だと名乗った自分はもういない。

赤い炎に身を覆い、形を変化させる。

『サバイブ』

龍騎サバイブ。

千歌と梨子と共に戦うため、曜は剣を取る。

13号ライダー

手にマメができる。

そしてつぶれる。

痛みをこらえて次の敵へ。

そしてまたマメができ、つぶれる。

痛みが消えたと思ったら、あばらがやられていると気づく。

痛みを感じないのならむしろ好都合。

そうやって身体に思い込ませる。

二人は互いの様子を伺おうとはしなかった。

状態を知らばきつと助けてしまう。

だから、見渡す限り埋め尽くされたモンスターをすべて倒すまで話しかけないと決めている。

曜は感じていた。

身体が悲鳴を上げているのは確かだった。

しかし、それと同じぐらい身体が軽かった。

これが、サバイブの力。

大きな力を使うことはそれだけ身体に負担がかかるということ。

これが終わったとき、身体がどうなっているか。

ライダーの治癒能力があれば、状態は良くないだろうことも分かっていた。

それでも曜は戦うことをやめなかった。

あの子にこの力を託されたから。

「うおおおおお!!!」

叫べ、叫べ、叫べ!

怒り。

まさか私がこの感情で動くとは思わなかった。

何に対して憎いのか。

一体消滅する度に梨子はそれを刻んだ。

モンスターたちが憎い。

間違っではない。

あの子を倒したのだから。

でも、それだけでは自分を保てないともわかつている。

「私が本当に憎いのは、人の夢に優劣をつけようとするこの戦いよ！」
怒れ、怒れ、怒れ。

龍騎を譲渡した千歌は自分の手のひらを見ていた。

「二人が頑張っているのに、こんなことしてちゃダメなんだけどね。」

一人で苦笑いしながら、手のひらを強く握った。

爪が食い込んでも力は弱めなかった。

やがて裂けた皮膚から血がにじんだ。

「いったあ……。」

思わず手を振って痛みを和らげようとする。

いつまでも痛いのは慣れないことを実感しながら、もう一度手のひらを見た。

「……よし。」

誰にも聞こえない声で気合を入れる。

その直後、背後から何かが高速でモンスターの群れへ突っ込んでいった。

それが誰なのか考えるまでもなかった。

「うるさくて寝てられませんか。」

オルタナティブ、ダイヤだった。

ダイヤは梨子と曜の倍以上の速さでモンスターたちを仕留めていった。

「うわ、ダイヤさんすごい……。」

曜が思わず声を漏らす。

その速さには梨子も啞然とした。

「やはり睡眠は大事ですわ。」

この状況でそれを言うダイヤが恐ろしいと誰もが思った。

ダイヤの加勢もあり、モンスター群と距離ができたところで三人が集まる。

「これ、キリないって！」

曜の言葉に梨子も頷く。

「殲滅してやりたいけれど、このままじゃ私たちが先に……。」

疲労が蓄積する二人を見てダイヤは思った。

オーデインであれば、と。

「三人に聞きたいんだけど。」

千歌の声がした。

千歌は三人が気付かぬうちに同じ戦線に戻っていた。

「千歌ちゃん！生身のままじゃ……！」

千歌は首を振った。

「大丈夫、それより教えて。残りの群れのガルドサンダーを引いた2

／3、これだったら三人で何とかできそう？」

「千歌さん？それはどういう意味ですか？」

ダイヤも意図が分からず困惑する。

「できるかできないか、どっち？」

その真剣なまなざしに最初に答えたのは梨子だった。

「やるわ。対策とかいうの、あるんでしょ？」

満面の笑みを浮かべて千歌はそれに答えた。

「よかった。じゃあ、任せたまよ。」

それ以上は何も言うなという目を向けられた三人はただ頷き再び

モンスターと向き合った。

「あ、ダイヤさん！」

呼びかけに、ダイヤは思わず振り向いた。

それを見なければ、こんな気持ちにはならなかったかもしれない。

それを聞かなければ、悲しまずに済んだのかもしれない。

忘れていたわけではない。

ただ、そうならないように努めていはずなのに。

「約束、三つめもお願いね！」

金色のデツキをこちらに向けながら、そう言った。

心は決まった。

自分にとっては初めてだ。

けれど、自分にとっては二回目らしい。

それは今からわかること。
さあ、行こう。

「変身!!」

思えば、最初からそうだった。

初めて龍騎に変身したとき、初めてだとは思えないほど戦い方を知っていた。

あれは知っていたんじゃない。

サバイブと、リュウガのカードがあったからだ。

サバイブはオーデインの契約モンスター、ゴルトフェニックスの一部。

リュウガは千歌。世界が変わるごとに変質してしまっていたけれど。

これは想いの戦い。

特に想いの強いものがライダーに選ばれる。

単純に、大勢より一人を想う方がその尺度は大きいはずだ。

なのに千歌はその真逆。

ライダーバトルを止めたいという願い、ヒーローという願い。

願いはあっても、想いはなかった。

決定的なのはガルドサンダーだった。

先の戦いの中で抱いた違和感。

二人とは決定的に違ったこと。

ガルドサンダーたちは、千歌を攻撃しなかったこと。

モンスターがライダーに選ばれなかった人々の想いなら、ガルドサンダーはオーデインの願いの形。

親に攻撃はしない。

黄金の羽が千歌を包み込む。

記憶が濁流のように押し寄せる。

それを一つ一つ大事にしまい込んでいく。

これまでのダイヤの頑張り、敗れていったライダーたちの想い。

そして、自分と出会う。

「よくたどり着いたね！」

当たり前だと千歌は笑う。

だって、あなたも千歌なのだから。

羽が静かに落ちていく。

中から現れたのは不死鳥を模した黄金の戦士。

仮面ライダーオーデイン。

仮面越しにモンスターたちを一瞥する。

ガルドサンダーたちは待っていたかのように千歌の元へ集まった。

「行け。」

その一言で、ガルドサンダーたちはいつせいにモンスターに向かっていった。

当然のごとく、倒すために。

「だめだよ・・・なんで・・・」

うろたえる梨子と曜を見た千歌は人差し指を立てて言った。

「相談せずごめんね二人とも。でもお話はこれが終わってから。だから一つだけ。私は高見千歌。ライダーバトル最初のオーデインだよ。」

ふたりのキモチ

千歌が従えるガルドサンダーたちとそれ以外のモンスターたちが互いを滅ぼしあう。

数は目に見えて減っていく。

例えるなら、これは……

「まるで戦争ですわね。」

武器を下ろし、じっとその様子を見つめる。

戦うことをあきらめたのではない。

戦う理由がなくなったから、ダイヤは武器を下ろしたのだ。

数はさらに減っていく。

千歌側が圧倒的優位な状況で。

そう、戦争なんてものじゃない。

梨子は首を振って否定する。

「これは、殺戮です。」

自分たちだって同じことをしていたとわかっていた。

何度も悩み、考え、その度により越えようとした。

けれどいつになっても付きまどってきたこと。

やがて曜も梨子も手を止めた。

誰も手を出さなくてもこの場は鎮まる。

「自分の実家だとは思えない有様ですわね。」

ため息をつきながらダイヤはがれきに触れた。

ダイヤの家だけではない。

今日まで共にしてきた生活のほぼすべてが失われた。

かつての内浦の姿はもうない。

モンスターがやったこと。

自分たちがやったこと。

「これじゃ、戦いが終わってもどこに帰ればいいのか。」

ただ一つ、変わらず広がる海を見つめて梨子が言う。

「ううん、きっと初めからなかったんだよ。ね、千歌ちゃん。」

曜はそう言って千歌を見た。

千歌は、笑みを浮かべていた。
せつなく、決意に満ちた笑みを。
それから、千歌は事の経緯を話し始めた。

千歌はライダーバトルに選ばれた。

ダイヤが参戦するよりも前、果南によって開かれた原初の戦いに。
とても純粹な、輝きたいという願いに導かれて。
けれど、千歌は変身できなかった。

誰かを殺すなんてことできるはずがない。
誰かの夢を踏みにじることなんてできない。

千歌はひたすら隠れて生活した。

鏡の向こう、ミラーワールドからはいつも金属がぶつかり合う音が
聞こえていた。

悲鳴と、雄たけびも。

デッキに潜むモンスターが千歌を蝕んでいたことにも、千歌は気付
かなかった。

昔から、運が悪いわけではなかった。

だからなのかもしれない。

千歌はオーデインを除く最後の二人にまで生き残った。

見つかり殺されるわけでもなく、戦い戦死するわけでもなく。

隠れ続け、生き残ってしまった。

その日も同じように隠れて過ごしていた、はずだった。

その日鏡から聞こえてきたのはいつもの金属音ではなかった。
声。

千歌を呼ぶ声。

「戦え。」

名前を呼ばれたわけではない。

性別の区別さえつかない声で、ただそう聞こえただけ。
けれどそれは明らかに千歌に向けられていた。

関係ない、変わらず隠れ続ければいい。

聞こえないふりをしてやり過ごせばいい。

そう思っていたはずなのに。

鏡を見てしまった。

倒れている鎧が一つ。

真っ赤に染まった地面に突っ伏していた。

そのすぐ正面に二つの影。

金色の鎧を着た戦士と、ポニーテールの少女。

横たわる鎧から噴き出すそれを浴びても動こうとしない。

千歌が初めて見た鏡の向こうは地獄のようだった。

耐えきれず、身体から逆流するもので口の中が酸に染まる。

こらえきれない不快感と高まる緊張。

その少女を千歌は知っていた。

毎日のように一緒にいた千歌の幼馴染。

一つ年上の優しいお姉さん。

松浦果南に間違いなかった。

果南は血をぬぐうこともなくその場を去った。

残ったのは、金色の鎧一体のみ。

気づけば、千歌はデツキをかざしていた。

ベルトを呼び出し、変身した。

すぐにその場へ向かい、前に立った。

「これは何?」

鎧は答えない。

「どうしてこんなことしたの。」

鎧は答えない。

「どうして、ここに果南ちゃんがいたの!!!」

鎧は答えない。

「答えてよ!!!」

カードを引いた。

なんて書いてあるのかはよくわからない。

ただ、それを使えば目の前の鎧を倒せることだけはわかった。

『ファイナルベント』

「今まで隠れていたのが駄目だったんだ。」

身体をめぐるすべてを右手に集中させる。

「私も戦うって決めた。」

力の溢れ出る手のひらを拳に変えて叩き込んだ。

「ライダーパンチ。」

鎧は消滅し、デツキだけがそこに残った。

それを拾い上げ、今の変身を解く。

「戦わなきゃ、生き残れない。」

元持っていたデツキを力の限り地面に叩きつけた。

衝撃に耐えられなかったデツキは簡単に砕け散った。

「こんなにもろいのに、どうしてこんなことができるんだろうね。」

そこに答えはいらなかった。

求めたかったのは一つ。

「変身。」

その掛け声と共に千歌は金色の鎧に身を包んだ。

「そう、オーデインっていうんだ。」

千歌は覚悟を決めた。

高見千歌はここで死んだ。

今の自分は仮面ライダーオーデイン。

こんなろくでもない戦いを終わらせる、その日まで。

この時に果南を殺していれば、すぐに終わっていたのかもしれない。
い。

けれど千歌は知りたかった。

どうして果南がこのようなことをするのか。

それを知ってから、倒してすべて終わらせようと決めていた。

問いへの答えはすぐに出た。

しかし、知ってしまったが故に千歌は手が出せなくなってしまう。
た。

自分が関わってどうにかなることではないと知った。

「それからダイヤさんが参戦して、私はそれを見つけて。」

「私にオーデインを譲渡したと。」

ダイヤの言葉に千歌は頷いた。

曜は千歌に問いを投げようとした。

けれど千歌がそれよりも先に話を続けた。

「私から言えるのはここまで。それから、私は果南ちゃん側に付くから。」

誰も、すぐには理解できなかった。

一番に口を開いたのは梨子だった。

「それって、つまり千歌ちゃんと戦うってこと？」

「そんなのできないよ！関係ないじゃん！」

曜も同調して抗議した。

「ううん、高見千歌は死んだんだよ。あなたたちが戦うのはオーデイン。オーデインは果南ちゃんの戦士だからね。」

ダイヤは黙ったまま聞いていた。

「鞠莉さんが今、果南ちゃんを追いかけているみたい。先に行くから。どうするか決めてね。」

そう言い残し、ゴルトフェニックスを使ってその場を後にした。

「おそらく、これが最後の戦いになるでしょう。」

ダイヤは二人に言った。

「でもそれは、私たちが戦ったらの話ですよね。」

ダイヤは黙って頷いた。

「千歌ちゃんを倒せだなんて……。できるはずがない。」

曜は膝を抱えて座り込んだ。

「もし戦わなかったら、どうなるんですか。」

梨子の問いに顔を曇らせてダイヤが答える。

「いつかはこの戦いの勝者を決めなければなりません。この戦いを終わらせるにしても、仮にあなたたちが戦いを放棄した場合、私と鞠莉さんが果南さんとオーデインの相手をするようになります。勝てば、まあ。しかし、まず無理でしょう。」

「どうしてですか？」

「あなたたち二人がサブイブを持つているからです。もしサブイブだけ私たちに渡すとしたら、結果はわかりませんが。そんな中途半端な逃げをあなたたちはできますか？」

「それは・・・」

梨子はダイヤの言葉を聞いて下を向いた。

「どちらかしかないのでは？戦うか、降りて戦いを止めずに終わるか。それもいいと思います。あなたたちの記憶はここで途切れるのですから。」

「でも、それだと千歌ちゃんは・・・。」

「そう、また果南さんと同じようにタイムベントを繰り返すでしょう。」

「ねえ、梨子ちゃん。」

顔を伏せたまま曜は梨子に聞いた。

「千歌ちゃん、私たちに助けてって言ってたのかな。」

「曜ちゃん・・・。」

「なんでも、一番先に決めることが一番辛いんだよね。私も少しぐらいはわかるから。でも千歌ちゃんは戦うって決めてた。あれだけ戦いたくないって言うていたのに。」

顔を上げてじつと梨子を見た。

「千歌ちゃんのためにも、剣を抜かなきゃダメなんじゃないかな。」

じつと目をつむり、梨子は思考を巡らせた。

けれどそれはすぐに不必要だと気づいた。

「そうね。友達、だからね。」

互いに笑みを向けた。

「決まりましたか。」

「はい、それから、ダイヤさん。」

梨子と曜はダイヤに近寄った。

「オーデインは私たちに任せてください。ダイヤさんたちはダイヤさんたちの決着を。」

「・・・ええ、必ず。」

シャイニーを探して

息を切らしながら追い続ける。

その背中を見失わないように。

世界のどこに行こうと追いかけて続けるつもりでさえいた。

一発この拳でぶん殴ってやらなければならぬと考えていた。

そのあとで自分も頬を差し出そう、そうすればすべてが解決する。

鞠莉にはそんな気がしてならなかった。

この地に来れば、なおさら。

「結局、ここに帰ってくるのね。」

見慣れた風景を横目に鞠莉は呟いた。

果南を追ったその先は淡島だった。

進む先を追うと、トンネルが見えた。

「……」

電飾で彩られた隧道の中は二人を虹色に照らす。

外の暗さも合わさって、さながら異界のようだった。

「二人はどうしたの。」

来た道を振り返り、果南が言った。

「……任せてって、背中を押してくれたわ。」

汗がにじむ掌をぎゅつと握りながら鞠莉は姿を見せた。

気付かれないように追いながらも、誘われているという感覚はあった。

この場所に来ると思っただけはなかったが。

「いつぶりだろうね、ここに来るの。」

そこは、三人にとつての思い出の場所。

いつも一緒にいたそれぞれの記憶そのもの。

色付いた電灯が形作る星々は彼女たちにとって全部が一番星だった。

思い出と想いをぐつと堪え、鞠莉は訴えた。

「戦いをやめる気は無いの?」

ストレートに聞く。

それが彼女に対して、一番だと思ったから。

「鞠莉には関係ない、何がわかるっていうのさ。」

予想していた答え。

痛む心を押さえつけた。

「全部聞いたわ。この戦いの仕組みも、オーデインのことも、タイムベントも全部。・・・果南がやろうとしていることもね。」

果南は目を見開いた。

手が震え始めた。

呼吸は乱れ、頭の中はかき混ぜられたかのようにぐちゃぐちゃになつた。

「聞いたって。ありえない、誰に。誰がそんなこと知っているっていうの!!!」

声を荒げて追及する。

鞠莉はさらに心が痛んだ。

「ダイヤよ。」

果南の動きが止まった。

沈黙の中に互いの吐息だけが聞こえる。

そのせいで、鞠莉は果南の呼吸がどんどん荒くなっていくのがわかってしまった。

「・・・そんなはずない。大体どうやって!?!私のことなんて一緒じゃなきやわかるはずな・・・」

言葉が切れた。

果南は鞠莉を見つめた。

焦りと、怒り。

瞳からはそれらが容易に読み取れた。

今、彼女の多くを占めているのが怯えだということも。

「ええ。彼女、オーデインだった。あなたに気付かれないようにしながらずっとそばにいたのよ。」

傍ににいるのに二人は孤独だった。

手を伸ばせば触れられるのに、その距離は何よりも離れていた。それは鞠莉には想像できない辛さだろう。

鞠莉自身が今抱く辛ささえも、受け止めきれないのだから。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ!!!」

髪をかき乱し、頭を振り払う。

トレードマークのポニーテールはほどけ、乱れた髪から覗く果南の表情を鞠莉はあまり見たくなかった。

自分だつてシヨックだつたと言おうとしたがそれは遮られた。

「じゃあ何!? これまでの戦いは無駄だつたつていうの!? 救うつもりが
ずつと傷つけていたつていうの!? ふざけてる、そんなのふざけてる
!!!!」

言葉にすらならないまま果南は叫んだ。

「・・・そんなはずはない。オーディンは私の分身。そうだよ。ここで
確かめればいい。来い、オーディン!!!」

呼び声と共に、金色の羽が吹雪く!!!

羽の吹雪の中から現れたオーディンは考える間なく鞠莉に襲い掛
かった。

「変身・・・!」

即座に王蛇へと変身してオーディンの攻撃を防ぐ。

「ほら・・・! ダイヤじゃないじゃん!」

「なんで、どうして攻撃なんか・・・。」

オーディンは何も言わず鞠莉に攻撃を続ける。

鞠莉はダイヤの名を何度も叫ぶが、防御をやめることはできなかつ
た。

「誰から聞いたのか知らないけれどこの世界もダメだつたつてことだ
ね。勝者が決まればまたタイムベントで・・・。」

果南が怯えながら発した言葉は別の人物によって遮られた。

「鞠莉さんーしゃがんで!」

言葉のまま反射的に鞠莉がしゃがむと、その頭の上を剣が斬った。
ギリギリのところでのその斬撃を防いだオーディンは引き下がり果
南の横に付く。

「鞠莉さん、大丈夫ですか。」

鞠莉は立ち上がり、状況を把握した。

剣がナイトのものだということも分かった。

「梨子、ありがとう。助かったわ。」

ナイトの後ろには龍騎がいた。

「あれは千歌……？」

確かめるように鞠莉は梨子に尋ねた。

その答えは、梨子ではない人物から返された。

「その龍騎は曜さんです、鞠莉さん。」

トンネルの入り口から姿を見せたのはダイヤだった。

「ダイヤ!?なんであなたがそこに……。じゃああのオーデインは……。」

「鞠莉さん、オーデインは私たちが引き受けます。ダイヤさんと一緒に果南さんを。そして、決着を。」

梨子の横に並び、曜が言った。

声を聴き、曜であることが事実だと知った鞠莉はうろたえながらも頷いた。

ある程度、察しがついてしまった。

プロセスはどうであれ、今のオーデインが誰なのか、二人が請け負ったことで鞠莉は予想が出来てしまった。

どこまでこの戦いは残酷なんだと、心で嘆きながら。

トンネルにはダイヤ、鞠莉、果南の三人が残った。

梨子と曜はオーデインとの戦場を外へと移した。

「あのオーデインは千歌さんです」というダイヤの言葉で三人の会話は始まった。

「千歌が？あの子はライダーだった、何をしたの。」

落ち着いたのだろう、果南の表情からは怯えが消え視線は鋭くダイヤをにらんでいた。

「それは千歌さんから聞いた方が早いでしょう。ただ、これは言わなければなりません。私はオーデインとしてあなたといた、これは事実です。」

果南の指先がピクリと動いた。

「……仮にそうだったとして、私のやることは変わらない。ずっと見

てきたならわかるでしょ。タイムベントすればまた初めから。ダイヤもね。オーデインが千歌ならいつそ私が変身してしまえばいいいや、そうすればよかった。次からは……。」

「次はありません。」

遮るようにダイヤが言う。

「私が、鞠莉さんが、あなたをここで倒す。」

「ええ、ここで終わりよ果南。」

ダイヤはオルタナティブ、鞠莉は王蛇のデッキをそれぞれ構えた。

「私は倒れない、私は願いつけるの。わかってくれなかったとしても
!!!」

「変身」

王蛇、オルタナティブ、アビス。

朽ちた友情の明かりに照らされて、決戦が始まる。

最後の一日

「あの三人がこうして思いをぶつけながら戦うのは、これが初めてなんだよ。」

千歌は二人にそう言った。

「じゃあ、この世界は果南さんが探していた世界なの？」

梨子は落ち着いた声で返した。

千歌はトンネルから聞こえる音を気にしながらそれに答えた。

「どうだろうね、もしかしたら果南ちゃんはそう思っているのかもしれない。でも……」

トンネルから聞こえる音は止むことなく、それが戦いの激しさを伝えていた。

「でも、今の果南ちゃんは壊れている。」

それが間違いでないと確信した声で曜は言った。

千歌もそれに頷く。

戦う三人の雄叫びが外までとはつきりと聞こえていた。

「一度戦ったんだ、もう負けない！」

果南はダイヤの攻撃をかわしながら隙を伺っていた。

果南は以前の戦いでオルタナティブへの対策を整えていた。

明らかに負担のある超スピードや攻撃の数々。

それらをこなせるのは時間制限があるからだ気づいていた。

鞠莉が参戦しているも果南の優位は変わらない。

これまでの世界で王蛇の動きは何通りも見てきた。

想定外が来ない限り、対策できないことなどなかった。

「前から思ってたけど……何なのこの馬鹿力……！」

的確に襲い掛かる果南の剣はすさまじい威力を帯びていた。

追い打ちをかけるように果南はカードを引いた。

『ストライクベント』

右手にサメの頭を模した武器が現れる。

果南はそれを二人に向けた。

「くらえ」

右手に装備された頭から水流が発射される。

サメの形をして放たれた高圧水流が二人に襲い掛かる。攻撃を受け、二人がひるむ。

果南はその隙を逃さなかった。

脚に力を込め、勢いよくダイヤに飛び掛かる。

空中で剣を振りかざし、降下の勢いそのままに剣を下ろした。

剣はオルタナティブの鎧を越え身体を斬る。

果南は勢いそのままにオルタナティブのデッキを破壊した。

声も出せないままダイヤは倒れた。

ぼたぼたと流れるものが鞠莉の視界に入った。

「・・・やめて。」

『アドベント』

カードを引き、読み込ませるその右手は震えていた。

ただ一つの単純な感情、怒りで。

「許さない・・・!!!」

召喚したのはベノスニーカー。

鞠莉が指示を出すと、ベノスニーカーは果南に巻き付き身動きを封じた。

慌てる様子のない果南は鞠莉に言った。

「許さない？鞠莉だって似たようなものだよ。鞠莉だけじゃない、みんなそう。誰も許されない。」

「違う!!私はただ、果南とダイヤを・・・!!」

「だから、一緒だって。」

鞠莉がそれに気付いた時にはすでに遅れていた。

果南は笑いをこらえるような声で言った。

サメが海から来るとは限らない、と。

言葉通りそれは鞠莉の背後、地面の中から現れた。

それは手に巨大な刀を持っていた。

サメ歯状の刃が鞠莉の背中を襲った。

鞠莉が倒れたのを確認した果南は軽々とベノスニーカーの縛りを

ほどこぎ地面に降り立った。

「またダメだったね。」

倒れる二人に向かって言う。

返事など期待していなかった。

背を向け、トンネルの出口に向かう。

「待ちなさい。」

足を止める。

声がすると思っていなかった果南は反射的に振り向いた。

それは果南にとって予想外の出来事だった。

口から、身体から、全身から流れ続ける血を無視してダイヤが立っていた。

「勝負は、まだ終わっていません。」

それが何を意味するのか果南はすぐに察した。

普通の人間であれば命はないほどの傷を負いながら立っている。

果南が知らなかったオルタナティブのデツキは確かに壊れている。

「イレギュラーが多すぎるね、この世界は!!!」

言葉を吐き捨て、剣を持ち直してダイヤの元へ勢いよく駆け出す。

ダイヤはゆっくり目を閉じた。

呼吸をすれば肺が痛む。

視界を動かせば目が痛む。

何をしなくても、全身が痛む。

一番痛いのは、心。

「変身!!!」

果南が振りかざした剣をダイヤは右の腕のみで受けた。

ダイヤにダメージはない。

右腕は黒と金色の鎧で覆われた。

剣を右で抑えたまま、左の腕を果南の腹部に打ち込む。

左腕も同様に鎧で覆われた。

攻撃にひるみ体制を崩した果南に向かって今度は右足がキックを入れた。

右の足が鎧で覆われた。

その勢いを生かして左も打ち込み、鎧が覆った。やがてダイヤの全身が黒と金色の鎧に包まれた。距離を取り、体制を整えながらその姿を見る。龍騎と同じ姿、けれど違う。

果南は舌打ちをして言った。

「また私の知らないライダー？」

「ええ、確か曜さんは“リュウガ”と名付けていましたっけ。」

良い名だと思った。

右手ではなく、牙となる。

守りたい者に近寄るすべてをかみ砕く牙に。

「ならば私はこう名付けましょう。“リュウガサバイブ”と。」

『サバイブ・・・オーデインの力。』

「正解ですわ。でも、私だけではありません。そうですよね、鞠莉さん。」

呼びかけに答えるように、鞠莉が立ち上がる。

「ええ・・・正直ホントに死ぬと思ったけど。」

「まだやられてなかったの。」

果南が不機嫌そうに言う。

「あなたを倒すまで、くたばれないわよ。」

言葉と共に、鞠莉の召喚機の形が変化した。

『サバイブ』

「サバイブ、渡したんだね。」

千歌は二人に言った。

「ええ、決着の手助けになればと思って。」

梨子が言う決着は二つ。

あの三人の戦いと、この戦いすべて。

千歌も曜もそれをわかっていて。

わかったうえで、千歌は聞いた。

「決着ってことは、梨子ちゃんも曜ちゃんもその覚悟はあるってこと

だよね。」

戦いの決着。

ライダーバトルの勝者を決めること。

龍騎とナイトをそれぞれ所持する二人は正規のライダーバトル参加者であるといえる。

最後の一人になるということはすなわち、今隣にいる人をも討たねばならない。

梨子と曜は仮面越しに見合った。

それぞれ、想いは決まっていた。

「心はもう決まってるよ。千歌ちゃん。あなたを討つ覚悟もね。」

梨子も頷いた。

「そう、それなら問題はないね。オーデインと戦う条件はただ一つ。それもわかるね?」

二人は頷いた。

「決まるまでここから姿を消すよ。それが合図。」

二人は頷いた。

「戦わなければ生き残れないなんて、残酷すぎるよね。」

二人の反応を見るより先に千歌は続けた。

「戦え。」

オーデインは二人の前から姿を消した。

いた場所に金色の羽が舞い散っている。

最後の1枚が地に落ちる。

龍騎とナイトは戦闘を開始した。

おやすみなさん！

つい最近まで通っていた、自分の学校。
人数は多くないけれど、それでも人の声が絶えない明るい学校だっ
た。

それが今はどうか。

聞こえるのは外から響く怪物の雄叫び。

それ以外の音はなかった。

水道の蛇口から落ちる水の音が聞こえるぐらいに静かだった。

歩みを進める。

足音が廊下中反響する。

目的の扉の前にたどり着き、花丸は足を止めた。

「……」

理事長室と書かれた標識が目に入る。

覚悟をして扉を開く。

辺りに注意しながら室内を見渡した。

「……見つけた。」

探していたものは、理事長のデスク後ろに隠されていた。

人がちようど入るぐらいの大きな箱が三つ。

腰を下ろし、その一つに手をかける。

中に何があるのかは想像できた。

それを守るためにここに来たのだから。

上蓋を外し、中をそつと覗き込む。

「やっぱり……」

中には人がいた。

冷静さを何とか保ちつつ、その口元に手をかざす。

小さな吐息を手のひらに感じた花丸は蓋を閉じて立ち上がった。

「花丸ちゃんが来たんだね。」

今まで誰もいなかった部屋に、何かが現れた。

それが何なのか花丸はすぐわかった。

「オーデイン……」

思えば、その姿を見るのは初めてだった。けれどそれよりも気になったのはその声。

オーデインの変身者はダイヤだったはず。それを知ったから、今花丸はこうしている。

しかし、今の声はダイヤとは明らかに違った。

花丸の記憶の中で合致するその声の主は……。

「私が誰か気づいてるんだね。」

オーデインはそう言うと言おうと変身を解除してその姿を見せた。

「千歌さんがどうしてオーデインに変身してるんです。」

「うーん、話せば長くなるんだけど。私もオーデインだった、じゃダメかな。」

「今はそれでいいです。それで、おらに何か？」

千歌は窓の外を指して言った。

「ソレから守るためにここに来たんだよね？」

窓の向こうには多くのモンスターが群がっていた。

あるものはガラスを割ろうと引っかけ、あるものは壁ごと破壊しようとしていた。

「だったら、どうするんです。」

「花丸ちゃんが持つてるそれはイレギュラーの一つだからね。ライダーバトルには何にも関係しない。だから私も関わらなくていいんだけれど。」

「だったら、ここに来る理由は何も……。」

「もうすぐ、ライダーバトルが終わる。」

言いかけた言葉が何であったか、花丸は思い出せなかった。

窓が今にも割れそうな音を発している。

「それでも、おらがやることは変わらない。」

「花丸ちゃんが何もしないでも未来が決まるのに？」

「そうずら。ライダーバトルの敗者がどんな道をたどるのか知ったらなおさら。」

それを聞いた千歌の視線は花丸の後ろにある箱に移っていた。

「ライダーバトルで人は死なない。その代わり、負ければ意識を失い

戻ることはない。願いを奪い取るにはそれが一番だから。」

「そうして最後の一人になるまで戦いを続け、意識を失った戦士から取った願いの力で次の世界へ向かう、それがこの戦いの全部だよ。」

「意識を失った人はモンスターからも襲われる。おらはこの人たちをそれから守りに来たずら。」

「・・・今までは鞠莉さんが守っていたんだね。」

戦いの真相を全員が知るより前。

先に脱落した三人のライダー。

鞠莉は果南が倒したと話していた。

鞠莉は意識を失った三人をかくまっていた。

敗れた者がどうなるのか知っていたわけではない。

守らなければいけないと感じたから、守っていた。

誰かがそれを知ることはない。

大切な友を傷つけようとも、鞠莉の根底はずっと変わっていないなかった。

窓が割れる。

壁が壊れる。

モンスターたちが流れるように部屋に入ってくる。

「なら、今度はおらがこの人たちを守るずら。」

花丸はデツキを敵に向け、ベルトを出現させた。

通常のライダーとは異なる形をしたベルト。

それにデツキを差し込んで、花丸は叫んだ。

「変身!!」

「ダイヤさんに黙って持つてきちゃったんだけどね。」

善子は苦笑いしながら花丸の手にそれを置いた。

「もし帰れないようなことがあったとき、あなたただけでもと思って持つてきたの。鞠莉さんは別のものを借りてたんだし、いいわよね。」

渡されたそれを持つ手に、今度はルビイがそつと手を置いた。

「ルビイも背中を押すよ。花丸ちゃんならきつとできる。戦いに送り

出すなんて・・・とは思うけど、それでも！」

目には涙が浮かんでいた。

「それでも、後悔しているのなら行ってきて。帰ってきたら今度は三人で遊ぼう。」

想いを込めて。

花丸の背中を二人は強く押した。

姿が変わる。

かつてダイヤが変身した姿と同じ。

それでいて少し違う、いわば試作機。

その姿の名をそつと呼ぶ。

「オルタナティブ・ゼロ」と。

「二人が背中を押してくれたんだから。最後ぐらい、ルールテラーらしい仕事をするぞら!!！」

『アクセルベント』

「そう、花丸ちゃんの願いはもしかしたら叶ったのかもね。」

千歌はオーデインに再び変身し、数体のガードサンダーを呼び出した。

「行け。」

ガードサンダーたちは千歌の指示を受け、モンスターたちと戦闘を始めた。

「千歌さん・・・？」

不思議そうにする花丸に千歌は言った。

「その人たちはね、私の大切な友達で、守れなかった人たちなんだ。だから、せめてこれぐらいはね。」

そう言い残し、千歌はその場から消えた。

ガラスの幸福

剣と剣がぶつかり合う。

腕で受け止めた時には声も漏れないほどの痛みが全身を駆け巡る。彼女たちのすぐ傍では、それぞれが召喚したモンスターたちが同じように戦っていた。

「まずい……。」

ダイヤは今いるトンネルがもたないのではないかと危惧していた。今もぱらぱらとコンクリートが落ちてきている。

このまま戦っていれば、崩れるのは時間の問題だった。

今の体力のまま崩落に巻き込まれれば無事では済まない。

そんな事は容易に想像できた。

それよりも……

「崩れてしまう前に……。」

そこが崩れてしまうことを防ぎたかった。

そこは三人の思い出の場所。

戦いが終われば、また三人で来ることが出来る。

こんなつらい思い出さえも、きっとここなら上書きしてくれる。

そう、信じていたから。

仮面の下、果南の口元が笑う。

「ここはもう狭いよね。」

果南が指示を送ったのだろう。

アビスの指揮する二体のモンスターが先頭から離脱し、壁を駆け
る。

それらは自分らが巻き込まれることなど考えず、ただひたすらに壁
や天井を破壊し始めた。

弱っていたトンネルにとって、それは崩れるには十分すぎるほどの
ダメージだった。

「やばいーダイヤ、外へ!!!」

「でも……!」

今更何ができるわけでもない。

鞠莉の言葉に従うように、足に力を込めて走った。二人が外に出たそのすぐ後。

大きな音と砂煙を立て、思い出はがれきになった。結局こんなものだったのだろうか。

ダイヤはその場で膝をついた。

戦いも、想いも、これからもすべて。

こうやって崩れてなかったことになってしまおうのだろうか。

「そんなことない！」

鞠莉が否定する。

ダイヤが何かを言ったわけではない。

それでも、今何を考えているのかぐらい想像することは鞠莉にとつて容易だった。

見上げるダイヤの頭にポンと手を置き、鞠莉は言った。

「今までの辛いことは必ず次の希望になる。私が想像できないぐらいに踏ん張ってきたんだから。」

「鞠莉さん……。」

「ダイヤが信じないのなら私がそれを叶える。だから立つて。」

差し伸べられた手にダイヤはさすが。

今まで、鞠莉にこんなこと言われなかった。

確かに世界は変わっている。

ここでくじけてはそれこそすべてが無駄になる。

決めたじゃないかとダイヤは自分を叱る。

ここですべて終わらせる、と。

「……もう大丈夫です、ありがとう鞠莉さん。」

鞠莉はにやりと笑い、がれきに向かって言った。

「だからそのためにも、あなたをぶん殴ってやる。」
がれきから果南が姿を見せる。

「邪魔なものはないなくなった、さあ、決着だよ!!」

『ストライクベント』

アビスのモンスター二体が近づき、融合する。

一つになり、肥大したモンスターが生まれた。

「ふざけないでよ!!!」

『ユナイトベント』

梨子のライア、ルビイのガイ、鞠莉の王蛇。
それぞれのモンスターが一つに融合する。

「ジェノサイダー。私の切り札よ。」

ジェノサイダーと呼ばれた合成獣が咆哮を上げる。

「私が奪い取ったみんなの意志、食らいなさい!!!」

合成獣と合成獣がぶつかり合う。

同じくして、彼女たちもにらみ合った。

「今度こそ、果南を止めて見せる。」

「果南さん、覚悟は良いですか。」

果南は声を上げて笑った。

「何を言うかと思えば。私だって失った時間を取り戻すために頑張ったんだ、倒れないよ。あなたたちを殺してでも救う。」

『『ファイナルベント』』

「ドゥームズデイー!」

ジェノサイダーの腹部にブラックホールが出現する。

鞠莉はそれめがけて果南を蹴り込もうとした。

しかし、果南の合成獣がそれを正面から受ける。

その突撃を食らいながらも鞠莉はそれをジェノサイダーへと誘導した。

鞠莉は攻撃に耐えられずその場に倒れた。

互いの力と力がぶつかり合い、互いに消滅する。

「後はダイヤ・・・何!」

両腕を固定する形で、鞠莉は後ろから果南を取り押さえていた。
「いけええええええええ!!!ダイヤ!!!」

果南がそれに気付き、曇る空を見上げる。

暗い雲を背景にドラグブニツカーがダイヤを乗せて飛んでいた。

「ああああああああああ!!!」

ドラゴンライダーキック。
かつて龍騎に変身していた時に使用した技を、果南にぶつける。
鞠莉は仮面の下で笑いながら、決して果南から離れなかった。

決めていたことだった。

戦いの始まりである果南と戦って、二人共に無事でいられる可能性はなかった。

淡島に向かう前に鞠莉はダイヤに話していた。

何かあれば、自分ごとやっつけてしまえ、と。

もちろんダイヤは拒否した。

けれど鞠莉の意志は固く、最終手段として受け入れさせた。

「頼んだわよ」とだけ言っただけ。

勢いで飛ばされた二人の体は別々に倒れていた。

ダイヤが鞠莉の元へ急ぐ。

王蛇のデツキが砕けて散らばっている。

ダイヤは震える声で鞠莉の名を呼んだ。

「鞠莉さん！答えてください！」

かすかに動いた瞼をダイヤは見逃さなかった。

「サバイブ……なきや……やばかったな……」

風に消されそうな子細い声で鞠莉が言う。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

傷口がふさがっていく。

反対に、鞠莉の意識はどんどん遠のいていった。

「すごいな……。やっぱり死なないんだね……」

「今ならまだ……。！そうだ、オルタナティブの試作機が！」

ダイヤの言葉を最後まで鞠莉が聞くことはなかった。

「ああ……鞠莉さ……」

名前を呼ぼうとしたとき、腹部に違和感を感じた。

触れると、異物に触れた。

それが剣であると認識したときにはダイヤの意識は消えていた。

「……」

果南は剣を引き抜き、そして自分も目を閉じた。

残されたのは傷が癒えていく三人の身体。

そこに魂はない。

その時代のデツキは砕け、他のものは消えてなくなった。

残るライダーはあと二人。

友情ヨーソロー4

呼吸が追いつかない。

息をすることすら忘れると言うが、忘れたくて忘れていたのではない。

酸素を取り込もうと意識をそちらに向けては、負ける。他の動作などしている暇がないのだ。

肺が無くなるのではないかとすら思う。

肺だけじゃない。

身体の全てが限界を超えそうだった。

それでも2人は剣を振るう。

最後の1人になるために。

2人の剣が止まる。

同じ異変を察知したらしい。

それについて言葉にする前に、思い切り肺を膨らませた。

ヒュウと音がした気がした。

曜は穴が空いているのかもしれないと思ったが、それは笑えない冗談だと思言わなかった。

代わりに、気づいた異変について梨子に投げかけた。

「モンスターの鳴き声が止んだね。」

梨子もそれに同意する。

「ええ、パタリと。あれだけひっきりなしに鳴いていたのに。」

それまでずっと耳を支配していた、鼓膜を切り裂くような雄叫びがさっぱり消えたのだ。

それが意味することに、2人は気づいていた。

「果南さんが脱落したのね。」

「誰もこちらに来ないと言うことは、3人とも……。」

沈黙が続く。

久しく経験していなかった全くの静寂。

ひどい耳鳴りをかき消すように、梨子が言った。

「あとは、私たち2人。」

「どちらかが、オーデインと戦う。」

答えて、今度は曜が聞いた。

「梨子ちゃん、何を願うの?」

「ライダーバトルの消滅よ。」

梨子はすぐに答えた。

「本当に?」

仮面越しの曜の視線は決して鋭いものではなかった。

けれどその質問は確かに梨子を動揺させた。

「・・・どういう意味?」

「言葉の通りだよ。本当にそれが梨子ちゃんの願い?もっと他にあるんじゃないの?」

「・・・どうしてそう思うの?」

それは、梨子が誰にも言わなかった最後の謎。

それを曜は知っているかもしれない、梨子はそう思った。

知っていたところで作ることに変わりはない。

曜を倒してライダーバトルを終わらせる、ただそれだけ。

けれど高校二年に進級したばかりの少女は悩んでしまう。

迷ってしまう自分が怖い。

それならば、いつそ自分が負けて曜に権利を渡した方が良いのではないかと考えてしまう。

「答えるまでもないと思うけど。」

当然のように曜は返す。

梨子は確信した。

曜は秘密を知っている。

また、曜も同じくして確信を得た。

梨子が隠していることではなく、もっと別のこと。

この戦いの結末を。

「・・・ごめんなさい。ここまで来たのに、私、まだ決められないの。自分のことを考えてしまうの。」

消えてしまいそうな声で梨子は言った。

助けを求めているような細かい言葉を曜は噛みしめるように聞い

ていた。

「私が梨子ちゃんの立場だったら、悩まないと思う。」

きつぱりと言った。

どうして？と聞く梨子に曜ははつきりとした声で答える。

「残念だけど、私だから。どちらを選ぶかはわからないけれど、これ以上私は悩めない。もう十分悩んだから。そんなに器用じゃないんだよね。」

仮面の下で曜は笑っていた。

「でも、そうだね。だからこそ、こうして私も決めることができた。」
言葉を並べ終わると、曜は手に持っていた剣の先を自分のデツキに当てた。

大きく息を吸う。

梨子が慌てて何かを言っているのがよく耳に届いた。

それだけで十分だったのかもしれないと曜は思う。

元々、牙となった自分がそれを向けることはできなかつたのだ。

心を決めた曜は目を瞑る。

龍騎の剣が、自身の身体を貫いた。

同時刻、浦の星女学院。

あれだけいた敵が全て消えた。

途方も無い戦いだと思っていたのに、あっさり終わってしまった。

花丸は変身を解き、その場に横たわった。

同時に、デツキは粉々に砕けてしまった。

元々試作機であるこのデツキがここまで堪えたのだ。

十分すぎる成果だと花丸は納得する。

「今度は、守ることができたずら。」

顔を横にし、保管されている身体を視界に入れる。

自分の戦いはここで終わる、そう思った。

敵が消えた理由はすぐにわかった。

千歌が戻ってこないことから、あちらもじきに終わると予測もできた。

勝者は何を願うのだろう。
今の自分なら何を願うだろう。
勝者が何を願っても受け入れよう。
花丸は、自分の今の願いを考えながらしずかに目を閉じた。

目の前の光景が理解できずにいた。

梨子は必死に考えを巡らせる。

しかしいくら考えても、現状は単純で複雑だった。

『曜が自ら脱落した。』

ただそれだけの事実なのに、到底受け入れられなかった。

「曜ちゃん！曜ちゃん！」

必死に叫ぶ梨子に曜が返事をする。

「そんな・・・叫ばなくても・・・」

「どうして！これなら私が・・・！」

「オーデインを倒すことができるのは、梨子ちゃんだけだって、自分もわかっていたでしょ？」

「・・・どういうこと」

「答えはもう見えてるはずだよ。」

曜の声が消えていく。

曜の身体を起こし、梨子が必死に名を呼ぶ。

残された力を曜は言葉に乗せた。

「きつと、たった一回頬にぶつけてやればそれで良かったんだよ。ちやんと言葉にすれば良かったんだよ。ただそれだけ。こんな力、元々必要なかったんだ。」

腕にかかる重みが増す。

それは、曜の意識が消えたことを意味していた。

抱えていた上半身を梨子はそっと下ろした。

言葉が見つからない。

見つかるはずがない。

それでも、現実には梨子に突きつける。

桜内梨子が最後のライダーであると。

「正直、なんて言ったらいいのかわからないや。」

千歌の声でした。

今更目の前に突然現れるぐらいで驚きはしない。

「・・・決めたわ。」

力強く梨子が言う。

「オーデイン、あなたを倒す。」

「叶える願いは変わらない?」

「いいえ。私の願いはライダーバトルの消滅でも、戦いを終わらせることでもない。」

「?じゃあ何を・・・?」

「ライダーバトルに関係した世界すべての消滅よ。」

千歌の口元がニヤリと笑う。

春先に不釣り合いの冷たい空気が2人を包む。

「さすが、この世界のイレギュラーだね。」

A q u o r s ☆ H E R O E S

初めて出会った時のこと。

この世界の「高海千歌」がどれだけ嬉しかったか、きつと梨子は知らない。

戦いの厳しき、己の甘き、他にもいろんなことを教えてくれた。

厳しいことも言われた。

それでも友達としていてくれた。

梨子は千歌に救われた、そう言っていた。

千歌にとってもそれは同じだった。

けれどそれは「私」ではない。

死ぬことのないこの戦いで、こみ上げる気持ちを殺す。

「はあ・・・はあ・・・」

漏れる呼吸は梨子のもものだった。

攻撃が当たらない。

ナイトは剣を必死に振るうが、オーデインの身体には傷一つつかない。

かろうじて拾い上げたサバイブも、使う隙を与えてしまえばそれで終わってしまうそうだった。

嘲笑うでもなく、ただ第三者が観戦しているかのように千歌は躲す。

「まだ、届かないよ。」

そう言つて右の拳に力を込め、梨子の腹部めがけて叩き込んだ。

およそ人間のものとは思えない声を漏らし、梨子は倒れた。

反動でナイトの変身が解ける。

「まだ・・・私は・・・！」

爪が剥がれていくのも気にせず、地を必死で掴み立とうとする。

その様子を見て千歌は言った。

「・・・立てるようになるまで、あなたについて答え合わせをしようか。もう気付いていることだらけだろうけど。」

「そんなもの・・・もう！」

「いらない？そんなこと言わないで。梨子ちゃんの知らないこともきつとあるから。」

オーデインの変身が解ける。

表情は変えないまま、千歌は必死になっている梨子に語りかけた。「あなたは本来であれば、ライダーバトルに関わるどころか、ここに来ることすらあり得ないはずの存在。リュウガやアビス、オルタナティブがライダーバトルのイレギュラーと呼ばれるなら、梨子ちゃんはこの世界そのものにとってのイレギュラー。」

梨子の口から出るのは立ち上がりとう力を込めるたびに漏れる嗚咽。

「桜内梨子という異端がライダーバトルに変化をもたらした。その結果、このライダーバトルではイレギュラーが生まれ、結果として負けるはずのない果南ちゃんが戦いに敗れた。そして最後に一人、あなたが残った。」

梨子に視界は無かった。

目の前で話しているのが本当に千歌なのかさえ怪しい。

それでも梨子は口の中の血を吐き出し、立ち上がろうと努力した。

「曜ちゃんが気付いていてダイヤさんたちが気付いていなかったのは認識の違い。曜ちゃんは自身がイレギュラーとなるつもりだったから気付きやすかった。けれどダイヤさんたちは、イレギュラーのライダーがいるからだろう、と逆の解釈をしてしまったんだよ。」

そこまでは梨子も気付いていた。

けれど、一つだけ、どれだけ考えてもわからないことがあった。

「どうして・・・どうして私だったの・・・」

「運命なんて、そんなものでしょ？」

「・・・そうね。」

よろけながら、梨子が身体を起こす。

力をどこかに入れようとすると舌を噛んで痛みを紛らわせた。

口からドボドボと溢れる。

鉄の味か、砂利の味か、曖昧なその感覚も捨てて立ち上がることに集中した。

「私は・・・あなたを倒す・・・関わった全ての世界を消す・・・それから・・・」

二本の脚で地面を感じる。

不安定な上半身をしっかりと支え、顔を千歌へ向けた。

「それから・・・あなたたちと生きる!!!」

全身から絞り出した叫びに反応するように梨子の周りを疾風が包み込む。

己の弱さが招いた結果だと悔やみ、そしてそれを乗り越えるために。

「変身!!!」

ナイトサバイブが剣を天に突き刺した。

『あなたたち』、か。』

千歌はそう言うと、ナイトサバイブへと接近した。

視界になんて頼らない。

聴け、感じる。全てを研ぎ澄ませ。

たった一回、一撃でいいのだから。

オーデインは拳を固め、ナイトサバイブのベルトめがけてそれを撃ち込んだ。

『ストレンジベント』

そのカードは、最期に曜が渡していたものだった。

何が起るのかわからないカード。

どうしてこのカードだったのかその時は理解できなかったが、今ならわかる。

これは、奇跡を起こすカードだ。

カードはフリーズベントに変化した。

オーデインが冷気によって動きを封じられた。

「はあああああああ!!!」

ナイトサバイブの剣がオーデインをデツキごと貫通した。

オーデインの変身が解ける。

千歌はその場に膝をついた。

「避けるつもり無かったんでしょっっっ」

梨子が変身を解いて言う。

「さあ、どうだろう。」

千歌の声は、明るかった。

千歌がどんな顔をしているのか、梨子には分からなかった。

「おめでとう。あなたがライダーバトルの勝者だよ。」

「ねえ、消えるの？」

梨子はそんな気がしていた。

「うん、元々鏡の中にいたからね。だからその前に。」

千歌は身体を引きずりながら梨子の元へと寄り、手を取った。

「ありがとう。やっと私は倒された。」

千歌の手の温もりが消えていく。

梨子はそれを逃さないように強く握りしめた。

「最後に聞かせて。千歌ちゃんは、ダイヤさんに何をお願いしたの。」

千歌は驚き、そしてこみ上げる感情を必死に抑えながら答えた。

それを聞き、梨子はうなづく。

「どこかの世界で、最後のそれは私たちで叶えましょう。」

梨子は残った。

数日間に及んだライダーバトルの勝者として。

「戦いが起こった、全ての世界の消滅を。」

願いは世界に受諾された。

消えゆく意識の中で梨子は笑う。

千歌はこれを狙っていたんだと気付いたから。

最初から、そのつもりだったのだろう。

そう思うと、笑えてきた。

意識はそこで途切れた。

『3つ、お願いしてもいい?』

「ええ、なんでも。」

ダイヤは千歌の願いに応えた。

『ひとつ、オーデインを他に誰にも渡さないで。』

『ふたつ、私をライダーバトルへ参加させて。記憶はなくて構わないから。』

『みつつ、私もやりたいな。』

「何をですか？」

ダイヤは分からぬまま聞き返した。

『スクールアイドル。みんなで。』

「そうですね。全部終わったら、みんなで。」

リバイブ①

ほのかな潮の香りと優しい日差しが朝を告げる
頬に紙の感触

背の低いテーブルには飲みかけの紅茶が置かれたまま
少し伸びをして立ち上がる

「そのまま寝ちゃったんだ・・・」

桜内梨子はそうつぶやくと、ゆっくりと立ち上がった

座ったまま寝たからだろう、身体が固くなっているのを感じる

「千歌ちゃん起きて、朝だよ」

寝起きの声のまま、同じように目の前で寝ている高海千歌を起こす
梨子と同じように机に頭を預け、うつぶせに寝たまま動かない
このままそつとしておこうかとも考えたが、そうはいかない

梨子は部屋に飾られた壁掛けカレンダーを見る

赤い丸で囲まれた日付が目に入る

「仕上がるかしら、曲」

溜息をつこうとしたがやめた

幸せが一つ、逃げるような気がしたから

すっかり冷めてしまった紅茶を一気に飲み干す

お世辞にもおいしいとは思えなかったが、目は覚めた

「千歌ちゃん、曲、仕上げなきゃ」

「はっ!!曲!!」

背中が逆方向に曲がるんじゃないかと思うぐらいの勢いで千歌が
身体を起こす

あたりをしばらく見渡した後、千歌は梨子に言った

「梨子ちゃん、おはよう!」

「おはよう、じゃなくて曲。もう時間ないんだから」

「そっだ曲!!仕上げなきゃ!」

梨子と千歌はスクールアイドル活動をしている

正確には3人

渡辺曜を合わせた3人でスクールアイドル活動をしている

している、とはいえ始めたのはつい最近で、
今後部員を増やすために近くライブを企画していて、
3人で行う最初のライブ、気合が入るものの肝心の曲が出来上がら
ず

この日も学校おわりと翌日の休みを利用して千歌の家で泊りがけ
の会議を行っていた

「楽しみだね、ライブ」

その笑顔に嘘はない

「ええ、そうね」

梨子も気持ちは同じで、だからこそ不安だった

千歌が飲み物を持ってくるといって席を立つと、梨子のかばんのそ
れに目をやる

視線の先にはあるのはカードデッキだった

戦いは終わった

梨子が勝者となり、願いが受諾されて世界はリセットされたはず
だった

目が覚めて、広がった世界ではライダーバトルなど存在しなかった
千歌も曜もごく普通の日常を過ごす女子高生になっていて、かか
わった他の人物にもその気配はない

ただ一人、梨子を除いて

梨子だけはライダーバトルのことをすべて覚えていた

覚えていただけじゃない

戦いに必要なカードデッキが、手元にあった

かつての世界でライアと呼ばれた赤みがかったそのデッキケース
は、戦いのときのものであるとすぐに分かった

あの戦いは無意味だったのか

誰もが傷ついた最悪はまた繰り返されるのか

目が覚めてからしばらくは考えては絶望した

けれど、戦いが始める様子はなかった

鏡から音は聞こえず、ほかにライダーがいる気配もなかった

それだけじゃない

この世界で、千歌の最後の願いが確かに叶えられてた

千歌は自分からスクールアイドルをすると発起し、

梨子と曜を巻き込む形で前の世界の夢をかなえた

かつてスクールアイドルをしていたらしい、黒澤ダイヤも松浦果南も小原鞠莉も賛同してくれた

後輩となる新入生、津島善子と国木田花丸もライブを見に来てくれると言ってくれた

梨子に記憶があり、デツキが手元にある

そのことを除けばこの世界は千歌や梨子が望んだ世界そのものだった

だから、明日戦いが始まるかもしれないという不安を抱えながら、梨子は誰にも言わず日々を過ごしていた

自分が隠していれば、この日常は幸せなのだから

時間が流れ、曲が完成した

やることはすべてやり、ライブ前日の夜

梨子はダイヤに呼ばれ黒澤邸へと出向いた

「忙しいときにすいません」

ダイヤは梨子を部屋に案内しながら言った

「いえ、やれることは全部やれましたし。それより話って何ですか？」

あまり長居するのもよくないだろうと、梨子は本題を切り出した

ダイヤの表情が真剣なものに変わったのに気付いた梨子は、嫌な予感と聞かなければよかったという後悔を覚えた

「馬鹿な質問だと思われるかもしれませんが・・・」

ダイヤは一呼吸おいて、梨子に質問した

「鏡に、何か心当たりはありますか？」

「・・・どういうことですか？」

梨子は激しい動悸でおかしくなってしまうような胃を殺す

「いえ、ないならいいのです。むしろないほうが・・・」

「・・・ライダーですか」

ダイヤは冷静に、しかし目つきを変えて言った
「いつから・・・」

「最初から。いつを最初とするかと言われたら困りますが」

次の言葉を梨子を選んでみると、ダイヤが先に続けた

「驚くのも当然です。絶望さえするでしょう。あれだけのことをしたのですから」

「そうです！みんな自分を犠牲にして戦ったのに！」

「でも確かに、この世界はあるべき世界ではありません」

「どういうことですか？千歌ちゃんや曜ちゃんはデツキのことを知りません。」

それに、スクールアイドル活動だって始まった。願いがかなって
いるのに！

ダイヤは冷めた緑茶を口に運んでから答えた

「確かに、見かけは理想的な世界です。しかし、2点、あるはずの世界とは異なっているのです」

「2点？」

「まず一つ。本来の世界では、私と果南さんと、鞠莉さんは仲違いするはずですよ。」

それなのに、私たちはスクールアイドルを辞めているとは言えど3人『仲良く』あなたたちの手助けをしています」

「でもそれは、戦いが終わったからで・・・」

「私たちは誰も最後の戦いで、あの日の出来事をやり直したいと願いませんでした」

梨子は思い返す。

ダイヤの言う通り、最後に叶えられたのは梨子の願いだった

3人がすれ違う出来事がなかったことになるはずがない

「そしてもう一つ。私の妹ですよ」

「妹・・・？ダイヤさんに妹なんて・・・」

言いかけた言葉が詰まる

これまで忘れていた記憶の扉が開く

かつて一緒に戦い、姉のために戦った少女がいた

「黒澤ルビィ・・・ルビィちゃん！」

「そうです、この世界にはルビィがいないのです

彼女のことを知っている人も、見た人も誰もいません。私と、思い出したあなた以外に」

「どうしてですか!?!だって彼女は正しい世界でも存在していたんですよ」

ダイヤの表情が変わる

怒りとも、悲しみともとれる複雑な表情

「私たちの戦いの記憶、ルビィ以外にとって理想的な世界。考えられるのは一つです」

ダイヤは部屋に設置された机の引き出しを引いた

中から取り出したのは龍騎のカードデッキ

ダイヤはそれを見ながら言葉を発する

「この世界がルビィによって作られた、ということですよ」

「そんなこと、大体どうして!?!」

「それは私にもまだわかりません。けれど、私のやるべきことだけははっきりしています」

世界を呪えばいいのか、己の弱さを呪えばいいのかわからない

かつての私をもっと別の勝ち方をしていれば、世界は変わったのだろうか

梨子にはわからず、ただしかし、これまでと同じ、否、これまで以上に悲しい戦いが始まる予感がした

ダイヤは言った

「私はルビィを倒します」